

もし室！ ～もしワンピースのナミが室伏もどき著『ゾーンの入り方』を読んだら～

世界の鉄人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンピースのナミが原作前に室伏の著書に出会い独特なトレーニングに目覚めます。室伏本人を出すと規約違反のようなのでドキで。

目次

ナミちゃん自主トレ編

ナミちゃんが室伏の階段を登る時 | 1

室伏もどきの半生 | 5

ナミちゃん、ひたすら指を伸ばす | 13

ナミちゃん、変な声を出し始める | 19

ナミちゃん、川に行つて裸ではしゃぐ | 25

室伏もどき、レッドラインで遊ぶ | 29

室伏国編

人外魔境 | 35

ナミちゃん、人魚の真似をする | 41

ナミちゃん、戦闘訓練をする | 48

たしぎ、波に揉まれナミちゃんにも揉まれ | 56

大切な人だから、遠ざけてしまう | 68

思考の呪縛 | 78

アーロン討伐任務の裏の裏編

アーロン一味崩壊 | 85

解放された者、拘束された者 | 95

異次元の男、ジユウシン | 105

双頭の鷲より高い空を | 120

原作開始・東の海の冒険編

ルフィVSナミ 前哨戦 | 127

バギー一味崩壊 | 141

ルフィVSナミ 意地の戦い | 155

ナミちゃん自主トレ編

ナミちゃんが室伏の階段を登る時

きっかけは思い出したくもない憎い化け物との約束だけど、こうして大事そうに保管された宝箱を目の前になると、大好きなおもちやで遊ぶ子どものように、胸が弾んで時を忘れる。

手先に伝わる小さな振動。金属と金属がぶつかり合う反発力。微妙な角度の違い。時間差。興奮した頭が些細な情報を元に、複雑な鍵穴をいとも簡単に再現していく。

よし、形は分かった。

針金を引き出し、鍵穴に合う形へと変える。そしてもう一度突っ込み、ひねる。

カチャツ。何度聞いてもうれしい聞き慣れた音。

「開いた」

頭は歓喜でいっぱいだが、できるだけ声は隠さなければならぬ。眠っている大男達を起こさないように。

慎重に箱の上部を開き、蠟燭の火を近づける。

さて、お宝ちゃんとの邂逅です。

「ん？ 鉄球？」

ガーン、という音が聞こえそうな程、急速に歓喜が落ちていく。

宝箱が重いから相当な数の金銀財宝が入ってると思っていたのに、安っぽい鉄球だけなんて。なんか鎖みたいなのがついてるけど、それも鉄だし。

はあ。心の中でため息をつく。はあ。まだ気が治まらない。

「はあー……」

とうとう声に出しちゃった。でもそれくらい私は苛立ってるのよ。

投擲海賊団。船長のシツジヨは懸賞金8486万ベリ。イーストブルーの鉄人と言われる大物。ひよっとしたらアロンより恐ろしいかもしれない人間。その船に乗り込んで、見習いとして雑事をこなし、シツジヨと同じベッドで寝て、やりたくもないトレーニン

グを重ねて。

時間をかけて信頼を得て、ようやく船番を任せられるまでになったのに。今までの苦労を返してよ。

せめて名刀だったら価値がつくかもしれないけど、ただの鉄球だし。そもそもこんな重い鉄運べないし。

はあ、もういいわ。シツジョーが大事そうに書いてる日記でも売って金にしましょうか。一応大物の日記だし、マニアに売ればそれなりのお金になるかもね。

シツジョーの部屋に入るのは簡単だ。やつは私と一緒に寝たがる。私に気があるのだ。匂いをかいだり、体を触ろうとする。だけどそれだけ。何故かそれ以上をしようとはしない。本人は「男性ホルモンを刺激して筋肉を増やすため。また筋肉にエネルギーを送るため。美女を目の前に我慢するという科学的トレーニング」なんて言ってたけど、本当かしら？ そんなトレーニング聞いたことないんだけど。まあ知りたくもないけどね。

翌日の夜、私はシツジョーに二人きりで一緒に寝てもいいと言った。シツジョーは子どものように喜んだ。

私は胸元の開いた服を着て、シツジョー手作りのゴツゴツしたベッドに寝転んだ。いつもなら見えるか見えないかのギリギリで男を喜ばせ、その隙に盗んだりするんだけど。シツジョーは真剣な表情で、私の胸にギリギリ当たらないよう手のひらを寄せて、じっと待ち続ける。隙なんてないし、遊びもない。どういう人間なのかしら？

「どうだいナミ。空気を感じるかい？」

「すみません。分かりません」

シツジョー曰く、空気を感じ、操ることができるようになれば、競技能力の質が一段階上がるらしい。私は空を見て空気の動きを感じるのには得意なんだけど、手で感じるのは無理なのよね。というか気体を手で操るって無理でしょ。

「あれ？ 言ってなかったかな。こう、空気を感じ、空気の圧力を動作に生かす。ハンマロビクスのトレーニングの1つだよ」

「あ、あはは。そうでした」

「紙風船を握ろうとして握らないトレーニングやったでしょ。あれと同じ」

「ああ、はい。やりました」

紙風船を両手で押そうとするのだが、実際は微妙に隙間をあげ、紙風船の外側にある空気を両手のひらで感じ、空気を押すにとどめ、紙風船自体は押さないというトレーニング。よく分からなかった。真剣に聞いてなかったしね。

「というか私の胸は紙風船か！ 失礼な！」

「ナミは相変わらずいい匂いだ。男性ホルモンが漲ってくるのを感じる」

「あはははは」

その後もそんなやり取りが続いた。私はしばらく愛想笑いを続けていたが、それも億劫になって、途中から寝たフリをした。シツジョーは「この不規則な形がいいんだよな」と言っ、私の体をまさぐるように手や足を伸ばし、しかし当たらない距離を維持していた。そうして夜中の9時にもなるとさっさと眠った。

私は隙を見てシツジョーの日記を盗み出し、夜も覚めない内に隠しておいた小船で海へ出た。

翌朝、やさしい日差しと共に目覚める。潮風が気持ちいい。

小さな帆船の周り是一片の海。おだやかな波が朝日に照らされて、白くキラキラと光り、新たな船出を祝福しているようだった。

さて、日記を売りに行きましょうかね。どこだと高く売れるかしら？ ああいう人のマニアってどういう人なんだろう？ トレーニングが好きな男？ マッチョ好きなマダム？ うーん、分からない。

とりあえず日記を読んでみましょうか。あまり気が進まないけどね。

ええーっと、あれ？ タイトルにゾーンの入り方って書いてる。何これ。日記じゃないわね。

ふむふむ。競技能力を高める究極の集中力。その引き出し方か。

ちよつと興味あるかも。私の泥棒稼業に役立ちそうだし。真剣に読
んでみようかな。

室伏もどきの半生

「ゾーンの入り方」。序章が長いわね。練習方法は最後の方に書いていて、前半は日記みたいな感じね。

って、え？ この人、魚人よりも速く泳げるの？ 巨人よりも力が強いのか？ 本当に？

いやいや、ありえないって。いくらあのゴリラみたいな筋肉でもありえない。

……でも、本人がそう書いてるし。

うそ臭い。うそ臭い。なんだけど、魚人を上回る人間がいる、みたいに書いてるのを見ちゃったら、読みたくなっちゃうじゃない。

海賊シツジョー。人は俺をどう思っているだろうか。

年配の方は鉄人の息子と記憶しているかもしれない。若い海賊や海兵にとっては厄介な敵だろうか。巨人を超える力、魚人を超える水中速度。覇気と六式を操る天才。

しかし俺は最初から何でもできるわけではなかった。むしろ魚人や巨人に比べれば潜在的な能力は劣っていただろう。ただ、俺は自分の壁にぶつかる度に、それを破ることができたのだ。壁だと思った所が壁ではなかった。

この、壁を何度も越えられる能力。これは俺の特徴の1つと云っていいだろう。この能力を習得する方法については別書「超える力」に詳しく書いた。

本書「ゾーンの入り方」ではもう1つの能力に注目したい。俺を深く知っている人は、ここぞという時に限界を超えたパフォーマンスを発揮する精神力、集中力こそが俺の長所だと言ってくれる。

確かに、仲間が敵に囲まれた時、女性が人質に取られた時、ノックアップストリームで船が完全に壊された時。ここぞというピンチで自分でも信じられない力を発揮し、乗り越えることができた。

ゾーンに入る、などと表現される究極の集中力。その世界に入るための条件とは何だろうか。実は俺自身も体系立った理論を持ってい

ない。本書は俺の半生を振り返りながら、ゾーンとはそもそも何か、ゾーンに入るために何が必要か、考える一助としたい。

俺の両親は海賊だった。

父はイーストブルーの田舎生まれ。もとは世界最強の怪力を目指す海兵だった。人間の中では才能もあったのだろう。海軍支部の頃は敵無し。住民を背に海賊の攻撃を無傷で受けきり、鉄球一撃で船ごと海賊団を沈める。豪快な逸話の数々から、イーストブルーの鉄人と恐れられた。

しかし、世界の壁は厚かった。グランドラインにある海軍本部。そこで力の差を痛感させられた。

伝説と言われる海兵、ガープとの投擲勝負。コントロールこそ父が勝っていたが、ガープは父より10倍も重い鉄球を振り回し、しかも飛距離も4倍は飛んでいたらしい。父はあまりにも大きな差にショックを受け、仮病で3日間休んでしまったほどだったらしい。

それから父は努力し、重さ半分、飛距離半分まではガープに近づいた。しかし年齢から来る衰えもあり、記録は頭打ちになった。

その最中、父は世界最強の怪力という夢を我が子に託すことにした。

父は血統因子の重要性を認識していた。どうしても超えられない生まれ持った才能の違い。特に大事なのが、覇気という不思議な意志の力だと考えた。魚人や巨人の巨体という才能も怪力につながるが、それは父の構想にはなかった。

父は島民全員覇気使いという女ヶ島の女、その中でも選りすぐりの戦士である九蛇海賊団に目をつけた。海兵として何度か戦いを挑み、これだという女を探し、見つけた。それが俺の母だ。

母は皇帝ではなかったし、霸王色や見聞色の覇気は使えなかった。しかし父が求めるのは怪力の才能。怪力と関連の深い武装色の覇気に限れば、皇帝より上か同じくらいの強さがあったという。何より若かったので父は才能を感じたそうだ。

父は母に強く求婚した。母は強い男を好んでいたので喜んで受け

入れた。

しかしこれが海軍及び政府の中で問題になった。

九蛇海賊団と言えば名の知れた悪党。政府や海軍にも犠牲者は出ている。そんな相手と結婚するのは許せなかった。お互い素性を知らないまま偶然愛し合うなら言い訳もできたかもしれないが、父は軍艦を引っさげて何度も戦いを挑んでいたのだ。その中で少なくとも死者も出ていた。その目的が婚活では死んだ者が浮かばれない。父自身は「俺が九蛇と戦ったことで一般人への被害が減ったことも事実」と譲らないが。

ともかく、父は罪人と見なされ、賞金首になってしまった。その額7596万ベリー。父は海賊として生きるしか道がなかった。

そして俺が産まれた。

俺は生まれてすぐに父と母から戦闘の英才教育を受けた。

起きている間はずっとトレーニング。ハイハイや水泳はもちろん、食べるのも言葉を発するのもトレーニングだ。

例えばおっぱいを吸うときに、肺やお腹の力だけではなく、肩やお尻も揺すって全力で吸えば、全身運動になる。言葉は音によって筋肉の動き方が違う。素早く動きたい時には「いええい」、さらに力を入れたい時には「ぎええぎ」、空気に乗るように動く時には「おうおう」と言った感じだ。

寝るときもトレーニングと言っていいかもしれない。落ち着くための呼吸法。回復を早めるための呼吸法とは何か。いろいろ試してみた。また、揺れや転がりを利用して、疲労回復が速くなるようにふとんや手足の配置を考えた。

間違いなく、こんな赤子は他にいない。唯一無二のトレーニングをこなしたと言っただろう。しかし苦しいとか厳しいとか感じたことはなかった。俺は常に全力を出していたし、疲れた時は全力で休んでいた。そうすると精神的にも辛くないのだ。むしろ全力だからこそ色んな失敗が見えてきて、その失敗を乗り越える方法も見えてきて、毎日が楽しいのだ。詳しくは「超える力」を参照。

俺は1歳になる前には物干し竿で懸垂ができるようになっていた。

1歳直後には逆上がり。2歳前には前転とバク転。3歳になると拳で丸太を割り、4歳では大人を背負って砂浜を走り、5歳では指で丸太を貫き、6歳では水面を蹴って走り、7歳では武装色の覇気を習得。取っ組み合いで一般の大人が相手にならないレベルになってきた。

当然のように同世代では敵無し。巨人や魚人の子の強さは分からないが、人間では母の故郷である女ヶ島の子が相手でも勝負にならなかった。

しかし俺にも弱点があった。持久力のなさだ。200mくらいまでは断トツトップで走れるのだが、それ以降は同世代の子に次々と抜かれてしまった。「こんなはずじゃない!」。そう叫んで何度も挑戦したが結果は同じ。俺は負けた経験がなかったこともあり、酷く打ちのめされた。家でふとんに包まりオンオン泣いた。

そんな俺に父は言った。

「シツジョーは瞬発系の筋肉が多いのだろう。持久系の筋肉は生まれながらに少ないんだ。でも怪力に重要なのは瞬発系の筋肉。持久系で無理に競う必要はない」

天狗になっていた俺には父の言葉が身にしみた。誰にも得意不得意がある。力が強いからと言って人間として優れているとかそういう話ではないんだ。そう思えるようになったのはいいことだったと思う。

8歳の頃、ゴールド・ロジャーが処刑された。最強の男の最期だ。未来のライバル達も集まっているはず、ということで父に連れられて見に行った。

最強の男は最後まで破天荒だった。死に際に財宝の存在を明らかにすると、観衆から地鳴りのような歓声が上がった。それは感動的で時代の節目を感じさせるものだったし、父が言うように強者がたくさなんていて独特の緊張感や高揚感があった。が、正直俺は、宝に興味を引かれはしなかった。俺は強さを追及することに楽しさや喜びを感じていたからだ。宝はどうでもいい。

10歳になると、父の付き添いで賞金稼ぎを始めた。強い海賊は主に父が仕留めたが、俺も下っ端と戦った。父は船長や幹部と戦いつつ

も俺の方を気にしていたから、もし危険な攻撃が来ても俺が致命傷を負うことはなかっただろう。しかし実践の感覚は身についた。

父は賞金首だから海軍に罪人を受け渡すことができず、それを代わりに俺がやった。海軍は俺が父の子だと気付いていたが、俺を人質に取るようなことはしなかった。世間体を気にしたのか、父の復讐を恐れたのか、理由は分からない。もともと、海軍支部の海兵の大多数は一般人とそう変わらない。たとえ多数でかかっても俺に勝てなかっただろう。

12歳になると、俺も男の本能に目覚めてきた。

特に母の紹介で昔手合わせした女の子（その島は男子禁制なので当時は女装して入った。12歳では女装しても筋肉骨格でバレる）。俺と同じ年で、長い黒髪で、三姉妹の長女だった。見目美しく、戦闘の才能もピカイチ。これだけでも記憶に残るのだが、何より負けず嫌いで、俺に打ちのめされても決して屈せず、何度も何度も挑戦し、外が真っ暗になっても食い下がってきたことが強烈な印象として残っていた（その時は暗さを利用したヒットアンドアウェイの持久戦で体力を削られ、両者ダウンの引き分けとなった）。

当時からとても美しいと思っていたのだが、性に目覚めたためか、彼女のことが何度も何度も夢に出てきた。日中も妄想が止まらない。トレーニングに集中できない。下半身がどうにもならない。

そんな俺に父は言った。

「シツジョー。筋肉の成長を促す男性ホルモンはキンタマで作られるんだ。チンコが大きくなるのはいい傾向だ。キンタマが元気な証拠。見る見る筋肉が大きくなるはずだ」

そうか。恋さえもトレーニングなんだ。

下半身が天狗になっていた俺には父の言葉が身にしみた。夢に見るほど恋焦がれ、頭は彼女でいっぱいになってしまっただが、その状況こそ最高のトレーニング環境。届かぬ思いは苦痛ではなく快感となった。

実際体は急激に大きくなった。思春期は誰でも伸びるというものもあるが、俺は12歳から15歳で身長160cmから187cmと

なった。体重も55kgから95kgまで増えた。

立派な体格となった俺は、父から武者修行の旅を提案された。グラウンドラインに出ることも許可された。俺は喜んで旅に出た。自分の強さを試してみたいのもあったし、妄想しつくした彼女がどれほど美しくなったか見たかった。

グラウンドラインに出るまでは簡単だった。しかしそこから厳しかった。急に嵐になったり、納まったり。真夏になったりアラレが降ったり。時には船ごと丸呑みにしようとする巨大なクジラや海王類が現れて。緊急回避の衝撃で割れてしまうログポース。高波で見事に真つ二つに割れる船。

俺は船がなくなるとも空中を蹴ったり水面を走って移動できるが、それも体力が続くまで。ログポースを失い方向が分からない中、運が悪ければ溺死していただろう。

幸い俺は運がよかった。近くにいくつか船が見えたので、一番豪華そうな船の側面に捉まり、次の島まで移動させてもらった。船が島へつくと、住民は緊張の面持ちで揉み手をしながら歓迎した。恐怖を隠しているようだった。

船の中から黒服の男たちが出てきて、村長らしき男に指示を出した。村長らしき男は新鮮な食糧や立派な着物が山盛りになった荷台を指差し、それを黒服に差し出した。黒服は当然のようにそれを受け取り、しかしまだ何かを村長に要求した。村長は引きつった笑みを浮かべて揉み手を続けるが、それだけだった。

すると黒服は、突然銃を取り出して村長のこめかみに突きつけた。村長は目をひん剥いて両手を上げ、次いで遠くの山を指差した。黒服は村長の腹を軽く殴り、気絶させて肩に担いだ。

俺は一部始終をジッと見ていた。黒服達は村長が指差した山へと歩いていった。

住民はそれを見届けると、淀んだ顔で方々へと散っていく。俺は腹が減っていたので定食屋に向かった。そこで食べながら店主に尋ねてみた。

「あの黒服の人たち、誰ですか？」

「政府の役人さ。知らないのか？」

「私、最近グランドラインに入ったばかりで」

「何!? まさかお前海賊か!？」

「違います。賞金稼ぎです」

「はあー。若いのに無茶するねえ。つてのは変な言い方か」

「それより、役人はどうして村長を殴ったのでしょうか? 住民の味方のはずでは?」

「聞かないでくれ。深く関わらない方がいい。あまりいい話じゃない」

と言った感じで店主はなかなか話そうとしなかった。

しかし俺は諦める気がなかった。同じ質問を何度も続け、店主を怒らせてしまったが、なんとか聞き出せた。

曰く、最近フィツシャー・タイガーという魚人が天竜人の奴隷を逃がしてしまっただけらしい。それは人として立派なことかもしれないが、天竜人は誰も逆らってはならない権力のトップ。フィツシャー・タイガーは賞金首となり、逃げた奴隷も政府や海軍に追われ、次々と捕まっている。そんな奴隷達の中に、この村に逃げ込んだ人が6人いた。村長は匿おうとしたのだが、何らかの手で奴隷の存在が政府にバレてしまっただけらしい。村長も役人に捕まった。奴隷を隠した罪で殺されてしまうかもしれない。

確かに、嫌な話だった。聞かない方がよかったかもしれない。

俺は良心と自己愛の狭間で悩むことになった。人を救う観点で言えば奴隷を助けるべき。しかしそうすると俺は犯罪者として政府や海軍に狙われることになる。

俺はいまいち踏ん切りがつかないまま、とりあえず元奴隷がどういう状況にあるか知りたいと思い、急いで山へと向かった。

と言っても、厳密な場所は分からず、しばらく山のふもとでうろろろすることになったのだが。しかし不意に爆発音を聞いた。急いでその音の先へ駆けつけると、一人の奴隷と政府の役人が戦っていた。

奴隷と言っても無力ではなく、屈強な男で、かなり強かった。一応一なら役人に勝てただろう。しかし多勢に無勢。屈強な奴隷と似た

力を持つ役人が3人。力は劣るが銃を持つ役人が30人以上いる。

屈強な男以外の5人の奴隷は既に捕まっていて、子どもや美しい女達が「どうして戦うの!? 逃げればいいのに!」「あなただけでも逃げてええええ!」と泣き叫んでいた。しかも、叫ぶ度に「黙ってる」と役人に顔を殴られ、口から血を流す。それでも叫ぶのをやめない。

屈強な男の方も、逃げずに役人と戦い続ける。体がボロボロになっても立ち上がる。目は力を失っていなかった。強く役人をにらみつけていた。

意地だ。男の意地。二度と屈しないという強い決意。

彼等の戦いを目にし、衝撃を受けた。悲しみ、怒り、そして不謹慎だが感動も覚えた。

俺の体は知らないうちに動き始めていた。思考を忘れ、後悔なんて置き去りにし、ただ目の前の戦いに集中していた。

3人の役人と俺とはそんなに実力差がないはずだった。しかし、三人の動きが止まって見えた。次の動きも手に取るように分かった。風が、音が、世界が、教えてくれるのだ。意識が無限に広がるような感覚。死角から飛んで来る銃弾さえかわすことができた。

その戦いの最中、楽しさを感じていたことは覚えている。空を飛んでいるかのような浮遊感があった。しかしハッとした時には、役人は全員気絶して、戦いは終わっていた。正直、どのように倒したか、どれくらい時間がかかったか、全く思い出せない。感覚としては一瞬で終わった感じだったのだ。小さい頃、大好きなプールでトレーニングすると時間が短く感じた。あの感覚に似ていた。

究極の集中力。これをゾーンと呼ぶのなら、俺はゾーンの経験者なのだろう。

ナミちゃん、ひたすら指を伸ばす

あの人のお父さんも海兵だったんだ。ベルメールさんとは重ねたくないけどね。結婚相手、しかも強い女性を探すために海賊と戦うなんて酷すぎる。その求婚を受け入れる奥さんもどうかしてるわ。

トレーニング内容もエグいわねえ。一日中トレーニングばかり。しかも赤ん坊の頃から。

うーん。強さの秘密は理解できたけど、こうはなりたくないわ。食事中もトレーニングなんて頭がおかしくなりそう。

ただ、シツジヨは悪い人ではなさそうね。奴隷を助けるためにやむをえず海賊になったみたいだし。ちよつと共感できるかも。私がアロン一味に入ったのも村の皆を助けるためだったし。

覇気だの下半身天狗だのはよく分からないから無視。

で、ここまで長かったけど、やっとゾーンの記述が出たわね。

ゾーンとはどういう状態か。あくまでシツジヨの体験から予想したゾーンの話だけど「思考が消えて、時間の感覚が消えて、楽しさを感じながら、無意識に体が動き、意識は無限に広がっていく。普段理解できないことが理解できるようになる」か。これは私が宝箱のカギを開けようとする時の感覚に似てるわね。楽しくて時間を忘れちゃう。意識が無限に広がるっていうのは、ちよつと違うかもしれないけど。

でも、そういう感覚もなんとなく分かるわ。例えば天候の変化の予想をする時。私は頭で計算するっていうより、肌で、目で、大気を感じて、その大気の前にある世界の変化を感じて、感じたままの天候を予想として頭に浮かべているのよね。世界を感じる時に意識が無限に広がっていくっていう経験をしているわ。

うん、なんかすつきりした。誰もこういう現象のことを教えてくれなかったから。私はこの能力を当たり前のように使っていたし、そうしないと生きていけなかったのだけど、やっぱり独学では限界があったわ。そもそもゾーンとかそういう技術として考えたことがなかった。だから能力を成長させようって考えもなかったのよね。

でも、この本には不完全だけどゾーンの入り方とか、そのトレーニング方法も書いてある。だから伸ばせるわ。この能力を。しかも、私だから伸ばせるの。大気を感じるとか、ピッキングの集中力とか、私より上手な人を見たことがないから、相当上手い方だと思うの。だからこの才能を生かすために、ゾーンをちゃんと身につけて、向上させたい。そう思えたわ。

自分でもバカらしいんだけど、自分の能力に期待しちやってるのよね。魚人にも通用するかもしれないって。いや、別に武術で魚人に勝てるとは思ってないんだけどね。なんていうのか、別の方向で現状を打破できそうな気がする。

シツジョーも、本当に魚人より強いんだろうなあって、今なら思うわ。だって見てる世界が違うもの。一般人はもちろん海賊とも違う。宝とか名声とかには目もくれず、ひたすら強さを求めているのよね。そしてその過程を心から楽しんでる。魚人の中でも別格であるアーロンより強いかと言われたら、分からないけど、未来のシツジョーは確実にアーロンを超える。それは言えるわ。アーロンは食って寝てるだけだしね。

さて、本の続きを読みましょう。

シツジョーが考えるゾーンに入る条件。

俺は奴隷達を連れて逃げることにした。政府は天竜人の奴隷を盗んだ罪で俺を賞金首にした。海軍や政府に追われる日々が始まった。俺より強い敵はあまりいないが、偶に遭遇することもあった。しかしその度に例によって自分でも信じられない力を発揮でき、誰も失わずに逃げ切ることができた。

そういう生活の中で「ゾーンに入る条件」が徐々に見えてきた。3つ紹介しよう。

1. 全力を出す。
 2. 向上させる何かを認識する。
 3. 過去や未来に対する思考を捨て現在だけに意識を集中する。
1. については、まずは単純に自分で自分が思う全力を出してみ

る。現在の能力を把握する。

2. について。1. で認識した全力は自分が限界だと思い込んで
いる全力である。しかし本当の自分の全力とはそう簡単に出せるも
のではない。必ず不足がある。その不足を認識し、現在の能力を高め
よう、限界を超えようとする意識・意図が2. である。

例えば、俺は新しく入った船員のトレーニングを指導する時に、「指
を全力で伸ばしてみたい」と言う。彼等は簡単なことだと思っ
たろう。胸の前に利き手を上げて、ピッと指を伸ばす。これが何か？
という顔をする。

しかし俺は彼等に「まだ全力を出していない」と言う。彼等は怪訝
な顔で反論する。「もう全力です」と。しかし俺は認めない。「もつと
出せる。もつと強い力で伸ばせる」。彼等は嫌々手の周辺に力を入
れ、筋肉を震わせる。俺はまた言う。「まだまだ足りない。心理的に
も物理的にも余計な拘束がある。本来の君はもつと強い力を出せる」
と。

自分で気付いて欲しいから種明かしはしたくないが、この本には書
こう。

指を伸ばすときに、胸の前で人を指すように伸ばすと、指の付け根
に引っ掛かりが出る。この引っ掛かりのせいで指の第二関節に引っ
かかりが出て、その引っ掛かりのために第一関節にも引っかかりが出
る。これが物理的拘束となり全力を妨げている。

この指の付け根の引っかかりを除くためには、手首の引っ掛かりを
除く必要がある。さらに手首の引っ掛かりを除くためには肘の引っ
かかりを除く必要がある。またさらに肘の引っ掛かりを除くために
は肩の引っかかりを除く必要がある、さらには背骨、首や他の四肢の
先っぽ、内臓の引っかかりも除かなくては、となる。

つまり指を伸ばすという簡単な行為さえも、引っかかりを無くすと
いう観点で厳密に突き詰めていけば、全身による対応が必要になるの
だ。指を伸ばす例において引っかかりの認識が、2. で言う不足の認
識であり、能力を高めようという意図は引っ掛かりを減らそうとする
意図のことである。

戦闘ならば、もつと大きな力を出そう、もつと速く動こう、もつと遠くまで攻撃しよう、などの意識がこれに当たる。芸術ならばより繊細に表現しよう、より感情豊かに表現しよう、などの意識である。上手くいけば意識が無限に広がるような感覚を覚える。浮遊感や楽しさを感じる。

なお、指を伸ばすトレーニングは非常に奥が深く、極めれば丸太に指が刺さるようにさえなる。六式の1つ、指銃につながる。

3. について。過去の思い出にふけったり、未来の予想に頭を悩ましている状態では、そちらに意識が割かれて、現在の問題に対して全思考エネルギーを使うことができない。これでは全身全霊という状態にならず、時間を忘れて無我夢中、という状態になれない。俺が元奴隷の戦闘を見て、思わず助けてしまった時のように、過去や未来に対する思考を捨てる必要がある。

私もやらされたわ。指を全力で伸ばすって言うやつ。こういう意味だったのね。言ってくれたらよかったのに。自分で気付いて欲しかったとか書いてるけど、分かるわけないわ。シツジョーは「まだ全力じゃない。まだ全力じゃない」ってそればかり言ってくるんだもん。「全力出してますー」としか思えないわ。ちゃんと「付け根が引つかかっているから第二関節が伸びない」って説明してくれたら納得できたのに。私は普段から意識が広がるっていう感覚を味わっているしね。3. の時間を忘れるっていう感覚も分かるわ。宝を見たときあの感覚を思い出せばいいのよね。

ちよつとやってみようかしら。指を伸ばすトレーニング。

まずは軽くピツと伸ばす。うん、指の付け根が引つかかっているわね。だからこの引つ掛かりを取るために、手首を伸ばして、肘を伸ばして、さらには肩をこう、上手くひねって持ち上げて、さらには背骨やおなか、頭や手足、指先まで、ピンと伸ばす。

えいっ。

よし、いい感じいい感じ。シツジョーにやらされてた時よりずっと上手く伸ばせたわ。それに、失敗も見えた。次はもつと上手く伸ばせ

るって確信できる。本に書いてある通りね。全力を出せば失敗が見えてくる。それに、楽しい！

手首、肘、肩、背骨、手先足先、伸ばす！ えいつ！

よしよし。さつきより綺麗になった。次はもつと大きく動かす。

手首、肘、肩、背骨、手先足先！

よし。さつきより力強くなった。次はもつと繊細に。

手首、肘、肩、背骨、手先足先！

さつきより整ったわ。次はお腹周りの筋肉も意識して。

手首、肘、肩、背骨、お腹、手先足先、ピーン！

次は呼吸も意識して。

手首、肘、肩、背中、胸、お腹、手先足先、ピーン！

もつとピーン！

もつと速くピーン！

もつと上手くピーン！

もつと強くピーン！

……………はっ。

気付いたら、外が真っ暗になってるわ。お腹も空いてる。喉もカラカラね。朝から何やってんだか。

時間を忘れるってこういうことを言うのね。いきなり「ゾーン」に入れちゃったのかしら。まあ普段からそういう体験はやってたけどね。トレーニングで時間を忘れたのは初めてって感じ。

しかし、我ながら驚かされたわ。指を伸ばすだけのトレーニングがこんなにおもしろいなんて。明日もこればかりやりたいって気分だわ。端から見えていたらバカみたいだろうけどね。まあ海の上じゃあ誰も見てないけど。

早くアローンから村を取り返さないといけないってことは分かってる。でも、泥棒稼業はちよつと中断して、本腰でトレーニングをやってみようと思う。私は今日、たった一日ですっごく成長できた。端から見ると指を伸ばすのが上手くなったただけだけど、違う。私の中で何かが変わった。期待、希望、がわいてきたの。しかも博打とか夢物

語じゃなくて、私ならできる、超えられるっていう自信があふれてくる。

本当にありがとう、シツジヨ。海賊は嫌いだけど今度会ったら感謝の言葉くらい言ってあげるわ。

ナミちゃん、変な声を出し始める

「ヒュッ、ヒュッ」

ふふ。ビシッ、ビシッ、と指が風を切る音が聞こえるわ。ずいぶん成長したわね。

ここまで来るのに3日。長いような短いような。ゾーンに入っているからか感覚的には短いんだけど、年頃の女の子が指を伸ばすことに青春を費やすと考えると長いわよね。まあ楽しめたからいいんだけど。

指伸ばしは本当に奥が深いわ。全然飽きない。もつともつと上を目指せるしやればやるほど上達していくのが自分でも分かる。

単に指を伸ばすだけじゃなくて全身を使っているから、色んな所に力がついて動きもよくなってる。正確に測ったわけじゃないけど確実に走るの速くなってるわ。ちよつと走ってみたら視界の動きが全然違うもの。

意外なことに、この指伸ばし、美容にもいいことが分かったわ。先日、買出しでまけてもらうために、唇を指で撫でて、甘えるような仕草をしたの。そしたら店主どころか女将さんまで見入っちゃって。自分でもびつくりしたわ。なんか一流モデルが男を惑わすみたいに、指が繊細に艶かしく動いたのよ。おかげでご飯は半額で買えたけど、ちよつと気をつけないと悪い男に目をつけられちゃうかもしれないわね。

そう言えば、シツジョーの船も美人ばかりだった。単純に顔がいいだけじゃなくて、立ち姿勢とか単純な所作が洗練されていてすごい大人の女性って感じだったの。私もこの本のトレーニングを続ければああいう風になれるのかしら。

ともかく、指の伸ばしの基本はだいたい身についたから、もう少し難しいやつに挑戦してみるわ。本の続きを読みましよう。

俺は海軍や政府の執拗な追跡から逃れるため、一旦故郷のイースト

ブルーに戻ることにした。イーストブルーは最弱の海と呼ばれるように、海賊も海軍も最も弱いとの噂があったし、良し悪しは別として父の海賊団には海軍支部との癒着があった。長く海兵を務めていたこともあって、海兵時代の友人や弟子が支部のお偉いさんにたくさんいて、彼等は父が海賊になっても敵対することはなかった。だから父の船に行けば滅多なことでは海軍に襲われないし、そもそも戦闘になっても負けない。

一度グラントラインに入った船が再びイーストブルーに戻るのには容易ではない。逆走すればレッドラインが立ち塞がり、横に逸れれば海王類の巣。

俺は一度海王類に船を壊されたこともあり、海王類の巣を渡り切る自信がなかった。よってレッドラインを登ってイーストブルーに戻ることにした。

俺と元奴隷の屈強な男は素手でレッドラインを登り切る体力があったが、他の女や子どもにはなかった。また、レッドラインを降りた後の船をどうするかという問題があった。

結局、俺が船や食料を引っ張りながら登り、他のメンバーはテルのサポートを受けつつ自力で登ってもらうことにした。とは言え現状ではとてもレッドラインを超えられない。しかし海軍は待つてくれない。なるべく効率的なトレーニングを行う必要があった。

そこで俺は、自分の行ってきた数々のトレーニングを思い出しながら、ゾーンに入ることを意識したトレーニング、ハンマロビクスを開発した。その基本コンセプトは、

1. 単純な反復運動をさせない。
 2. 不規則な動きを取り入れる。
 3. 体を慣れさせない。
 4. 感覚が常に内在する運動。
 5. 即興的に対応する運動。
- である。

おっと、間違えたわ。

トレーニングは最後の方のページに載っていたのだったわね。

以下にトレーニングの具体例を挙げる。

基本は初心者レベルだが、上級者でも鍛えるべきものである。

中級は基本に慣れたらチャレンジしてもらいたい。簡単ではないが、全力でやれば数ヶ月で修得できる。俺は船員がレツドラインに挑戦する前に、中級の修得を条件とした。彼等が海軍に対する恐怖から死に物狂いでトレーニングしたこともあり、半年もすれば全員が修得できた。

上級はどれも困難であり、修得には数年か十数年のトレーニングを要する。

・ 指を伸ばす。

(基本) 指の付け根、手首、肘、肩などの全身の引つ掛かりを無くすことを意識して、指を全力で伸ばす。

(中級) 基本を習得した上で、指を伸ばす時の全身の力の流れを利用して、指でジャンプする。最初は斜め腕立て伏せから練習するとよい。

(上級) 指を伸ばす時の全身の力の流れを利用して、丸太を指で貫く。覇気を使えば指の硬さで貫くこともできるが、このトレーニングでは覇気を使わず全身が生んだ力積を指先に集中することで貫く。最初は柔らかい土で練習するとよい。(指銃)

・ 全身で流体を感じ取り、押す。または押される。

(基本) 粘土を手の平に乗せて、落とさないように注意しつつ、できるだけ小さく丸める。目で見ずに手のひらで感じるように意識する。

(基本) 風船に手のひらを近づけ、風船と手のひらの間にある空気の間を感じ取り、押す。風船を押さずに空気だけを押すように意識する。

(中級) 水面は固体のように押せるタイミングがある。それを見極め、水面を蹴って走る。初めは泥水で練習するとよい。

(中級) 水を足で弾き、その弾いた水で丸太を切り裂く。水を固体のよ

うに押し、さらに指を全力で伸ばす時のような理想的な力の流れを足で再現する必要がある。初めは粘土で練習するとよい。

(上級) 空気も固体のように押せるタイミングがある。それを見極めて空気を蹴って空中を自由に飛び跳ねる。水よりも筋力が必要である、固体になるタイミングを感じるのも難しい。(月歩)

(上級) 足で空気を弾き、その弾いた空気で丸太を切り裂く。(嵐脚)

・ 全身で流体の流れを感じ取り、その流体を壁として利用する。

(基本) 呼吸と腹式呼吸の筋肉の使い方を逆転させることで、腹の中で空気の衝突を起こす。それにより身体内部に流体の空間を作り、水中のようなゆらゆらしたりラックス状態を常に発揮できるようにする。最初は複式呼吸から練習するとよい。

(基本) 乱流のある水中を走る。乱流の中で固体のように押せる方向を全身で感じ取り、流れを利用して筋肉を大きく動かしながら走る。

(中級) 逆複式呼吸により空気の衝突が起こるが、その衝突から身体の外側へ流れる力を利用して、人のパンチを弾く。

(中級) 水中で他人にパンチをしてもらい、そのパンチの手と自分の体の中にある水が固体として利用できるタイミングを見極める。そのタイミングで水にパンチを受けさせ、自分の体は水に押されて流されるようにする。自分で自分をパンチしてもいい。

(上級) 逆複式呼吸により身体の外側へ流れる力を利用して、刃物を弾く。筋力が必要になる。初めは木刀など斬られにくい物で練習するとよい。(鉄塊)

(上級) パンチの手と自分の体の中にある空気が固体として利用できるタイミングを見極め、空気にパンチを受けさせ、自分の体は空気に押される。(紙絵)

なお、剃のトレーニングは書かなかつたが、月歩を覚えればそんなに難しいことではない。

上級のトレーニングは覇気と似た部分があり、先に上級を修得しておけば少なからず覇気の修得にも役立つだろう。

盗んだ直後にパラツと読んだ時はほとんど分からなかったけど、今ならよく分かるわ。

身体を流れる力の波。固体のように力積を返す流体の動き。それを感じ取る感受性。私は指を伸ばす中で、全身の波を感じてきた。ナミだけに。なんてね。

まあでも、空気を蹴って空を跳ぶのは現実感がないけどね。シツジョーが空気を固体に感じるって言ってたけど、本当に固体みたいに蹴るのはね。空気の斬撃とかいうのもねちよつと受け入れがたい。

上級は人外地味たトレーニングばかりね。かよわい私じゃまず筋肉が足りそうにない。

あ、でも紙絵はできるかもしれないわ。力ではなく柔よく剛を制すって感じだし。私の得意な流体の感知だし。

中級は……、うん。中級も十分難しいわね。これを半年で修得ってどんな女や子どもなのかしら。才能があつたのかしら。

とりあえず指の中級を練習するわ。初めは指で斜め腕立て伏せをして、徐々に飛んでいけばいいのよね。

斜め腕立てって、手が足より若干上について、斜めになっていればいいのよね？ シツジョーの船でそういうのをやってる人を見たことがあるわ。

ええーっと、その辺の椅子を利用して、えいっ。

痛いわね。これ。思ったより痛い。だけど分かるわ。全身から伝わってくる力の波。それをもっとずっと繊細にコントロールできれば、痛くなくなるって。

どうやら勘違いしていたようね。私は指伸ばしの基本をそれなりに極めたつもりだったけど、頂は遥かに遠かった。

現状の能力で中級の練習すると指を痛めちゃうから、もっと基本を練習しましょう。

「ひゅっ」ビシッ。「ひゅっ」ビシッ。

うーん。これじゃあ力の波はコントロールできないのよね。もっ

とこう、なめらかに。それでいて速く。

「ふんっ」スツ。違う。これじゃあ痛い。「トウツ」フツ。これも違う。「ふっ」シュツ。うん？ 近いかも……。

「ふっ」シュツ。「ふっ」ビュツ。「ふっ」ビュツ。「ふっ」ギュツ。なんかいい感じね。「ふっ」って声を出しつつ、ギュツとかビュツて風切り音が出れば、全身の力がなめらかに指から抜けていくわ。

よし。これでもう一度斜め腕立てやってみるわよ。

「ふっ。うっ」

痛い。痛いけど、さつきよりはずっとマシになったわ。これなら我慢できるくらいの痛み。あんまりやると怪我しそうだけどね。

斜め腕立ては30回くらいでやめときましようか。

「ふっ。ふっ。ふっ。ふっ。ふっ。ふっ。……」

よし、30回終了。これ以上やると痛めそうだから今日は斜め腕立てやめておくわ。基本の練習をしましょう。

指以外の基本もやりたいのよね。ええーっと、粘土、紙風船はないから、呼吸法と乱流で走るっていうのをやりましょう。乱流は水に濡れちゃうから先に呼吸法を。

「ふんっ、ふんっ」

あっ、複式呼吸は簡単にできるし、逆複式呼吸もそう難しくないわ。指を伸ばすトレーニングで、胸やお腹の引っ掛かりを無くすために声を出すようにしていたんだけど、それが役に立ったわ。

ハンマロビクスっていう枠組みもあるし、別のトレーニングでもけっこう関連しているのね。

ナミちゃん、川に行つて裸ではしやぐ

試してみて分かったのだけど、本では逆式呼吸で生まれる力の流れを利用してパンチを弾くと書いてあるけど、この弾く力つて意図的に押す力にも利用できるわね。

逆腹式呼吸で体をゆらして、そのゆれの勢いで指を伸ばす。また足を蹴る。そうするとすごく大きい力が出せるわ。

「ふんっ。ふんっ。ふんっ」

何せ今の私、指を使った腕立て伏せで、5cmくらいジャンプできているもの。

村の皆知つたらおつたまげるわ。私自身も、すごく驚いてる。こんなに力が増すとは思わなかった。いえ、筋力がついたというよりは、女の非力な体でも、上手く使えば屈強な男の人みたいなきるのね。

「うっ。痛いわね」

しかも、まだ指が痛い。つまり力の流れが途中で途切れている。完璧じゃない。

これが完璧になったら、今の筋力のままでも20cmくらいジャンプできると思うわ。でもたぶん、完璧になるには数ヶ月かかるから、その頃には筋力も増えて、もっと飛べるようになってる。楽しみねえ。

もう1つ。今日は乱流の中を走るトレーニングをするつもり。そのために着替えを持って川にやってきたわ。早朝にね。

今日の幅は10mくらい。深さは一番深い所で3mくらい。流れの速さは、見た感じまあまああって所かしら。油断したら大人でも溺れるかもしれないわね。昔の私なら危なかったと思う。でも今の私は、シツジョー流トレーニングで身体操作が上手くなってるから大丈夫よ。まあ今日は泳ぐんじゃないって走るんだけど。

さて、とりあえず層流に逆らうように走ってみましょう。あんまり深いと走れないから30cmくらいで。

冷たっ。海と違って川は冷えてるわね。でもまあ、動けば熱くなる

でしょ。

「ふんっ。はっ。ふんっ。はっ。とっ、ととっ。す、すごい！　すごいすごい！」

思わず叫んじゃったわ。これは本当にすごい。トレーニングとしてすごく効率がいい。水の抵抗が体にガツと来て、強い力を出す練習になるし、意外だったのが足場。丸っこい石が色んな高さや角度で落ちてるから、その時々で接地のタイミングや角度が不規則にやってくる。だから集中しないと上手く蹴れない。難しい。

でもね、それがすごくいいことなの。

ハンマロビクスの基本。

1. 単純な反復運動をさせない。
2. 不規則な動きを取り入れる。
3. 体を慣れさせない。
4. 感覚が常に内在する運動。
5. 即興的に対応する運動。

接地が不規則だから、反復運動じゃないし、不規則な動きだし、体が慣れないし、感覚を内在させないと上手く動けないし、即興的な対応が必要。完全にハンマロビクスを満たしてるわ。

その上で、水の抵抗による筋力アップもあるし、もう1つ。不規則な接地角度だから、蹴る度に体の軸がガタンと揺れるの。この揺れがいいわ。すごい加速度でガタンと揺れるからすごく筋力がつきそうなの。たぶん付くわ。まだやってないけどなんとなく分かるの。

よーし。今日は一日中走り回るぞー。

「ふんっ。はっ。ふんっ。はっ。ふんっ。はっ」

集中集中。足場の変化を感じ取る。層流の微妙な揺れも感じ取る。そして、逆複式呼吸による力の流れも感じ取る。それを、地面にぶつける。

「ふんっ。はっ。ふんっ。はっ。ふんっ。はっ」

大きめの石、その下の小さな石、泥の動きを感じ取る。流れの先を感じ取る。筋肉の揺れ、その先の揺れを感じ取る。

「ふんっ。はっ。ふんっ。はっ。ふんっ。はっ」

もつと繊細に感じ取る。もつと早く感じ取る。もつと強く蹴る。もつと綺麗に蹴る。

「ふんっ。はっ。ふんっ。はっ。ふんっ。はっ」

集中集中。この空間と私の意志を一体化させる。

水の音、泡の音、風の音、呼吸の音。

水の冷たさ、石の硬さ、波の動き、体の動き、筋肉の動き。

自然と一体化していく。溶け合って行く。自然体の私。その中で走る意識。理想の動き。

靴や服は邪魔ね。

指を全力で伸ばしたの時の応用。つま先、かかと、足首、膝、骨盤、背中、お腹、胸、頭、手先足先。引つかかりのない走り動作。

航海の応用。大気の変化を感じ取っている時の、あの感覚。肌に当たる水の流れ、それを生み出すその先の水の流れ、高さの変化。

自然に溶け合い、動く。

感じるままに動く。大気、水、足場。綺麗にゆらめく。

もつと早く、もつと強く、もつと綺麗に。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

楽しい。すごく楽しい。時間を忘れて走っちゃうわ。

指を伸ばす時より疲れるのは早いけど、楽しさはこっちの方が上。だからずっと続けたくなる。初めてプールで遊んだ時の感覚を、さらに上回ってきてるわ。

「ふっふふーん。らんらんらん」

ふふっ。単純に走るだけじゃなくて、強弱をつけてみたわ。踊るよ。うに。時おりぴよーんっ。と飛んだりして。こうするともつと楽しい。もつと上手く動ける。

「ふん、ふんふん。らんらんらん。らんらんらん」

いえーい。のってきたのってきた。

たぶん、これってふつうに走るより効率がいいわ。

本で読んだわけじゃないけど、分かるの。ずっと力を入れっぱなしだと疲れるし、自然な動きにならないの。ハンマロビクスで言う所の慣れるっていう状態に近いかしら。

強弱があると体は自然な状態を保てるわ。

ふふっ。私ってすごい。自分でこういうことに気付いちやうなんて。

結局この日も、気付けば外が真つ暗だった。それに私は裸になっていた。

すつごく疲れたけど、楽しかった。充実していた。

層流は腰まで浸かる高さでも上手く走れるようになった。逆複式呼吸の力の使い方もすつごく上達した。何より意識がすつごく広がる感覚があつて、楽しめた。

あまりにも楽しかったからこの日を後悔するつもりはない。ないんだけど、さすがに裸ではしゃいだのは問題かもしれないわね。私も年頃の乙女だし。おっさんとか海賊に見られたら嫌。いや、羞恥心はない方だと思ってるけど、タダで見られたかもしれないとなると腹立つわね。

一応人気のない場所を選んだつもりだけど、ジャングルってわけではないし、民家にそこそこ近いから、たぶん何人かは近くを通ってた。うーん。

室伏もどき、レッドラインで遊ぶ

へとへとで山道をうろつき、宿を探していると、複数の男に囲まれた。タイミングから考えて、見られていた可能性が高い。川ではしゃいでいたのを。しかし怒る元気もない。

彼等は一様に下衆な笑みを浮かべている。しかし私の気を引きたいらしく、気遣うようなそぶりを見せる。

「お疲れですか？ 私のうちで泊まりませんか？」

「うちにいい肉があるぜ」

「おいしいシチューで体があつたまりますよ」

私は海賊専門の泥棒だ。だけど私の体が目的の男には、躊躇なく制裁を加える。まあ金を盗むだけだけどね。

できればこの場で全員から盗みたいけど、今の体力では逃げ切れな。一番豊かそうで、弱そうな男の家でシチューを食べて、休憩して、とりあえずそいつの金を盗って逃げましょう。

「私、シチュー大好き！ よろしくねお兄ちゃん！」

私は小奇麗な優男の腕に飛びついた。優男は顔を赤くする。

周りの男達は怒り出す。

「えっ。う、うん」

「あつ、てめえ！」

「抜け駆けか！ この野郎め！」

「そ、そんなこと言われたってえ！」

うーん、このままじゃあ行かせてくれそうにないわね。私は早くご飯が食べたいのに。

仕方ない。全員にチャンスを与えるか。

「ケンカはダメ！ じゃあこうしよう！ 皆でご飯食べようよ！」

まあこれは、私に金を盗まれるチャンスだけどな。

「ちっ、仕方ねえなあ」

「まあ、複数で相手するつても……」

男達は下衆な笑みを浮かべて私の提案を受け入れた。

優男の立派な家でおいしいシチューをいただき、大きなベッドで眠

りについた。

いつもなら、こういう時は本当に眠ってしまわないように気をつけるんだけど、今日はさすがに疲れた。30分くらいは豪快に寝させてもらう。

しかしそこで、ドスンと大きな音を聴き、目が覚めた。

「ひっ」

「邪魔すんな!」

「か、彼女は寝てる。後にした方が」

「バカ野郎! だからこそだろ! 何のためにタダ酒を飲ませたんだ! こういうのはあやふやなうちにやっちまうんだよ!」

「そ、そうだそうだ! 早くやっちまおうぜ!」

「オラも賛成だ。ギンギンになっちまって。最初はオラからイカせてくれ」

「なんだと! 俺が一番だ!」

私を襲うか襲わないか、また襲うとしたら誰が一番かでケンカになっっているようだ。

これはファンを装って海賊船に忍び込んだ時によく見る光景。対処には慣れている。まあこの隙に金を盗んで逃げるだけだけど。

カーテンの隙間から手を伸ばす。そつと窓を開ける。風が冷たい。荷物を手に持つ。では、さようなら。

二階から中庭に着地する。土の湿気、小石の衝撃を感じて、力を上手く受け流す。

よし。トレーニングの成果が出た。全く痛くない。

忍び足で庭を移動する。リビングの窓に近づき、中を覗き込む。

あいつらの荷物がリビングに置いてある。数は5。1つ足りないがまあいいだろう。

しかし、鍵が閉まっている。中に入れない。どうしよう。玄関からもう一度入る?

忍び足で玄関の前にやってきた。しかしドアが開かない。ここも鍵がかかっている。

「あいつがない! なんぞだ!」

「もしかして逃げたのか!？」

「お前がデカい声でやりたいとか言うから！」

「オラのせいじゃねえべ！」

そして、私が逃げたこともバレちゃった。でもちよっどいいや。これであいつらが降りてきて、玄関の鍵が開く。そこからもう一度中に入りましょう。

予想通り男達は降りてきて、ドアを開けて外に出た。そして目を血走らせて駆けていった。

私はジツと息を潜めてやり過ごし、もう一度中に入る。荷物の中をじっくり確認。ついでに家の中も物色。金目の物を手に入れてさようなら。

川でトレーニングを始めてから、こういうことが何回も起こった。集中したらどうしても裸になってしまう。興奮した男が集まってしまふ。かと言って服を脱がないことを意識したら集中できない。トレーニングにならない。

一般の男達から逃げるのは簡単だったし、たぶん今の私ならそこらの海賊相手でも逃げられる。だけど、逃げた次の日から男たちが川に張り付いちやうから、事件を起こす旅に拠点を替える必要が出てくる。これが面倒だった。川を探すにも時間がかかる。

川で心置きなくトレーニングするためのちよっどいい拠点。いろいろ考えたが、一番いいのはやはり、あそこになるのかなあ。シツジョーの船に乗せてもらう時に、やつが言ってたのよね。「トレーニングを見て欲しいなら俺より父に頼んだ方がいい。初心者から有名な海兵まで通う大きなトレーニングジムを営んでいる」と。

私はシツジョーの故郷を目指して航海を始めた。本の続きを読みながら。

遙かなるレッドラインの頂き。予想できたことだが、元奴隷の船員

達は疲労困憊。単純に昇るだけでも辛い、酸素の薄さも辛い。加えて、クジラ。ラブーンという名のアイランドクジラがレッドラインにタツクルをしていた。それでレッドラインが壊れるわけではないのだが、大きな振動が起こる。手を滑らせてしまう。

女や子どもが滑って落ちる度に、下にいる俺かショーンが受け止める。全員が落ちてしまつて手が足りない時は、俺が月歩で飛んで回収し、船に乗せていく。これをやるとさすがの俺も体力が削られる。長い休憩を余儀なくされた。

レッドライン登り。この中で呼吸の大切さを痛感した。単純に吸って吐いての話ではない。呼吸において吸いすぎても吐きすぎても上手くいかないように、人体というのは、一方に偏った場合もう一方に揺り戻す行為が必要だと痛感したのだ。振動という考え方もいい。

例えば、起きている時と寝ている時は呼吸のように交互にやってくる。これが乱れると人体が不調になる。

トレーニングでも、10秒全力で走れば1分は休憩が欲しくなる。中くらいの力で20秒走れば3分は休憩が欲しい。弱めの力で40秒走れば10分休憩が欲しい。

こういう静と動の呼吸だ。動が静を誘導する。よく動くからよく休みたくなる。逆に静が動を誘導することもある。力を抜いているから次の瞬間に大きな力を出せる。一瞬の力を発揮する短距離走や投擲にこの考え方は非常に重要になる。

左右の筋肉でも同じことが言える。右ばかりで投げているとバランスが崩れる。左で投げたくなる。前後の筋肉も同じ。前方ばかりに走っていると後ろの筋肉がつつて来る。後方にも走った方がいい。内転筋、外転筋、インナーマッスル、アウターマッスルでも同じこと。俺は崖を上る船員たちに指示を出した。

「無理をするな。自分の感じるままに、動きたい時に動き、休みたい時に休むんだ。その繰り返しが必要なんだ。呼吸のように動きすぎても休みすぎてもいけない」

その瞬間、皆のリズムが変わった。

初めは小さな変化だった。少しだけ、早めに休憩するようになった。しかし俺は、まだ彼等は無理をしていると感じていた。だからもっと休憩を増やした。強制的に、自分の感覚で休みすぎという程休むこともあった。

すると子どもの元奴隷が、自分から「早く上りたい。もう休憩はいらない」と言った。俺も元奴隷達もギョツとした。この子は天竜人に深いトラウマを植え付けられており、常に愛想笑いを浮かべていて、俺の言葉に従うばかりだったのだ。

俺はふたつの意味でチャンスだと思った。トラウマを克服するチャンス。そして呼吸の極意を実に付けさせるチャンスだ。

「その感覚を大事にするんだ。そうすれば世界は明るくなる。登ろう」

そうして登り始めた。先頭を進む子どもは先ほどまでと明らかに質の違う動きをしていた。滑らかで、軽やかで、美しい。

「早く早く」

そう言つて俺達を急かした。その顔は笑っていた。愛想笑いではない。この瞬間を楽しんでいる、ゾーンに入った者が時を忘れて遊んでいるような笑いだったのだ。

俺もこの子の笑顔を見て、救われるようだった。心が晴れやかになった。それだけではなく、今まで見えなかった世界が見えた。

「ありったけの、ゆーめをー♪」

俺は歌を口ずさんでいた。父がよく口ずさんでいる歌を。そしてリズムに合わせて体が動いていた。いや、歌のリズムも体に合わせて変化していた。

体が最も欲するリズム。静と動の変動。大きな動きを求める筋肉。小さな動きを求める筋肉。それに合わせて歌が変化していく。

「ほけつとーのー、こいーん」

子どもも俺に合わせて歌い始めた。とても楽しそうに。俺も同じくとても楽しかった。そして子どももまた、俺のように歌に合わせて体を震わせ、体に合わせて歌のリズムを変えていた。

俺と子どもの筋肉。骨格は全く違う。歌のリズムも異なるはず。

なのに、ある時に歌がぴったり一致した。そして世界がつながった。『楽しい楽しい崖のぼり。しんどいはずなのにおもしろい。辛くない。不思議で変てこ。まるで冒険』

子どもの心の声が、直接聞こえたのだ。

俺は直観的に、それが見聞色の覇気であると気付いた。初めて使えた武装色以外の覇気。俺は戸惑いつつも、子どもとハーモニーを続けた。女達も、うれしそうに歌い始めた。そして彼女等も、動きの質が変わった。軽やかに、不規則に、楽しそうに。

体が何を求めているか、俺たちには分かった。時には妙な動きを求め、それも簡単にこなせた。カニのように横に登ったり、バツタのように跳ねたり。時には頭を下にして登ったり、崖に背を向けて登ったり。それをやる度に疲労が抜けていくのが分かった。この疲労は、使う筋肉の偏りによって生まれたものだから、ゆり戻すように筋肉を使えば、取れたのだ。そういうことも感覚で分かった。

そして俺達は歌いながら、余力をたっぶり残したまま、レッドラインの頂に辿り着いたのだった。

なお、シヨーンだけは恥ずかしくて歌わなかった。動きの質も変化がなく、疲れやすのまま。頂上についた頃には子どもよりもシヨーンの方が疲れているくらいだった。

やっぱり、シツジヨースはすごいわね。歌うように動くっていうやつ。ひよつとしたら私が初めて見つけたと思っていたけど、シツジヨースも知ってたのね。

呼吸の極意、リズム、偏らない体の動かし方。それらを意識しながら船の上でトレーニング。日に日に向上していく私。そして一週間が過ぎた。

やっと目的地が見えた。コージ王国。投擲海賊団の本拠地。島から流れてくる海風に、心なしか、強者の気配を感じた。

室伏国編 人外魔境

遠くからでも見える巨大な王城。その周りを囲む森林。森林が途切れた所にはよく分からないウネウネとした雲が固定されていて、その上をソリに乗った子どもや動物が滑って遊んでいる。さらにその上では鳥と人魚達が空を飛び、速さを競っている。

港には海軍基地があるのだけど、何故か防壁が一切ない。代わりに田畑が広がっていて、屈強な海兵と一般人が共に耕している。

固定される雲、飛ぶ人魚、田んぼを耕す海兵。これだけでも十分狂っている。だけど、海軍基地に隣接する演習場はさらにすさまじい。ある者は剣を振るい、ある者は走り、ある者は踊り、ある者はぐったり横たわる。その誰もが全力。そして目を輝かせている。だから熱気がすさまじい。戦闘の余波はもつとすさまじい。

なんか、ふつうに2人巨人がいるんだけど。1人はふつうの大きさの人間と戦っている。もう1人は海王類と力比べ。このぶつかりあいの音がすごい。海面が震えている。

巨人より小さいけど身長5mくらいの人も10人以上いる。彼等は強いけど、彼等と戦えている一般の大きさの人もいる。

アロンくらい身の身長となると100人はいる。何これ？ 魚人もふつうにいるし、人魚もいるし。

正直、魚人にはまだ嫌悪感がある。だけど、この島を見ると、そんな自分がバカバカしくなってくる。魚人って、ひよつとして常人に近いんじゃないかって思えてくる。

異常。何もかも異常な場所。そりゃあシツジョーが赤子からトレーニング三昧になるわけだわ。

私は驚き過ぎて開いた口がふさがらない状態だった。体は固まったまま、船が島へ近づいていた。

ふと、船の横の海面が盛り上がった。

慌ててそちらを見ると、白いイルカが出てきた。大きさはふつう

だ。ホツと胸を撫で下ろす。

イルカは私の小船を歓迎するように、横に並んで遊泳し、飛び跳ねる。

「お姉さんは海兵？　修行？　それとも単に旅行？　商人には見えなけれど」

訂正。ふつうのイルカではなかった。喋るイルカだった。

「私は海兵じゃないわ。だけど修行に来たの。ジユウシンさんが作ったトレーニング施設があると聞いて」

修行。昔の私なら鼻で笑うだろう言葉。だけど今の私はやる気まんまん。人生って分からないものね。

「修行だね。じゃあ海軍基地の近くに船を止めるといいよ。初心者は農業からだから」

「そ、そうなの？　ありがとう」

初心者の修行は農業。意味不明。だけどシツジョーの父のことだから、何か狙いがあるのでしょね。

というか、海賊なのに海軍と協力してるのね。本にも書いてあったけどさ。でもまさか、海軍の敷地を当たり前のようにトレーニング施設に利用しているとは思わないじゃない。というかトレーニング施設なの？　田畑って。

やってきてしまった。目の前に海軍基地。仮とは言え私はアールン一味なんだけど大丈夫なのかしら？　まあここの海軍は投擲海賊団とズブズブだし大丈夫だとは思うけど。

「入門希望者ですー！」

例のイルカが言う。この子は海を出てから水路を通っている。農業をやっているだけあって水路は至る所に伸びており、この場でイルカが不自由することはなさそうだ。

「ああ、女の子！　うれしい！」

女性の声。田んぼに腰を降ろす海兵が私を見つけて言った。

女性の海兵はゼロではないが珍しい。ベルメールさんも肩身の狭い思いをしていたのだろうか。そう思うとこの海兵を応援したくなる。

黒髪でめがねをかけた女性。彼女は私に近づくと、泥まみれの手で私の両手をギョツと握った。

まあ別に、汚れてもいいけどさあ。

「海兵になるんですか？ なるんですよ！」

「え？ い、いや、そういうわけでは」

「ええっ!? じゃあなんで入門を!? まさか海賊だなんて」

「海賊は嫌いです!」

「ほっ。よかったー」

なんなんだろう、この人。女性に会えてうれしいのは分かるけど、ぐいぐい来るなあ。

「申し遅れました。私はたしぎ。海軍本部の一等兵です！ 初めまして」

「はい。初めまして。私はナミです」

ん？ 今海軍本部って言った？

「あれ？ 海軍本部って、グランドラインの」

「はい。実は上官に頼んで、こちらに一時配属させてもらいました。修行にはうってつけの環境だと聞きました」

「そうだったんですか。というか、私と話していて大丈夫なんですか？ 訓練の邪魔だったり」

「それは大丈夫です。ここの訓練はかなり変わっていて、完全に個人の自由なんです。他人の邪魔をしない限り上官に怒られることはありません。農作業をサボると食事が出なくなりますけどね」

「そうなんですか」

放任主義。私は本を読んで極意を知ったけど、シツジョーは重要なことを教えてくれなかった。ここもそんな感じなのかな。

「たしぎちゃんは頑張り屋さんだからね。もう来月分の食事も十分なくらいに働いてるよ。偉い偉い」

「ありがとう、シゲくん」

「シゲくん?」

「僕のことだよ。自分でつけたんだ。シゲノブって名前」

「シゲノブ? なんか渋いわねえ」

イルカなのよね。

「えっへん」

なんかイルカ喜んでる。渋いって褒め言葉なの？

その後、たしぎさんに連れられて施設を見て回るようになった。イルカもなんかついて来た。

「このトップはワヨウ大佐という方なのですが、「穀潰しに正義を語る資格はない」という考えでして、食料は自分で用意しないとイケないんです。もつとも、田畑の収穫時期は決まっているので、働きに応じて配当は出るのですが」

「へー。そういう考え方もいいかもしれませんね」

「私もそう思います。初めは、農家に任せた方が効率がいい、とも思っていたのですが、それだと農家の人は私たちの分まで余計に働かなくてはいけないことに気付いたんです。他人に苦勞をかけておいて人助けを語るの、ちよつと気がひけます。なので、今ではワヨウ大佐の考えに賛成しています。それに実はトレーニングの効率もいいんです」

そう言うと、たしぎは私から離れていく。そして不意に、ポンと跳ねた。1mくらいは跳んだだろう。見た感じ全力ではないのに、なかなかすごい。常人では不可能。

ジャンプに合わせて田んぼの泥が飛び散る。この泥が私に当たらないように距離を取ったのだろう。

「泥の上で動くのって、けっこう難しいんですよ。体内の力の流れを上手く制御しないと、綺麗に蹴ることができません。やってみてください」

たしぎは自慢げな顔になった。

泥は流体と固体の中間のような性質を持つ。シツジョーの本にも、流体を押しするための初心者用のトレーニングとして、泥の利用が紹介されている。私も川の泥の上で走ったりして、泥の扱いの難しさは知っている。もつとも、今はそれなりに走れるけどね。

私は眼を閉じ、泥の固さ、流体として流れを感じ取る。次には自分の体の呼吸、力の流れを認識し、それを足へと送る。

「ふんっ」

全力のジャンプ。私も1mくらい跳んだだろうか。

「ええっ!? ど、どうしてできるんですか!? 私がここまで跳べるようになるのに2週間はかかったのに」

「いやあ、まあ、私も鍛えてますから」

ふふ、海兵のお姉さんに褒められちゃった。照れちゃう。

でも、お姉さんは2週間で跳べるようになったみたいだし、別に私の才能が優れているわけではないのよね。

「すごいですね、ナミさんは。ひよっとしたら、水面走りも簡単にできるようになるかも」

たしぎはそう言って遠くの川を指差す。10人くらいの海兵や一般人が水面を走る練習をしていた。既に上手に走れている人もいる。

あれが本に書いてあった水面走りか。なんか感動するな。もつとすごいのが上にいるけどさ。

私は王城近くの雲を見る。その雲を縫うように、空を走っている人達がいる。

「ふふ、気になりますか? 私も初めて見たときはびっくりしました。空を蹴って飛ぶ人間がいるなんて。ですが、あれは海軍に伝わる奥義の1つだそうです。月歩と呼ぶそうですよ」

「あれが、月歩……」

楽しそうに飛ぶ若い男女。人魚達も尾ひれを使って上手く飛んでいる。これは月歩と呼ばないだろうけどね。

その下に、上手く飛べずに苦しんでいる人達も見える。しかし落ちても大丈夫。雲の下は湖になっていた。

月歩は本に書いてあったけど、この目で見るとまた違う感情が沸くわね。これが事実だということを受け入れなければならぬ。だけどそれはうれしくもある。私もこうなりたい、こうなれるかもしれないって思えるから。

「泥、水、雲、空。基本はこの順に練習するそうです。ジャンプ、逆立ち、走る、みたいなことを。ふつうの地面や砂利道、森林で走る練習もしますよ。他にも、剣術、棒術、投擲、射撃、の訓練場もあります。ナミさんは何か武器を使われますか?」

「……棒、でしょうか？ あえて言うなら」

「棒ですか!?! でしたら竹刀で模擬戦しませんか!? 私剣士なんです!」

「そ、そうですか。まあ都合が合えばお願いします」

私は武道を鍛えたいわけではないのよね。魚人と戦うつもりならやらなくちやいけないんだろうけど。

「やった! 久しぶりに同じくらいの子との実践形式!」

「同じくらい……」

私の方が3歳くらい若いと思うんだけど。まあいいか。

ナミちゃん、人魚の真似をする

たしぎさんに、米、小麦、だいこん、にんじん、白菜、などなどの育て方を説明してもらおう。だけど覚えきれないし、たしぎさん自身も全てを覚えているわけではないらしい。海軍基地に一般の農家の方も来ているので、困ったら聞けばいいとのこと。

私の大好きなみかんの畑は、王城付近の森林にあるらしい。私は是非そこへ行きたいと言った。が、その前に演習場を通過することになる。その演習を目の前にし、足を踏み入れる前に一言。

「大きい人多すぎいー！」

ポカーンつと見入っちゃうほどの迫力。

巨体から繰り出される豪腕。盛り上がった筋肉と筋肉のぶつかりあい。見ているだけで恐怖心を煽られる。あんなのに当たったら即死だ。

「グランドラインから大きい人が来てますからね。あそこの巨人二人は、あの人の知り合いでして、元海軍本部少将」

「本部少将!? そんな人も来てるの!？」

「まあ、あの人が元中将ですからね」

「あの人？」

たしぎは言いたく無さそうだった。

「ジユウシンのことだよ。ジユウシンは元々海軍の英雄だったけど、世間では海軍を裏切り賞金首になったって話になってる。だから海兵は名前を呼ぶことに抵抗があるんだ。この島では未だに英雄扱いだけどね」

「へえ」

代わりにイルカが答えてくれた。

「はつきり言ってよくない傾向ですよ。犯罪者を英雄視するのは。この人たちはいい人ばかりですがそれだけはよくない」

「そうは言っても、ここの名物と言われる物・人はたいていジユウシンが作り、または連れてきたからね。海兵の農民システム、固定される雲、飛ぶ人魚、人懐っこい海王類、九蛇の女戦士、などなど。ここは

ジユウシンのおかげで繁栄した国。というよりジユウシンが作った楽園かな？ 英雄みたいに思うのも仕方ないよ」

「へえ」

本で読んだ時は、ジユウシンはひたすら強さを求める人なのかと思っただけ、そうでもないみたい。ひたすら自分の好きなことをやりたい、って感じなのかな？

イルカは上機嫌で説明したけど、たしぎには受け入れがたいみたい。なんか怒ってる。

「繁栄。しかし世の中にはお金よりも重要なことがあります」

「別にこの国はお金で繁栄しているわけじゃないよ。色んな種族がいて、色んな遊びがあって、修行に熱心で、その修行もまたおもしろい。だから心が豊かになるって意味の繁栄だよ」

「まあ、そういう言い方もできるかもしれませんが。しかしそれ以上は言わないでください。海賊に妙な感情を持ってしまう。それは間違いなので」

「別に気にしなくていいのに。感情に正しいも間違いもないでしょ。もっと好きに生きようよ」

「もうその話はやめてください！ 聞きたくありません！」

「あーあ、たしぎちゃん拗ねちゃった」

たしぎは怒ってイルカから顔を逸らす。イルカはたしぎの後姿を眺めてから、私に近づいてくる。

「でもかわいいでしょ？ たしぎちゃん。ああやって拗ねちゃう所もさ」

何このイルカ。拗ねる所がかわいい？ まあ、分からなくもないけどさあ。

「なんかあなた、おっさんっぽいわね。イルカなのに」

「渋いと言ってよ」

「いーえ、渋くはない」

若い女の子に悪戯して喜ぶおっさん。そんな感じ。変なイルカよね。

「ナミちゃん、棒術を使うなら、あの人達とか参考になるんじゃない

？」

不意にイルカが言う。イルカが顔を向ける先に、薄着で棒を振るう女性達がいる。ついでにウサギや猫も棒を振っている。というかあれはウサギなのか？ 人間のような骨格だ。悪魔の実の能力者？

「指導してるのがボタン。九蛇海賊団の女帝候補とも言われた人だよ」

「海賊なの？」

「そうだよ。うさちゃんや猫ちゃんは一般のミンク族だけど」

「ミンク族？」

「うさぎとか猫とかの性質を持ったまま人へ進化した者達のことさ。僕もイルカのミンクかもね」

「へえー」

世の中変わった人もいるのねえ。もう驚き過ぎて逆に慣れちゃったわ。

「というか、海兵は大丈夫なの？ 海賊が目の前にいるけど」

私はたしぎに聞こえるか聞こえないかの声量で言う。

「九蛇は大丈夫だよ。王下七武海と言って政府の下にいた海賊の1つなんだ。海軍とは一応協力関係にある」

「そうなんだ。……投擲海賊団は？」

「ジュウシンの妻が九蛇の女帝の叔母に当たるんだ。だから投擲海賊団は九蛇と同盟ってことになってるけど、ジュウシンの息子のシツジョーが天竜人の奴隷を解放しちやってね。シツジョーと元奴隷だけは許せないってことで、賞金首。他のメンバーは曖昧な扱いだよ。まあこの海兵で投擲海賊団を邪険にするのはよそ者くらいだけど」

「シゲくん！ ナミさんに変なこと教えないで下さい！ 海賊の話はもういいです！ 天竜人の奴隷も間違い！ 彼等はお金で雇われた使用人です！」

たしぎが話に割り込んできた。だけど使用人と言った瞬間、近くにいた人達からすごい睨まれた。この国は元奴隷が住んでいるだろうし事情を知っている人達もいるだろう。海兵としては使用人という言葉が正しいが、たぶん実際は奴隷の方が正しいのだろう。私も本で

読んだだけだから実態は知らないが。

「あれ？ 何か怒られているような……。すみません。お邪魔でしたか？」

たしぎは私の手を引いて、逃げるようにその場を去った。

本人は何故怒られたか分からなかったようだ。後で教えてあげよう。でも正面から言えば逆に怒られそうね。何か海軍の正義を信じ切っているし。タイムリングを見計らって、婉曲的に教えればいいのか？

演習場を抜けて、街にやってきた。定食屋、レストラン、カフェ、にへトへトの海兵や一般人が並んでいる。彼等はたくさん食べそうだ。コックは大変ね。

武器屋、お土産屋も繁盛している。武器は海兵や修行に來た人達が買っている。武器だけじゃなくて農業の道具やトレーニングの道具も売っている。お土産屋は他所から來た人達が目立つ。いかがわしい人魚グッズ、珍しい貝殻、珍しい乗り物なんかを買って喜んでいる。「農業の道具を買った方がいいですよ。素手だと慣れないうちは時間がかかります。これとかどうですか？」

私はよく分からないのでたしぎに言われた物を買っていく。ついでに道具を運ぶための荷台も買う。

「フィンも買っておい方がいいよ。泥とか水面を走る練習をするならね」

イルカもついてきた。この街は人魚が自由に移動できるように水路があちこちに張り巡らされている。だからイルカにも動きやすいのだ。

「フィンって何？」

「ああいう靴のことだよ。尾ひれみたいになつてるでしょ？ フィンって言うんだ」

「ふーん」

見ると、全体が魚の尾ひれのようになっている靴が売っていた。フグ型、アジ型、イルカ型、などなどいくつか種類もある。

「初めはアジ型がいいよ。フグ型で走るには力があるんだ」

「そうなんだ」

「たしぎちゃんはフグ型買ったらどう？ アジ型は慣れてきたでしよ」

「そうですね。買いましょう」

「そうして買ひ物は終わる。」

いつもの私なら、こんなに金使いは荒くない。色気を使って男の人からもらおう。だけどたしぎさんに見られているから、そういうことはやりにくいのよね。色々教えてくれてありがたいけどさ。

さて、次に荷物を置く為の宿を探すんだけど、そこでイルカから提案が。

「海軍の女性用の宿舎が空いてるから使うといいよ。タダで寝泊りでききる」

「そうなの？ でも私、海兵じゃないんだけど」

むしろアーロン一味なんだけど。せめて肩の刺青が無ければなあ。

「大丈夫大丈夫。九蛇もそこ使ってるから」

「ええっ？ 無茶苦茶ね」

馴れ合うにも程があるでしょ。今更かもしれないけど。まあ海賊が使ってるなら私が使っても大丈夫かな。

「大丈夫じゃないですよ！ そもそもナミさんは海賊が嫌いなんです！」

あつ、そう言えば私は海賊が嫌いだった。というか海賊と馴れ合う海軍のことも嫌いだっただのよ、実はね。アーロンと手を組むドクズがいるから。

でもここに来てから色んなことがどうでもよくなっちゃった。

「ですから、私の部屋と一緒に寝ましょう！ 今は1人で使ってますが、元は二人部屋！ 広いから大丈夫です！」

「そ、そうですね」

たしぎさんとずっと一緒か。ちよつと暑苦しいかも。まあ悪い人じゃないんだけどね。話しておもしろいし。

「では、お願いします」

密室で若い女性が二人きり。何も起こらないはずがなく、というこ

ともないでしようよ。真面目だからね。たしぎさん。

引き返すのも面倒だから、そのまま森林へ到達。いろんな山菜や果物があり、ここで今日の食糧を手に入れることにした。山芋、菜っ葉、ごぼう、タケノコ、蛇、ミツバチを手に入れた。念願のミカン畑も見ただけ収穫の時期ではなかった。

蛇とミツバチ。正直私は食べたくないが、たしぎ曰くここで生活しているとそういう拘りはなくなっていくらしい。納得してしまう自分が怖い。

今日の所は、私が捕まえた蛇とミツバチはたしぎが食べて、代わりにたしぎが干している魚を私にくれるという。とてもありがたい。やはり持つべきは友。

この時点でくたくたになつていたので、海軍基地には帰らず、湖で食事をすることにした。火は、たしぎがシュババツと薪を切ったら、燃え始めた。剣の黒い部分の摩擦を使ったとかなんとか。完全に人外の技である。

鍋はその辺にあつたやつを借りた。共有で使うための鍋らしい。包丁もあつたけど、たしぎが剣を持ってシュババツと動いたら、食材がいい感じに切れてた。速すぎて見えない。味付けの塩はイルカに持つてきてもらった。

そんなこんなで調理を終えて、湖で優雅にランチタイム。固定された雲を滑る子どもや空を飛ぶ人魚を眺めて、自分も楽しい気分になる。料理の味はそんなに美味しくないけど、お腹が空いていたからほとんどん入った。

そんな中、例のイルカは凄まじい速さで雲を進み、時には突き抜け、そのまま尾を使って空を飛んでいた。こいつ、喋れるだけじゃなくて身体能力もイルカの粋を超えていた。そして皆に人気。これは街でも感じたことだけど。すれ違う人々が「シゲちゃん!」「シゲくん!」「シゲー!」「ハゲー!」などと言って笑顔で声をかける。マスコットキャラみたいな感じだ。特に子ども達に大人気。追いかけられ、餌を投げられたりする。シゲは子どもを頭に寄せ、アシカがボールを飛ばすように、ポーン、ポーンと跳ねさせて遊んだりする。子守もできるイル

力である。

食後は湖で水面走りに挑戦。まずはたしぎのお手本を見学。たしぎは新しく買ったフグ型のフィンでいきなり10歩も走った。

次に私がアジ型のフィンをつけて挑戦。集中、集中。体の力の流れ、波の動きを感じ取る。そこ！

「ふんっ、はっ、ふんっ、ぐっ、ずばあっ」

や、やった！ 4歩も走れた！ なんてこと！ 信じられない！

「すごいですよナミさん！ いきなり水を蹴れました！」

たしぎも驚いている。いきなり蹴れる人は珍しいのだろう。まあ私は、本を読んで奥義を知ってたけどね。

だけど、本で字を見るよりいい手本があるわ。たしぎもいいけど、上にいる人魚はもつといい。ちょうど今の私はフィンっていうひれを付けてるしね。あの空を飛ぶ人魚のように、優雅になめらかに、だけど力強く、蹴る。

「ふんっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ぐっ、ぐぼはあっ」

「すごいです！ 7、8歩は進みました！ 二回目なのにすごい進歩！」

褒めてくれるたしぎ。こういうのがあると、いつもよりやる気が出ていいわね。

そのまま2人で水面走りに熱中した。2人とも走る度に上達し、たしぎはフグのフィンで体力の続く限り走れる状態、私もアジのフィンで体力の続く限り走れる状態になった。たしぎはフィン無しでも3歩くらい走れた。私はフィン無しはまだ無理。フグフィンだと3歩くらい進める。フィン無したしぎとフグフィンの私がちょうど同じくらいだ。

暗くなっただので海軍基地に帰り、たしぎのおごりで晩御飯。貸しにしてくれてもよかったんだけど「初日くらい奢らせてください」と言ってたしぎが譲らなかった。

ナミちゃん、戦闘訓練をする

数週間は農作業中心に生活した。と言っても単に手足を動かすだけじゃなくて、全身を使って力の流れを作って草を抜く、指で耕す、木登りする、川を渡る、というようなことを意識していたわ。

だから基礎的な筋力が上がったし、感受性や身体制御能力も上がってきた。水面走り、水中走り、指ジャンプ、はあまり練習しなかったけど、たまに確認のようにやってみると、上達していたわ。やっぱり基礎を伸ばすと応用も勝手に伸びるものね。一番は筋力の問題が大きかったと思うけど。

さて、ここの生活にも慣れてきた所で、たしぎとの模擬戦を受けることにしたわ。実力が全然違うことは分かっている。基礎能力自体たしぎの方が上だし、彼女は剣を持つとギアが3段階くらい上がる。剣筋は未だに見えない。

だけど、私は気付いたの。剣を振るう時の、お腹の動きは見えてるって。

全身で生んだ力の流れがお腹や手先に伝わる時に、加速度は重さに反比例する。だから手先はとても速いんだけど、お尻、お腹、胸なんかはあまり速くない。私でも見える。そして、このお尻、お腹、胸の動きを見て、力の流れを感じ取れば、手先の動きも感じ取れる。たぶんね。

もともと大気という流体を感じ取り、天候を予想することは得意だった。人間の体は流体と固体の間だけど、泥を理解した今の私ならたぶん感じ取れると思う。そしてそれができればたしぎ相手にこそこ戦えると思う。本来なら遥かに格上の相手にね。それを試してみたい。できないかもしれないけどすごく好奇心がわいてる。だから戦いを受けることにしたの。

と言っても、戦いの日に備えて準備はさせてもらったわ。まずはたしぎ本人から剣術の指導を受けた。女性の力で剣を強く振るための構え。素早い動きをするための呼吸法。そして綺麗な太刀筋の出し方。この全てに今までの修行の内容が凝縮されていて驚いたわ。そ

してうれしくもあった。やっぱり私は成長していたんだなって。全身を使った振り方、呼吸法、力の流れに逆らわない美しい太刀筋。過去の私にはできないだろうことがすんなりできた。

それから、たしぎには悪いけど九蛇のボタンさんから指導を受けた。初めは夜中にこそつと訓練を覗いてたんだけど、見つかつちゃつて。怒られて。わけを話したら（たしぎが海賊を嫌うため海賊から指導を受けると怒られる云々）もつと怒られて、でも指導はしてくれただの。いきなり棒を持たされてボタンさんとの戦闘だったけどね。怪我しないように手加減してくれたとは言え、ボロボロになるまでしごかれた。ダメだしばかりで褒めてくれなかった。「闘志がない」「覇気がない」「才能がない」とね。きつかった。

昔の私ならすぐに逃げ出したでしょうね。武術なんて嫌いだったし。でもその時の私は頑張れたのよ。ボタンさんの言うとおり、闘志もなく、覇気もなく、才能もないんだろうけど、楽しかったから。呼吸法の上達。棒を振るう力の上達。棒を受ける身体の受け流しの上達。こういうのがね。格上のボタンさんとやるといくつも発見があつて、その度に成長できて、楽しいのよ。時間を忘れるほどに。また私はゾーンに入ってしまったのよ。

ところでボタンさん、シツジョーの母なんだったね。見た目30歳くらいだから驚いた。顔とか身長が似てたからお姉さんかなと思つてたんだけど。娘のユリさんと並んでたら本当に姉妹に見えるもの。ともかく、私は戦いのために準備をしてきたの。だから今日は勝つつもりでやるわ。勝算が薄いことは分かっているけどね。

場所は演習場。地面は原っぱ。

たしぎの武器は竹刀で私の武器は木の棒。時間は早朝。周りには私やたしぎをアイドル扱いしている男共。でも気にしないわ。もう慣れた。

たしぎは私に教えた時のように、少し体を捻って頭の上に竹刀を構えている。私は両手で棒を抱きかかえるような感じ。私の方が力が出しやすい構え。スピードは落ちるけどね。

「いつでもいらしてください」

たしぎは仕掛ける気がない。私を指導するつもりのようなようだ。まあ実力差からそうなるだろうけど。

「ではー」

私は飛び込み、相手の間合いに入らないように意識しつつ、棒を振るう。

たしぎは後ろに下がって避けた。私はさらに追撃する。相手の間合いに入らないように意識しつつ。

たしぎは攻撃を避け続ける。それもできるだけ小さい挙動で避けることを意識しているようだ。このままでは私の体力が先に尽きる。

少し力を抜、くっ？

なんてこと。ちよつと力を抜いたその瞬間を分かっていたようにたしぎが突っ込んできた。

だけど見える。

「ふんっ」

お腹と胸の動きから手先の動きを予想する例のやつ。驚いていたからほとんど無意識に予想してガードしたんだけど、本当に成功した。自分でもこんなに上手くいくとは思わなかった。これもボタンさんとの特訓の成果か。

「ふっふっふ」

思わず笑みがこぼれる。うれしい。本当にうれしい。飛び跳ねて叫びたいくらいうれしい。

やったー！ 本当に成功したー！ ってね。棒を持つ手が痺れて痛いけど、それが全く気にならないくらいうれしい。

「しっ」

と、いけないいけない。勝負の最中だった。たしぎがもう一度踏み込んできた。

でもダメだ。喜びすぎた。全く集中できない。

「いたっ」

「油断禁物。一度攻撃を防いだくらいで安心してはいけませんよ」

脳天に綺麗に一撃もらってしまった。痛い。

「くおおおおお」

頭を抱えて座り込む。本当に痛い。怪我しそうな痛さだ。

そう考えると、ボタンさんは滅茶苦茶絶妙な手加減してくれてたんだね。だって翌日には痛みは完全に消えていたから。たしぎはそういう手加減をしてくれないようだ。

「大丈夫ですか？ やり過ぎましたか？」

いや、手加減してくれるのかな？

「大丈夫、です。はあ、はあ」

呼吸を整えつつ、立ち上がる。たしぎはホッと息を吐く。

よし、もう一度だ。今度は一度ではなく二度、三度防ぐ。打ち合いを演じてみせる。

「では、もう一度お願いします」

「はい、こちらこそ」

あ、今はダメだ。呼吸が落ち着かない。理由はさっきの喜び。

「ちよつと待ってください。その前に言いたいことが」

「なんででしょう？」

たしぎは少し不安そうな顔になる。嫌われたかもしれないとかそういう感じの不安。

でも心配しないで。そういう話じゃないの。私は未だにうれし過ぎて、集中できないの。

私は大きく息を吸う。

「たしぎの一撃を防げた！ うれしいいいー！」

たしぎはポカーンと口を空けていた。観客の男たちもポカーンだ。

でも私にとって、これは口にしなければ我慢ならなくらいうれしいことだったのだ。この儀式を通過してやっと平常心を取り戻すことができる。

「よし、次お願いしますー！」

「は、はひっ」

私の奇行に慌てるたしぎ。この隙に攻める。

「くあっ、とうっ」

「ぐっ、くっ」

さっきと違って避けられない。竹刀で私の棒を防ぐたしぎ。これ

は、いけるかも。

ぶつかり合いなら、私の構えの方がパワーで有利。そして今は呼吸のタイミングとか意識とかそういう面でも私が有利。

「とうっ、かあっ、ふんー!」

たしぎが体制を崩した所で、今日最高の大振り。全身の力を棒に込める。

これは避けられまい!

「ぐっ」

ええっ!? バク中で避けた!? それも先ほどよりずっと速い動き。そして荒々しい。

ピンチになって野生が出ちゃったみたいな。

「つえええい!」

「つあっ」

バク中の勢いを利用した払い。狙いは私の棒。

私はたしぎのお腹の動きから攻撃を予想し、棒を手放さぬよう手に力を込めた。しかし、結果は無残なもの。

「ひぎいっ! いったーっ!」

私の持つ棒は鉄球で殴られたような重い衝撃を受けた。その振動を手のひらに直に受けたせいで、とてつもない痛みが。

しかし運がよかった。実はこの時、私の棒はパキンと折れていた。だから衝撃は完全には伝わっていなかったのだ。そうでなければ私の手の骨が折れていたかもしれない。

「すみません。棒が折れてしまいました。私が弁償します」

「あっ、いえ、大丈夫です。私の実力不足のせいですから」

そうして早朝の戦いは終わった。

しかし今日の終わりではない。たしぎの攻撃をほぼ無意識に防いだあの感覚、私はそれをきちんと習得したかった。だからすぐさま武器屋に行き、棒を5つ購入。再び演習場に戻り、再戦。

この戦いでは、私は一度もたしぎの攻撃を防げなかった。たしぎが先ほどのバク中を経て強くなったのもあるが、私が無意識に動けなかったせいでもあった。

私は竹刀で叩かれた痛み苦しみにながら、その理由を考えていた。そして出た結論は、過去に囚われていたから。過去、私はたしぎの攻撃を受け止めることに成功した。その記憶、その感覚を思い出そうとしていた。そのせいで、思考が現在に集中できていなかった。シツジョーの本に書いてあったことと同じ。

次は、過去を考えない。気まぐれな天候を予想する時と同じ。現在だけに集中する。もうこんな痛い思いはしたくないしね。

「せいっ、くっ、はあっ！」

「見える、見え、おっと！」

そして、2度の防御に成功。3度目はたしぎが大きく踏み込んだので、棒で防いでも弾かれると思い、後ろに避けた。

「ふんっ、ふんっ、とうっ」

「ちよっ、それはっ、無理いいいいいい！」

しかし避けた所をたしぎが追いかけてきた。さらに私の逃げる先を狙い澄ますかのような連撃。対応しきれず、肩に一発もらってしまふ。

「痛い痛い！ 痛いよおおおお！」

また叫ぶことになってしまった。

しかし私は気付いた。思ったより痛くなかったということに。反射的に叫んじやつたけど叫ぶほどではなかった。

理由は自分でも分かった。実は肩に一撃もらう直前、咄嗟に体を捻っていたのだ。それで竹刀との相対速度を下げ、衝撃を弱めることに成功していた。これをもっと上手くやれば、痛みはほぼ無くなるかもしれない。棒で受け止める時も同じ、上手く捻ったら衝撃が弱まり、手の痛みが消えるかもしれない。

私は俄然やる気が出てきた。痛みを無くすために痛みが出る行為を試す。矛盾も感じたが、細かいことは気にしたくない。

「もう一度お願いします！」

「喜んで！」

お腹の動きを見る。竹刀の動きを感じる。棒で防ぐ時の力の流れを感じる。そして受け流す。

よし！　あまり痛くない！

「止め方が、変わりましたね！」

「ふふ、ふつ。分かります？」

打ち合いながら話す。互いに笑顔。楽しいからね。

「ではこういうのは、どうですか！」

と、たしぎはフェイントを入れてきた。

今日初めてのフェイントだ。だけど見えてるのよ。私は剣先じゃなくってお腹を見てるの。打ち込む時はお腹がもつと大きく動く。フェイントは動きが小さいわ。

私はフェイントを無視して直後の一撃を防ぐ。

「やりますね。さすがです」

「ふつふつ」

と、たしぎはまた同じようなフェイントを。

私はまた同じようにフェイントを無視、して？

「あいたつ」

あれ？　当たっちゃった。お腹の動きは小さかったのに。

「ナミさんが私のお腹を見ていることは分かっていました。ですからこの動きを小さくしたまま攻撃してみました」
「なるほど」

確かにそうだよ。種が分かれば攻撃できちゃうよね。どうしよう？

「お腹が動いていないから、力も伝わっていない。だからさっきの攻撃はあまり痛くなかった。でも、真剣なら、それでも切られちゃう」
「そうですね。刀ならではフェイントかもしれませぬ。これだから剣術は奥が深くておもしろい」

もう一度再戦。今度はお腹だけじゃなくて、手も見ないといけなのよね。難しいわ。

「あいたつ」

相手のお腹と手に集中していたから、自分の手の受け流しを意識するのを忘れちゃったわ。棒を弾かれちゃった。

そうして訓練は日が落ちるまで続いた。その日は痛みを忘れて動

けたが、翌日は全く動けないほど全身が痛かった。

たしぎ、波に揉まれナミちゃんにも揉まれ

怪我をして寝ている時に考えていた。たしぎと私の違い。

身長も体重もほとんど同じ。筋肉量も大差ない。ジャンプ力や重い物を運ぶ時の力はちよつとだけ負けてるけど、たぶん指ジャンプなら私が勝ってる。でも戦闘となり、武器と武器のぶつかり合いとなると、遥かにたしぎが上になる。パワーも、スピードも、反射速度も。

この違いを生んでいる物は何か。ひとつは呼吸。単純な空気を吸って吐く呼吸じゃなくて、筋肉とか意識の静と動の呼吸のことね。たしぎは剣を持ったら全身がピタリと止まる。静の極みと言えはいのかな。この静の極みがあるから、次に動く時の動のパワーやスピードがすさまじいことになる。私はそう思う。反射速度は、また別の問題かもしれない。剣を持ったたしぎって、野生っぽいマジな表情になるのよね。それがいいんだと思う。

それで、私もこの静の極意を身につけて、もう一ランク上に行きたい。そのためにはたぶん、演習場の隅っこにある乱流の川でトレーニングすれば効率がいい。

乱流の川で動くためには、不規則な水の流れを全身で感じ取って、それと同時に力を入れるべき場所、抜くべき場所を判断しなければならぬ。究極の集中力が必要。これは究極の静につながると思うのよね。水が重いから静の次には動も必要になってくるし。筋力アップも望める。しかも、たしぎの『お腹フェイント手先攻撃』に対応する時みたいな、複数の場所を同時に判断する練習にもなる。

実際、あの川で練習している人を見たことあるんだけど、瞑想みたいにすごく集中して、ピタツと心を落ち着けて、水を操っていた。上級者は筋肉もりもりだった。だから私の考えは合っているはず。すごくいい練習だと思う。早くやりたい。

なのだけど、1つ問題が。

あそこの川って、魚人がいっぱいいるのよね。それも厳しそうな魚人のおじさんが師範みたいなポジション。

1人だけ若い人間の女の子もいるけど、その子は師範の魚人のおじ

さんにずっとついて回っているから、話しかけづらい。気まづきは変わらない。どうしよう?」

いや、まあこんな理由で練習を止める気はないんだけどね。別にアーロンに教えを請うわけじゃないんだから。魚人に偏見を持っていて私が悪いのよ。気にする私が悪い。でも頭で無視しようとしても気になっちゃうの。仕方ないでしょ。アーロンが私にトラウマを植え付けたせいよ。

翌日、体は大分動くようになった。早速たしぎを乱流の川へ誘う。

「大丈夫でしょうか。あそこけっこう速いですよ」

「平気平気。いざとなったら周りの人に助けてもらえばいいし」

「まあそうですね。魚人もいますしね」

でも私、魚人に助けられた時に、きちんとお礼を言えるかしら。

さて、乱流の川に到着。服を脱ぐ。事前に水着を着ておいたわよ。激しい運動が予想されるから、ビキニとかフリフリはない。地味なやつ。

それで、目の前に乱流の川があるわけだけど……。

「すごいですね。この波」

「隅の方なら、大丈夫かしら?」

ここは三方向から流れてくる川がぶつかる場所で、しかも岩を上手く配置して色んな乱流を起こしてる。それだけでも一般の人間にはきついんだけど、魚人や人魚には満足できないみたい。海王類? にはしては小さいんだけど、猫の顔をした大きな海獣に頼んで、川の中で尾ひれをバタつかせてもらい、大きな波を起こしてもらっている。魚人の子どもはその波の上を滑ったり乱流に生まれる渦の中心を潜ったりして遊んでいる。

私とたしぎは不安になりつつも、入水する。波に流されにくくするために互いの体を密着させながら、川の隅の方を歩いてみる。水面の高さは胸のちよつと上くらい。岸までは3mくらい。

しかし、数瞬後。あまり意味がないことを悟った。海獣の起こした大きな波が眼前に迫る。高さ5m以上ある。一気に飲み込まれるだ

ろう。

たしぎの体がびくと跳ねる。私も怖い。でも落ち着かないともっと危ない。

「ひいつー」

「ひゅうっ」

波によるぶちかまし。全身が巨大な水に飲み込まれ、押し流される。

でも予想通り、力を受け流すことはできた。水が当たった痛みはそれほどでもない。

問題はここからよ。水の流れを感じ取り、同時に力を入れる場所、抜くべき場所を判断し、その通りに力を入れる。

集中。集中。全身に伝わる波の流れ。これは空気と同じ流体。だから航海と同じ感覚になれば、理解できる。

よし、狙い通り！ 目に見えなくても通り道が見える！ 水流の通り道が！

あとは、水流の力の流れに全身の力の流れを加えれば、上手く泳げる！ できるはず！ できるはず！

う、重い。さすがに5 m以上の波は勢いがすさまじい。軽く動こうとしてもビクともしない。運動を制御するためにはもっと力を出さない。

だから、静を。より大きな力を出すための、より静かな静寂を。ピタリと止まるような筋肉の弛緩。

落ち着け私。そろそろ息が危ないわ。命の危機よ。いや、この危機さえも利用しよう！ 野生の力も加味！ 我武者羅パワー！ その上で水流の通り道を感じ取って！ いっけええええええええええ！

よし！ 進む進む！ ぐいぐい進むわ！ 苦しいけど、水がとても重いけど。でも動く。近づく。水面が。空気が。

「ぶはあっ、はあっ」

やっと息できた。めちゃくちゃうれしい。生き返る気分。ああよかった。

と思ったのもつかの間、また巨大な波の気配が。

うわー、あのアホ面の猫の海獣、さつきより大きい波を何個も何個も作っちゃってる。

「アホ猫おとおおおお！」

急いで岸へ逃げる。と、足に何か当たった。急ブレーキだ。これじゃあもう間に合わない。あの波に飲まれちゃう。

くそっ、何が当たったのよ。

「すうっ」

大きく息を吸い、水中に顔を入れる。私の足に当たったのは……、

ええっ!?! たしぎの頭!?!

ごめん、蹴っちゃった。

というかヤバそう。たしぎ手足がデタラメに動いてる。もしかして溺れてる？ 息も苦しそう。一度目の波から一度も息継ぎしてないの？

急いでたしぎに手を伸ばす。肩に巻きつく水着をつかみ、引っ張る。そのタイミングでドーンと波の衝撃。

重い。強い。でもこらえる。この手を放してはダメ。

「ぐ、ううっ」

やばっ、ちよつと水飲んじゃった。一気に苦しくなった。

でも、弱気になっちゃダメ。怖がっちゃダメ。集中しないと。今の私の全力を出さないと。この状況を切り抜けることはできない。たしぎを救えない！

そう思った瞬間、目の前に広がる世界が変わった。

分かる。手に取るように分かる。水の動き、私の動き、重さ、どのくらいの力を入れればいいか、そのためにはどのような予備動作が必要か。

たしぎを抱きかかえて密着。自分の体を波打たせれば、たしぎの体も波打つ。足の一かきでグイグイ進む。流体を固体のように押す感覚。無意識が生んだ理想的な動き。乱流が空気のように軽い。いとも簡単に進んでいく。

分かる。力の出し方がすごくいいから、水を軽く感じるんだ。呼吸をせずとも、逆腹式呼吸する時のように、お腹の筋肉を動かすことが

できる。それによって全身の筋肉が深く鋭く動く。胴体から足先手足へ静と動の伝達。それは筋肉や血管の呼吸だ。

これなら行ける。脱出できる。

「つああああああー！」

岸の手前、抱きかかえるたしぎを放り投げる。水の抵抗もあって重かったけど、岸に上げること成功。

後は私、だ、け……。

密着したのは間違いでした。

ナミさんに波がぶつかった時、彼女は後ろに回転しそうになりました。私は咄嗟にナミさんを受け止めようとして、ナミさんの肘を鳩尾に受けてしまった。思わず「うつ」と口が開いたところへ、波のぶちかまし。私は意図せず多くの水を飲んでしまった。しかも波の直撃を受けて体は何度も回転してしまう。上も下も分からない状態。

私は水を飲んだことで一時的に力が入らない状態になっていました。いえ、肺に力が入りすぎて動けないと言った方が正しいかもしれません。よって一旦心を沈め、落ち着きを取り戻そうとしています。しかし一向に波が止まりません。海獣が動き続けているのです。しかもその波の方向は刻一刻と変化する。いつも通りに泳ごうとしても空ぶってしまい、全く進まない。さらにはナミさんの足が私の後頭部に直撃。驚いた私はまた水を飲んでしまう。

ひよっとしたら危ないかもしれない。私はそう思いましたが、すぐに私に気付いたナミさんが助けてくれました。

ナミさんの力では私を運べないかもしれない、とも思いましたが、杞憂でした。彼女は乱流をもともせず、むしろふつうの水中より大きな力で進みます。驚きました。これは努力だけで行えることではありません。瞬時に切り替わる流れの方向に対応する能力が必要なのです。そうでなければ進もうとしても手足が空ぶってしまいます。ナミさんはどうやってこの技術を身につけたのでしょうか。一般人

にはない才能を感じました。彼女は泥の上でいきなりジャンプできたように、時たま才能の片鱗を見せていましたが、武術となると素人とあまり差がないので一般人のように考えてしまっていました。

ナミさんに助けられ、私は岸に上がります。私は頑張つて水を吐き出し、酸素を吸います。

呼吸を整え、ナミさんに感謝の言葉を伝えることにします。

「あれ？ ナミさん」

しかしナミさんはどこにもいませんでした。

ひよつとして波に攫われた？ 私が焦燥に駆られた時、後方から誰かが海に飛び込みます。

危ないと注意する必要はありませんでした。その人は魚人だったからです。

彼はしばらくすると水面に出てきました。肩に力なく揺れるナミさんに乗せて。ナミさんは気絶していたようでした。

魚人、ハツクという方です、がナミさんを地面に降ろします。私は急いでナミさんに駆け寄り、呼吸を確認します。息をしていません。ドキリと緊張してしまいましたが、慌てるのは禁物。心を落ち着け、海軍で習った人工呼吸を行います。

「ぶはあつ、はあ、はあ」

ナミさんは一度目で水を吐き出してくれました。この国で鍛えたことも幸いしたのでしょう。複式呼吸で豪快に吐き出していました。

ナミさんの呼吸が落ち着いていきます。一先ず安心です。私はハツクさんにお礼を言います。

「あの、ありがとうございます。助けていただいたて」
「礼には及ばんよ。当然のことをしたまで」

「いえ、しかし、情けないです。海兵の私が水に溺れる人を助けることもできないなんて」

「うむ。過信があつたのかもしれない」

過信。確かにそうですね。足をつくような場所で溺れるはずがないと思っていました。海獣の起こす波の大きさは予想外でしたが、それにしたつて乗りこなせると。水の重さ、複雑な水流を泳ぐ難しさ、

をナメていました。

「魚人の子どもはああやって遊んでいるが、海獣の作ったこの流れはそう簡単に乗りこなせる物ではない。何せ魚人の子ども達でさえ練習したから遊べるようになったのだ。初めは溺れておったよ。溺れても呼吸はできるがな」

「そうだったんですか」

「私もこういう練習をしている時は何度も溺れたよ。その度にハックさんに助けってもらったけどね」

と、いつの間にかハックさんの横に若い女性がいました。若い女性の人間と中年の男性の魚人のコンビ。目立っていたので名前を覚えていきます。

「あなたは確かコアラさん」

「そうよ。あなたはたしぎさんよね。若い女海兵は珍しいから覚えてたの。それにお話してみたかったわ」

「そうなのですか？」

「うん。そっちのナミちゃんともね。九蛇の子とはよく話すけど、他だと若い女の子がここに来るのって珍しいじゃない。しかも真剣に修行してるしさ。どういう人なんだろうって思ってたね」

「そうですか。しかし私は特に面白みのない海兵ですよ。刀が好きなんですけどこの話は皆さんあまり聞いてくれませんか」

ナミさんも刀の話を真面目に聞いてくれなかった。とてもおもしろいのに。私は悲しい。

刀を除けば私の趣味は修行くらい。ふつうこの話題では女の子と盛り上がることはできませんが、コアラさんもわざわざここへ来て修行している人です。修行は彼女にとっても趣味でしょう。

図らずとも、私たちの話は修行が中心になります。あとは人間関係ですね。

「かっこいいよね。刀をこう、ズバズバって振り回すところ。私もやってみたいわ」

「いえいえ、私はまだまだ若輩者です。コアラさんこそすごいじゃないですか。魚人ではないのに魚人空手を習得して」

「ああそれ、やってみれば分かるわ。魚人だとか人間だとか、あんまり気にしなくていいのよ。やる気があれば誰でもできるわ」

「そうだったのですか。意外でした、もつとも、私にはとてもできそうにありませんが。少なくともコアアラさんのような若さで極意に到達することは難しそうです」

「またまたあ。謙遜しなくなつたつたしきも十分すごいじゃん。自分でも分かつてるでしょ？ 同期の男達より自分の方が強いって」

「いえ、そういう問題ではなく」

などという話を延々と続けていました。ハックさんは横で気まずそうにナミさんの様子を伺っていました。

その時です、私達の傍に別の魚人が近づいてきました。

「あれ？ そいつナミじゃねえか？」

「お前は確か、カンチパ」

「ハックさんお久しぶりです。いつぶりですかね」

カンチパと呼ばれた魚人は30歳くらいに見えます。ハックさんと違い体は弛んでいて、お腹がぽっこり出ています。修行の形跡はありません。今日初めて見た魚人でした。

二人はしばらく思い出話や身の上話をします。魚人島がどうか、仕事はどうか、魚人の彼女を作るためにここにやってきたとか、アーロン一味は抜けてきたとか。そのアーロン一味の話の途中で、彼はナミさんを指差します。

「そうそう！ アーロンさんの話で思い出した！ このナミ、アーロン一味ですぜ！ 驚いた。こんな所まで何しに来てんだか」
「えっ」

この人は、何を言い出すのか。ナミさんが海賊の仲間？ それも魚人の仲間？

「この娘は真面目に修行しておるよ。わしが見る限りはそれだけだ」
「ええっ!? あのナミが？」

「あのと云われても、とても海賊のようには思えんが。それにアーロンは大の人間嫌いじゃないか？ まさか治つたのか？」

「いやいや、あの人は今も人間をゴミや家畜にしか思つてませんぜ。」

ただ、有用な人間は嫌いじゃないんでさあ。ナミは海図書くのが上手いんだ。それを俺たち魚人が使えば海流を操ることだってできちまう」

私は2人の話を耳に話しながら、今までのナミさんの言動を思い出します。

海賊が嫌い。ここへは修行しに来た。ナミさんはそう言うてました。

また、魚人に対しては、どちらかと言うと避けているようでした。その表情に嫌悪感が読み取れて、気にはなっていました。しかし、その感情はアーロンを忌避こそすれ、仲間になるとは思えません。

「でたらめ言わないでください！ ナミさんは海賊嫌いなんです！アーロン一味なわけありません！」

「なんだこのガキは？ いきなり突つかかっけきやがって」

「いや、わしも聞きたい。この娘は本当にアーロンの仲間なのか？」

証拠はあるのか？」

「ハックさんまで。まあ信じられないのも無理はないか。見た感じただのガキだしな。でも、そいつの左肩を見てくたせえ。あつしと同じ刺青があるでしょう？ これがアーロン一味の証拠ですぜ！」

私は嘘であってくれと願いつつ、ナミさんの肩を見ます。

見た瞬間、頭が真っ白になってしまいました。あつたからです。カUNCHIPAと同じ刺青が。

「確かに、アーロンもそんな刺青をしていた気がするな」

ハックさんが苦笑しそうにつぶやきます。私も同じ気分です。いえ、もつと苦しい。

海賊は敵。そう教わってきたし疑いもなく信じてきました。しかし、そうだとすれば、私は苦楽を共にした親友と戦わなければならぬ。

「下手なこととは言えんが、おそらく止むを得ぬ事情があるのだ。そう気を落とす必要はない」

ハックさんが私を気遣うように声をかけます。

私も、同じ意見です。ナミさんが自分から進んで海賊になるとは思

えません。もしや家族が人質に取られているのでは？ それで、仕方なく従ったフリをしているだけでは？ だとしたら、ナミさんは守るべき市民。海賊としての罪に問われることはないはずです。私達はナミさんが目覚めたら真実を問うことにしました。

はっ。寝ていたようね。ここはどこかしら。日差しが眩しいわ。

「ナミさん、意識が戻りましたね」

右からたしぎの声。左にも若い子がいる。魚人と一緒に修行してる子ね。目立つから覚えてるわ。

つと、びつくりした。女の子の隣、例の屈強な魚人のおじさんがいる。やっぱり魚人を見ると反応しちゃうわね。よくないことなんだけど。

ええーつと、それで、私はなんでここで寝てたの？

あつ、思い出した。たしぎを救った所で急に体が重くなつて、そこから記憶がないわね。普段よりずっと大きな力を出したから、脳に限界が来ちやつたのかな。

「ひよつとして私、溺れちゃったのかしら？」

「はい。ここにいるハックさんが助けてくれましたが」

たしぎの視線の先には例の魚人。難しい顔でこちらを見ている。

正直怖い。好きになれない。だけど、感謝はしたい。

「ありがとう。助けてくれて」

言えた。自分でも驚くくらいあっさり。でもいざ言ってみるとなんだってことないわね。

「いや、当然のことをしたまで」

ちよつと恥ずかしそうにするおじさん。照れてるみたい。ゲンさんを思い出す。

うん、そうだよ。魚人も人も同じなんだよね。いい人もいれば悪い人もいる。

心に引つかかっていた物がすうつと落ちていくような感じがする。

私、今なら魚人とも友達になれそうよ。

自然と笑顔になる私。1人で勝手に感動する。過去を乗り越えたこの瞬間に。

「ぷっ、ぷぷぷぷっ」

「ふっ」

あれ？ 何故かハックさんと、コアラさんだっけか、が笑ってる。私の方を見て。私変な顔してたかな？

「たしぎ、私の顔、なんかついてる？」

「いえ、そういうわけでは」

そう言うたしぎは、何故か私から顔を背ける。隠し事をするように。

「ちよつとたしぎ、やっぱり何かついてんでしょ！」

「いえ、違います」

「じゃあなんで視線を逸らすのよ！」

「いえ、それはその……」

私に背を向けるたしぎ。やっぱり何か隠してる。

私は後ろからたしぎ抱きつく。

「何か隠してんでしょ！ 教えなさい。さもないとお」

おっぱい揉んじやうぞ。というかも揉んでるけど。

「ひゃんっ。ちよつ、ナミさん。そこはダメですって！」

「じゃあ教えなさい！ 何を隠してるのか！」

これでもか！ これでもか！

「ダメですダメです！ そういうのは禁止！ それに隠し事なんてありません！ ありませんって！」

と、しばらくじやれていた私とたしぎ。ハックさんは恥ずかしそうに去っていった。

残ったのは私とたしぎとコアラ。

「ねえナミちゃん、その肩の刺青のことなんだけど」

ふと、コアラが言った。瞬間、私の心臓がドキンと跳ねる。

アーロン一味の刺青。まさか気付かれた？ ハックは魚人だし、もしやアーロンと接点があった？

「ちよつとストロップ！」

私はたしぎを解放し、今度はコアラに近づく。

「い、刺青がどうかしたのかなあ？」

ああダメだ。下手な演技。焦ってるのがバレバレね。

「うん。ナミちゃんってアローン一味なの？」

くそつ、やつぱりか。何故バレた。誰がバラした。

「そ、そう思う？ ハックさんの勘違いだったりしない？」

「さつき元アローン一味の魚人が来たの。その人が、ナミちゃんはアローン一味唯一の人間だって」

「えっ」

ちよ、ちよつと待って。アローン一味の魚人が来た？ じゃあ私がここで修行していたこともアローンにバレちゃうの？

「コアラ！ そ、その魚人は今どこに！」

私はコアラの両肩をつかみ、叫んでしまう。失礼なやり方だけど、私も余裕がない。私がお金を集めず修行していることがアローンにバレたら、村が危ない。やつは人間の復讐を許さない。ちよつとでも反抗すれば徹底的に痛めつける残酷な男だから。

「わ、分からない。でも街の方にいると思う。魚人の彼女を作りたいと言ってたから」

「ありがとう！」

聞くや否や、私は走り出す。いても立ってもいられない。早く魚人を見つけて捕まえないと。海に潜られたら追いつけない。

「ちよつとナミちゃん！ どこ行くの！」

「その魚人に会って、話をつけてくる！」

「私も手伝うよ！」

「えっ……」

予想外の提案。コアラとは今日話したばかり。まさか手伝ってくれるとは。アローンが関わる危ない話なのに。

いや、そうでもないか。人探しくらいなら危険もない。

うん、手伝ってもらおう。たしぎも、手伝ってくれるかな？

大切な人だから、遠ざけてしまう

「たしぎも、協力してくれる？」

たしぎは海兵だ。頑固で融通がきかないことも知っている。だからアローン一味だとバレてしまった私に対して、今まで通りに接してくれないかもしれない。

緊張がこみ上げる。友情が崩れ去る恐怖。この状況に対する怒りや悲しみ。

私は酷く不安そうな顔をしていると思う。たしぎもそうだ。不安そうな顔をしている。

だけどたしぎは、不意に笑みを作った。温和な笑み。私を安心させようとしている。

「今は聞きません。捕まえたら教えてくださいね。アローンとあなたの間は何があったのか」

たしぎはそう言っただけで私の方へ駆け出す。

「たしぎ、ありがとう」

本当にありがとう。海兵の模範的な行動より、友情を優先してくれて。私は救われたよ。色んな意味でね。

私、たしぎ、コアラの3人で走る。

コアラ曰く、カンチパはアローン一味を辞めて、真面目に働くことにしたとハックさんに話していたようだ。ここへは魚人の花嫁を探しに来たとも。

でも、きつと嘘だ。カンチパは根っからのチンピラ。下衆な海賊。現在の、遺憾ながらも私達の村から搾取して、魚人たちは遊び呆けるという怠惰な生活。それを自分から捨てるとは思えない。ハックさんやここにいる海兵が怖いから嘘をついたのだろう。

私の予想では、あいつには花嫁を探すような気概もない。たぶん今頃、歓楽街で遊んでいる。村の皆から掠め取ったお金を贅沢に使ってね！

「たしぎ、コアラ。カンチパはたぶん、歓楽街にいる」

「分かるの?」

「ええ、あいつはそういう男よ。というかアーロン達なんて皆、下衆なチンピラよ。会話はいつも酒、金、女、ギャンブル、暴力」

「……そうなんだ」

「ナミさん。やはりアーロンには何か弱みを握られて」

何故だろう。コアラは少し悲しそうな顔になった。

たしぎは、私の事情に勘付いているようね。さすがは親友と言ったところかしら。でも、それ以上はダメよ。親友だからこそアーロンの問題に深く関わって欲しくない。命を落としかねないから。

真つ直ぐ歓楽街にやってきた。若い女三人。しかも皆水着。悪目立ちしてるわね。

道行く男達が私達を嫌らしい目で見て、時には奇声を上げる。昼間なのに酔っ払いもいるわ。

「うひょーっ! 新人か!? ベっぴんさんが3人も!」

「おおーう! マニアックな水着! 深い!」

うー、恥ずかしい。そつち系の店の女の子と勘違いされてるわね。でも着替えてくる暇はないわ。万一取り逃がす可能性を考えるとね。

「ごめんね、たしぎ、コアラ。こんなのにつき合わせちゃって」

「いえ、私は別に」

「ねえ。着替えてきたら、ダメかな?」

と、コアラがさすがに恥ずかしかった。事情を知らないのに、他人の私にここまでついてきてくれただけで奇跡のようなものだ。これ以上を求めるのはさすがにやり過ぎよね。

「コアラ、着替えてきても大丈夫よ。そもそも見ず知らずの私に協力してくれるだけでありがたいから」

「う、うん。ごめん!」

コアラはどこかへ走っていく。たしぎは残った。

「私はこのままでも大丈夫です。急ぎましよう。とは言え、闇雲に走り回るだけでは効率が悪い。カンチパの姿かたちを伝え、似た人を見なかったか街の人に聞いてみましょう」

「そうね。手分けする?」

「はい。その方が効率がいいでしょう」

「たしぎがカンチパを見つけたら、……ええーっと、どうしよう?」

やばい。考えてなかった。私に知らせて欲しいのはそうだけど、どういう理由で呼び止めればいいんだろう。そもそも私はカンチパを見つけてどうやって止めればいいんだろう。力づく?

「私は海兵として取調べを行います。ナミさんの予想では彼は海賊を辞めてないのですよね?」

「うん」

なるほど。海兵としてふつうに逮捕すればいいのか。そうだよ。そもそも海賊を辞めても人を殺した罪が無くなるわけじゃないしね。ジンベエが七武海に入る時に一回罪が帳消しになったそうだけど、その後を重ねた罪は消えてないはずだし。

まあ、この話はやり過ぎると私も逮捕される話になっちゃうからあまりやりたくないけど。

「たしぎちゃん! ナミちゃん! こんな所にそんな格好で! まさか、こつちの世界に目覚めたのかい!」

と、聞き覚えのある声。やばい。知り合いに見られた。

いや、でもこいつ、イルカだ。イルカがなんで歓楽街にいるのか。「僕は悲しいよ。無垢な少女だった君達も、薄汚れた大人になってしまうんだね。でも、おめでどう! 大人になった君達に、この言葉を送るよ!」

「そんな話はどうでもいいから、聞いて!」

「そんな!」

「カンパチの魚人見なかった? 頭が若干黄色くて、お腹がぼっこり出てる。アホ面のおっさん」

「ええー。そいつなら見たけどさあ」

やった! いきなり当たり!

「見たのね! どこに行ったか教えて!」

「いや、こればかりはナミちゃんの頼みと言ってもねえ。お客さんのプライバシーがあるから」

いや、確かに客かもしれないけどさあ。察してよ。

「緊急事態なの！ 教えて！」

「ええー。でも秘匿性の高いハードな店だからなあ」

ハードな店。……もう、想像しちやっただじゃない！ あの汚い魚人が裸で悶える所を！

消えろ！ 今私が想像したこと、記憶から消えろ！

「じゃあ店から少し離れた所で待つことにするわ。それならいいでしょ？」

私もあいつの裸は見たくないからね。店の中に入る気はないわ。

「何？ ナミちゃんあのアホ面の女か何かなの？」

はあ？ 何言っちゃってんの、このバカイルカ。

「それだけはない！ 絶対に！」

その後もイルカは粘ったが、私も粘った。「私達親友でしょ？」「初日以来、ほとんど喋ってもないじゃん」「今度いっぱい遊んであげるから」「でも僕、遊ぶならイルカのお姉さんがいいなあ」「イルカのお姉さんに話つけて連れてきてあげるから！」「ナミちゃん、イルカの言葉分かるの？」「ええーっと、人魚の知り合いがいるから、その人に頼むわ」「そこまで言うなら仕方ない。乗りな。特別サービスだぜ」、などなどの会話があり、店まで連れて行ってくれることになった。

イルカの背中にたしぎと私、2人でまたがる。道行く男達がイルカに対して羨ましそうに声をかける。

イルカは歓楽街の奥へと進んでいく。街の様子も徐々に怪しくなっていく。薄着で客引きしている女達。酒瓶片手に道端で寝ている男。きつい香水と酒の匂い。高価な宝石を身につけた貴婦人。黒いスーツのボディガードに囲まれたいかにも成金な風貌のおじさん。タンクトップの胸元を濡らしたガタイのいい男の集団。賢そうな白衣の男。屈強な海兵達。赤ちゃんにおっぱいを吸わせるやさしそうな若い母。マッサージ店に群がる女の行列。子ども達と遊ぶ先生。

「あれ？ この辺り、急に小奇麗になったわね。店の名前も、マッサージ治療、赤ちゃんトレーニング、指伸ばしの極み、究極腰フリダンス。なんかトレーニング施設みたい。それにあれは、ただの託児所に見える

るし」

「さつき通つたのは一般エリア。こっちはジユウシンエリア。歓楽街だけど、ジユウシンや息子のシツジョーが考えたトレーニング施設が並んでいるのさ。自宅はあれだよ」

ああ、だから指伸ばしがあつたのか。

イルカが示したジユウシンの自宅は、マッサージ店だった。しかも女の子達の行列ができてる。マッサージ師としても一流なのかな？

「ジユウシンは昔から、性の喜びとトレーニングの相性のよさに目をつけていてね。例えばおっぱいを吸う動作は心肺機能の向上に関する理想的なトレーニングになってるし、女性にムラムラすると男性ホルモンが増えるっていう効果がある。この男性ホルモンが筋肉を作るから……」

イルカがペラペラと喋る。この辺は本にも書いてたね。

というか真面目なたしぎはこんな話を聞いて大丈夫なんだろうか。さつきから俯いたまま一言も喋ってないのだけど。

ああつ、たしぎの顔がとんでもない温度になってる！ 熱い！ そしてほっぺたが真っ赤に！

意識は、あるみたいだね。でも必死に耐えているのが分かるわ。いかがわしい物を見ないように、聞かないように。

と、イルカの動きが止まった。

「ついたよ。カンパチの魚人が入つたのはこの店」

店の名前は「人魚の花園」。外観は水族館。まあ魚人か人魚の女が目当てなんだからこういう店になるか。

でも、すつごく大きいわね、ここ。採算合うの？ 人の出入りはけっこうあるけど、店の規模を考えると少ない気もする。料金どうなってるのかしら。

うわっ、高つ。一時間10万ベリー。……腹立って来たわね。村の皆の血と涙が詰まったお金がこんな所で湯水のように消えていく。

とその時、店の中で大きい音がした。肉を思い切り叩いたような音だ。次いで悲鳴が上がった。おっさんの声だけけど。

「いでええええええええ！ くっそ、おめえ！ 女が調子に乗りやがっ

て！ いでででででで！」

「お客様。店内でのお触りは禁止と言ったはずです」

「隣の男は触ってんだろ！ ペチペチ音がしてるじゃねえかあああ
！」

「触ってません。触れるギリギリの所でこらえ、手と女の子の間にある水が、女の子の体を押しているのです」

ああ、これも知ってるやつだ。シツジヨーが私の体でやっていた。触ろうとして触らないっていうやつ。

「んなもん一緒だろうが！」

「お客様、他のお客様に迷惑です。それ以上騒ぐなら追い出しますよ」
「調子に乗んなよ！ おれはあの”アーロン一味”の海賊だぞ！ 死にたくなけぶげえええつ!?!」

えっ？ アーロン一味？ 口論してる客がカンチパだったの？

と思うとほぼ同時、店の中から魚人が勢いよく飛び出してきた。カンチパだ。彼は空中でクルクル回転しながら飛んでいる。私には見える。カンチパを攻撃している空気の流れが。魚人空手に似た技だ。

「アーロン、ねえ。平和な海に逃げ込んできた小物でしょ？」

「さっすが姉さん！ 頼りになります！」

「でも潰しちやうともつたないかも。あいつら金づるとしてはちやうどよかつたから」

と、店から女達も出てきた。一人大きい魚人の女性がいるわね。5m近くある。演習場でもたまに見かける人だわ。たしぎと比べても次元の違う戦いをしてる。

隣にはかわいらしい人魚の女の子が2人。服は着てないけど胸は貝殻で隠れてる。これって人魚にとっての全裸なのかな。ちよつと気になった。

と、女性が私達に気付いた。

「ああシゲノブ、いいところに。そいつ海に捨てといて」

「いっよ」

女性はそう言って、地面に横たわるカンチパを指差す。カンチパは気絶している。

何にせよ、これで一件落着。ホツとした。

「ま、待ってください！ 彼の身柄は私が拘束します！」

と、たしぎが久しぶりに復活。もう顔も赤くない。

「あなたは？」

「めがねの子は海兵のたしぎちゃん。オレンジの子はナミちゃん」

「ナミ？ ああ、思い出した。ジュウシンが言ってたわ。見所があるって」

「えっ」

ジュウシンが、私のことを？ たしぎじゃなくて？

呆然とする私。どうしてあんな大物が私なんか目をつけたのだろう。そもそもまだ会ったこともないと思うんだけど。遠目に見たことはあるけどさ。

「そっちのたしぎも見覚えあるわ。剣を使う子よね。あなたもまあまあ見所あるわ。このまま精進すれば大佐以上も狙えるでしょうね」

「たしぎちゃんはよそ者の中では海軍で唯一の女の子。よそ者には珍しく魚人にもイルカにも偏見がないし、とてもいい子だよ」

「ふーん。あなた、よかったわね。シゲはお世辞を言わないから本当に褒めてるのよ」

「そ、そうですか。それより、彼の身柄は私が預かります！」

「好きにすれば。私は興味ないから」

その後、私とたしぎは魚人を縄で縛り、イルカの家へ向かった。

初めは海軍基地に連れて行こうとしたんだけど、そうすると、私の事情を他の海兵に聞かれちゃうかもしれないからね。イルカはまあ、聞かれても大丈夫でしょ。いや、危ないか？ 口が軽いかもしれない。

イルカの家は、ジュウシンのマッサージ屋の庭にあった。家というか池だけだね。

カンチパを地面に下ろす。私達もイルカの背を降りて陸に上がる。

たしぎがいつにも増して真面目な表情になってる。そうだ。こいつを捕まえたらアーロンについて話すことになっていたんだった。

「さて、ナミさん。聞かせてもらいますよ。アーロンとの間に何が

あつたのか」

マズいなあ。どうしようかなあ。たしぎは、関わってほしくないから、秘密にしておきたいけど。でもカンチパが喋るとバレちゃうからなあ。

「ナミさん、教えてください。何か弱みを握られているのですか？」

たしぎは心底心配そうに私を見る。

うん、間違いない。事実を教えたら必ずアーロンと戦おうとする。適わない相手だと分かっている。

「うーん」

「ナミさん！ 悩みを教えてください！ どんな困難なことでも見捨てたりはしません！ 必ず力になります！」

うーん、それが悩みなのよ。あなたのその人の良さが。

「ナミさん！」

「うーん」

「ナミさん！ 心配しないでください！ 私は海兵です！ 戦う覚悟はできています！」

「それが、なんというか、うーん」

「ナミさん！」

言えない。なんとも言えない。どうすればいいか全然思いつかない。

うー、苦しいわ。大変な修行よりも今の方が苦しい。どうすればいいのよ。

「あつ、そうだ！ コアラ！」

「えっ」

「コアラ探さないと！ 話は彼女が来てからするわ。彼女も聞きたいでしょうしね」

「まあ、確かに。未だに繁華街を探しているなら悪いですし、急いで連れてきましょう」

忘れてたわ。気付けてよかった。コアラを探せば、少し時間を稼げる。その間にどうやってたしぎを納得させつつアーロンから回避させるか考えよう。

ナミさん、シゲノブさん、私に別れてコアラさんを探します。

「服装のせいで男性が声をかけてくることもあり、思うようには進めません。しかし、それはコアラさんも同じだったようです。男性から逃げるように路地へ入ると、コアラさんとバツタリ鉢合わせました。

コアラさんに経緯を説明し、今度はナミさんとシゲノブさんを探します。しかしなかなか見つかりません。時間になっても待ち合わせの場所に帰ってきません。シゲノブさんの池へ戻ってしまったのでしょうか。

コアラさんの付き添いで来ていたハックさんを待ち合わせ場所に残し、私とコアラさんはシゲノブさんの池へ向かいます。しかしその池に行っても、誰もいませんでした。縄で縛っていたはずのカンチパさえも。

「もしや、逃げられた？ ナミさんとシゲノブさんはカンチパを追ってどこかへ行った？」

「2人でそういう話をしていると、ジユウシンの自宅の窓が開き、誰かが出てきます。ジユウシンの子どもでしょうか。筋肉質な若い男性です。」

「お前はたしぎで、そっちはコアラだな。シゲから伝言をもらってる」なるほど、伝言。迷惑をかけてしまいましたね。

「ご迷惑をおかけします」

「いや、気にするな。それで伝言だが、ナミって言うオレンジの女。あいつはアローン一味の幹部だそうだ」

「えっ。いや、しかしそれには理由が」

その理由を聞くために待っていたのに。

「今まで隠してごめんだとよ。ナミは、カンチパを連れて港へ出て行った。まあ運んだのはシゲだけだな。それで、海賊と知られてしまったからには、もう会うことはないでしょうね、だとよ。ナミのやつ、もうこの国には帰ってこないと思うぜ」

「…………どういふことですか？」

若い男の無機質な声。それはただの雑音で、意味を持っていないかのようなのでした。私は彼が何を言っているか理解できませんでした。

……いいえ、違います。私は理解したくなかったのですね。ナミさんと出会ってから、ここでの生活に光が差していた。その光があまりにも心地よくて。女の身ゆえの剣士としての限界という、長年の悩みも全く気にならなくなっていて。

それだけ毎日が充実していました。こんな日々がいつまでも続けばいいと思っていました。それが、唐突に終わるなんて。信じられない。受け入れられない。

私はしばらくの間、呆然と立ち尽くしていました。

思考の呪縛

自ら海賊の元へ行ってしまったナミさん。私はどうすればいいのでしょうか。

できることなら、今すぐ軍艦で追いかけて連れ戻したい。しかしそれは、海兵として正しいと言えない。上官に「ナミさんは被害者」などと報告すれば、「海賊に同情するな」「海賊に絆されるなど海兵失格」「善人を装い近づいてきて、不意打ちを仕掛けてくる。それが海賊だ」などと叱責されると思います。

アーロン討伐自体は許可が出ると思います。しかし海兵の皆さんはナミさんも一緒に攻撃してしまう可能性が高いです。アーロンは強敵ですしね。命がけの戦いの最中に敵か味方が分からない人間に気を使う余裕はないでしょう。

スモーカーさんならあるいは……。いえ、五分五分ですね。私の話は小耳に挟む程度でしょう。あの人はあくまで自分の眼で確認して、やりたいように動くと思います。ナミさんがスモーカーさんに気に入られれば助けられるでしょうし、そうでなければ捕まります。と言っても、スモーカーさんはローグタウンから動けませんけどね。あの人がいなくなれば、町はグランドラインに向かう海賊達に蹂躪されてしまう。

「はあ」

いい考えが浮かびません。憂鬱です。どうしてこんなことになってしまったのでしょうか。

それとも、こんなことを考える私は海兵失格でしょうか？ 状況証拠だけを見れば、ナミさんは今もアーロンの仲間であり、だからカンパチの魚人を手助けた、と言える。しかし私はそれが正しいと思えない。ナミさんは感情を隠せない人でした。私に向けた笑顔。アーロンを語る時の嫌悪感。あれが嘘だとは思えません。よほど辛い事情があるのでしょうか。アーロンに従わざるを得ないような。

これは感情論のようなのでしょうか。おそらく上官は納得しないと思います。やはり私は海兵失格なのでしょうか。

「行かないのか。友のもとへ」

「えっ」

先ほど伝言を話していただいた男性が話しかけてきました。

不意を突かれた気分です。海兵として、また個人の問題として、他人にはあまり関わって欲しくないと思っていました。

一方で、その一言で、私は助けられた気分になっています。

もっと言ってほしい。背中を押して欲しい。内心でそんなことを考えてしまいます。やはり私自身は、海兵としての正しきよりも、感情を優先したいと思っているようです。

しかしそれが間違いだとも思ってしまう。海兵として感情を我慢するべきだと。ですからまだ踏ん切りがつきません。

正しい答えを、教えて欲しい。私の進むべき道を。

私はさすがのような目で男性を見てしまいます。

情けないですね。自分の進む道を自分で決めることもできないなんて。しかも見ず知らずの男性の言葉で揺れてしまうなんて。

男性は私の意図を察してか、深く考えてくれているようでした。私の目をジツと見据え、口を開きます。

「立場、法律、哲学。これらは、人の思考を拘束するための道具だ。だから使い方によっては、人を傷つけることもある。道具が人を救うのではない。人が人を救うんだ」

立場や法律は道具。人を救うのは立場ではない。

驚きました。それはまさに今、私が欲していた言葉だったからです。

「所詮は道具なのだから、本当はお前の心は立場や法に拘束されていない。自由に思うままに生きていけばいい。お前が立場という道具を使いたくないのなら、使わなければいい」

ありがたいです。本当に私の欲しい言葉ばかり並べてくれます。

しかし、許してください。若輩の私が反論することを。

「しかし、法に逆らえば、罰が来ます。世界はそうなっています。もし罰がなければ、人々は法を信頼することができません。さらなる混沌が容易に想像できます」

海賊は罰を恐れているから、隠れて動いています。罰がなければさらに増長することは間違いありません。

「違うな」

しかし、彼は否定しました。

「えっ」

「さらなる混沌になるかどうか。それを決めるのも人だ」

「しかし、海賊は海兵を恐れるから、隠れて犯罪を！」

思わず大きな声を出してしまいました。しかし重要な問題なので思いつきで議論を壊して欲しくないのです。

「法があってもなくても、私刑により裁くことはできる。法はただの道具だ」

「私刑!? それこそ、悲劇の元ですよ！ 確かに法があっても私刑は存在しますが、それは法がない場合に比べれば圧倒的小数になります！」

「私刑もまた、道具。人間は私刑が悲劇になるかどうかを決められる」「しかし、その人間の行動の善悪を決める基準がなければ、ある場合と比べて、さらなる混沌に！」

「だから言っているだろう。善悪の基準も道具。道具があってもなくとも、混沌になるのか、調和するのか。決められるのは人間だけだ」「……なるほど。どうやら話は平行線を辿るようですね。これ以上は時間の無駄と思います」

そう言いつつ、私は議論に負けているような気がしています。

どんな法があっても結果を決められるのは人間。それは反論できないからです。しかしこれ以上彼の話を聞きたくありませんでした。私の信じてきた芯の部分が揺さぶられそうで、怖かったのです。

「ありがとうございます。参考にしてみます」

私はそう言って立ち去ろうとします。しかしふと気付くと、男性は私の目の前にいて、通り道をふさいでいました。

この人は今、一瞬で移動したように見えました。ジユウシンの身内なので予想できていましたが、かなりの強者です。私は思わず身構えています。

男性に敵意は見えません。いえ、少し黒い感情が見えます。嫌らしい顔で笑むのが見えました。

「特別サービスだ。お前を隊長にしてやる。アーロン討伐作戦における、潜入捜査部隊の隊長にな。これなら迷わずナミを救いに行けるだろう」

「ええっ!?!」

いきなり何を言い出すのでしうか、この人は。

提案はありがたいですが、ジユウシンの家族と言えどそんな無茶が通るわけないでしょう。

「そもそもあなたは誰ですか？ あなたにそんな権限がありますか？」

彼が海軍を私兵のように考えてらっしやるので、少し腹が立ち、棘のある言い方になってしまいました。

男性は意外そうな顔をします。

「俺を知らないのか？」

「はい。すみません」

「俺はジユウシンだ。この国を操っている男だぞ」

「ええっ!?!」

ジユウシン？ って、確か60歳近かったような……。彼は20歳後半に見えます。

確かに、熟練の強者の雰囲気は感じますが、それでも60歳弱には見えません。と言うかこの人、自分で言っちゃうんですね。この国を操っているって。

「それでどうなんだ？ 潜入捜査したくないのか？ 怖いのか？」

ジユウシンは嘲るような顔になりました。

「こ、怖いなどと！ 海兵になった時から覚悟はできています！ 平和を守るために、この命を捧げるつもりで戦うと！」

「ふふっ、そうか。だが安心しろ。俺の優秀な部下達がお前の命を守るだろう」

「ちがつ、あなたの部下ではありません！ 今のあなたは海賊！ 部外者です！」

「おいおい、いいのか？ 俺の機嫌を損ねても。ナミが死ぬことになるかもしれないぞ？」

「うっ」

ジユウシンはそう言い、私を睨みます。その瞬間、私の心臓がドクンと跳ね、呼吸が、体が、固まりました。

どうして？ 動かない。息もできない。苦しい。体が、全身が、恐ろしく重い。全く動かない。

恐怖、なのでしょう？ 目による威圧？ それだけで動けなくなってしまう。

実力が、違い過ぎます。私は大蛇に睨まれたカエル。これが、元海軍本部中將の実力。

失敗。相手は現在海賊。勢いに任せて言い過ぎた。このまま殺されるやも。いえ、私はともかく、私のせいでナミさんが死ぬことになるやも。なんてこと。

ジユウシンは、焦る私を見て笑います。

「くくくっ、安心しろ。俺がナミを気に入ってるから助けるんだ。お前のためじゃない」

っと、威圧感が無くなりました。

ナミさんについても本人が助けたいようです。最悪の事態は免れました。嘘かもしれませんが。

「つぶはあ。はあ、はあ、はあ」

と、息もできるようになりました。

「と言ってもな。お前のことも気に入ってるんだ。だから小隊長にしてやるんだ」

「えっ」

私も気に入っている？ どうして？

「ついでにコアラのことも気に入っている。だから活躍の場を用意してやるさう」

「えっ？ 私も？」

「コアラさん……」

……もしや、若い女性なら誰でもいいのでは？

「コアラ。アーロン一味との戦いは、お前のトラウマを乗り越えるチャンスになるだろう。逆にトラウマに飲み込まれる可能性もあるがな。やめとくか?」

「い、いえ。やらせてください!」

コアラさんも事情がある様子。あまり悩まず飛びつきました。しかしこれは問題です。

「コアラさん。アーロンはグランドラインの海賊です。いつもの戦闘とは違う。命がけの戦いになります。腕試しのような気分で参加なさるのは認められません」

「違う! 腕試しじゃないの! 私は、この戦いに参加したい! しなければならぬの! 私が救わないと!」

「救う?」

ナミさんと知り合いだったのでしようか。今日初めて会ったのではなく。それともナミさんに似た友人を亡くしたトラウマがあるのか。

しかし、分かりました。コアラさんの切羽詰った雰囲気。参加したい意志は本物だと思います。

「そこまでおっしゃるのなら、私は止めません」

「たしぎ、ありがとう」

「いえ、そもそも私には、人事を決める権限はないので」

「そうだ。俺に感謝してくれ」

「ジュウシンさん。ありがとう」

「ふふっ」

コアラさん。ジュウシンと馴れ合うのはやめてください。

ああ、さっきの威圧が怖くて声に出せない自分が情けない。

その日の夜、ワヨウ大佐から呼び出しがありました。作戦会議室に行く、ワヨウ大佐と海兵達の他に、ハックさん、コアラさん、”人魚の花園” で見た大きい魚人女性と人魚2人がいます。

「ジュウシンさんから話は聞いたと思うが、アーロン討伐を決行する。諸君は本隊の突入前にアーロンの拠点や周辺の村に潜入し、民間人の安全を確保してもらいたい。情報は人魚達が魚に伝達し、魚がこちら

の人魚に伝達する。また、事前にイルカのシゲノブが潜入し、ナミクんと行動を共にしているはずなので、協力してもらいたい。隊長はたしぎ一等兵」

「は、はいー」

本当にジユウシンの言葉通りになってしまいました。違うのはシゲノブさんの存在でしょうか。

ナミさんを救いに行けるのはうれしいですが、素直に喜べません。この海軍は海賊の私兵団ですから。

「と言っても一等兵が隊長ではしまらんからな。たしぎ一等兵は作戦前日に曹長に昇進することが決まっている」

「はいー」

そんな理由で昇進なんて。なんかもう気にするのもバカらしくなって来た。

「ふつうの船で近づけば魚人達が接近し、破壊されることが予想される。そこで、ハックさんを仲介人とし、人魚達がカンパチの魚人に対して謝罪に来た、という体裁を取る。海兵諸君は人魚達の護衛、また運び役としてついてきたことにしてもらおう。ふつう若い人魚は歩けないのでな。この人魚は歩けるが歩けないという体裁を取る。謝罪の後には、人魚達が街を探索したいと言い、海兵諸君と共に民間人の住む村を歩くという流れだ。そこで民間人の安全を確保してもらおう」

なるほど、難しい任務ですね。あまりのん気なことは言ってられないかもしれませんが。

初めての潜入。相手は人間嫌いの魚人。実力はおそらく私より上。近くには陸であり動けない人魚。この中で、民間人の安全を確保。ナミさんも救い出さなければならぬ。

「作戦はあくまで大雑把な概要だ。現場の瞬間的な判断の方が重要になってくるだろう。たしぎ一等兵、任せたぞ」

「はいー」

返事はしましたが、正直荷が重いです。周りの大人に頼ることになると思います。

アーロン討伐任務の裏の裏編 アーロン一味崩壊

目を覚ましたカンチパに私が助けた旨を説明する。彼は私に感謝を言ってから、女達に復讐すると息まいてアーロンパークへ泳いで行った。このままなら私が裏切り者扱いされることはないだろう。しかし心配なので、一応私もアーロンパークへ向かう。

アーロンパークに着く。まずは、嫌だけどアーロンに挨拶。そして成果を報告。

「失敗したわよ。今回は」

「シャーツハツハツハ！ そうかそうか！ まあ気長に頑張れや！」

特に怒られることはなかった。やはりカンチパは私の裏切りの可能性について報告していないらしい。

そのカンチパは、幹部達に女達への戦いを頼んでいた。しかし幹部達は浮かない顔だ。

「やりましょうや！ いい女達がタダで手に入りますぜ！」

「俺はタコの魚人じゃねえとトキめかねえからなあ」

「アーロンさんが言ってただろ。欲しい女はテメエで手に入れろよ。チュツ」

「クロオビさん！ クロオビさんなら分かってくれるだろ！」

「俺もアーロンさんに賛成だが……。カンチパよ。本当にいい女だったのか？」

「そりやあもう極上ですぜ！」

「うーむ……」

クロオビだけは思案顔だが、幹部1人では何もできまい。今の私なら分かる。彼等の呼吸のリズム（単純な呼吸ではなく筋肉の静と動など）から推し量れる力量。クロオビは多少洗練されているが、例の女魚人には遠く及ばない。同じ魚人なら絶対に勝てない。アーロンだけは魚人の中でも優れたサメなので分からないが。

アーロンパークを出て、自宅に戻る。道中特に問題はなかった。し

ばらくゆつくり過ごすことにする。

修行漬けでちよつと疲労が溜まっている。筋肉は大丈夫なんだけど、なんというか、頭が疲れている。全力のし過ぎという感じ。動くにしろ休むにしろね。この『全力で動き全力で休むという繰り返し』もまた、呼吸として考えれば、次に私は『ぬるく動きぬるく休むという繰り返し』により、この疲労感を拭うことができると思う。『全力の繰り返し』では全身の深い所、脳の隅々まで動かしていた。ある意味では動と言える。『ぬるい繰り返し』では全身の浅い所、脳の一部だけが動くと思う。ある意味では静と言える。こう捉えると、全力生活とぬるい生活は動と静の繰り返しと表現できる。だから今の私は、ぬるい繰り返しをすれば疲労感が取れると考えられる。理論はこんな感じ。

ふふつ。いい傾向ね。本を読まなくても自分の感覚で気付けるわ。私が成長するためにやるべきこと。その理論。これも修行のおかげね。

休もうと思つても習慣は簡単に消えない。体がやりたがつている。だからぬるい動きを意識しながら、軽く指ジャンプ、呼吸法の確認、空気押し、等々をする。

それから農作業へ向かう。庭のみかん畑。ノジコはいるかな？

いた。濃い水色の髪の女。前より小さくなった？ いえ、私が大きくなったのかな。

「おっひさー！ ノジコー！」

「ナミ。頭でも打った？」

珍しく気持ちのいい挨拶をしてあげたのに、ノジコは呆れた様な顔をする。まあこういう姉だと知ってたけどね。

「ふふつ。お姉様、ご老体を押ししてお疲れでしょう。私が代わりにパツとやつといてあげるわ」

「何あんた？ 本当におかしくなったの？ って、うわわっ。危ないじゃない！」

ノジコが座る脚立を持ち上げ、少しズラす。ノジコは危ないと言つたが、今の私はノジコの呼吸を感じ取れる。どうすればバランスよく

動けるか分かる。だから脚立をズラすくらいで危険はないのよ。

私は手足を使い、まるでイモリかヤモリのようにすると木を登る。そしてノジコが切っていた枝へと接近。

「へえー。木登り上手になってるわね」

ノジコはそう言って私に枝切りバサミを貸そうとする。私はゆつくり顔を横に振って断る。不振そうにするノジコ。

私は折るべき枝に狙いを定め、両手をやや開けて持つ。そして、力の波を作るための呼吸。全身を流れる力、木の枝に流れる力の両方を意識しつつ、腕を外側に曲げる。

「ふん！」

パキン。簡単に折れる枝。ノジコは驚いている。

「すつー！ ナミ、あんたゴリラにでも弟子入りしてたの？」

ゴリラ。いいえ、ゴリラよりもずっと力の強い人間です。

「まあ、こんくらの細い枝ならわけないわ。木の幹みたいに大きいと無理だけどね」

それからも素手や足を使ってテキパキと枝を折っていく私。「曲芸みたいね」と褒めてくれるノジコ。途中で蜂や芋虫を見つけたら軽く気絶させてビンに入れる。「もしかして、食べる気？」と気味悪そうなノジコ。木の手入れが終わったら草抜き。ここでも圧倒的な身体能力、身体操作能力を発揮してしまう。「どうしよう。気付いたらナミが知らない人になっていた」若干引き気味のノジコ。草抜きも終わったら森で食材集め。ここも素早い身のこなしと冴え渡る嗅覚で簡単に山菜を集めていく。

さらにはそれらを使った料理。繊細且つ素早い包丁さばき。豪快且つ調和の取れた味付け。

「どうだ！ これが進化した私！ スペシャルナミよ！」

「スペシャルナミ。ぷふっ。でも料理はおいしいわよ」

「ノジコは今、私をバカにするように笑った。だけど今の私は、満たされ過ぎているのよ！ 力に、そして愛に！ だからいくらでもサービスしちゃうのよ！ スペシャルなナミを！」

「ぷいぷいっ」

自分でもバカみたいって分かってる。何を言ってるか分かんないってことも。だけど久しぶりに、こうやってバカをやれているってこと自体が、すごいことなのよ。ベルメールさんが殺されてから、心に全く余裕がなかった。でも今は、余裕ができた。敵はまだ、近くにいるのにな。

過去や未来に囚われず、今を楽しむ。それができるようになったのも今までの修行のおかげ。ゾーンの入り方 3. の派生かしらね。その日は、ゲンさんに色仕掛けをして遊んだり、皆に指ジャンプを披露して驚かせたり、ゲンさんとノジコにジユウシン親子の偉大さを説明したり、ノジコに『ゾーンの入り方』を読んで実演したりした。おもしろかった。

明日は、魚人がいなければだけど、水面走りを披露してあげようと思う。

翌日の朝、私はいつものように指ジャンプから始める。他にも逆複式呼吸で体のバランスを確認したりして、ミカン畑へ。

「みーかんーのはーながー、さあいてーいるー」

歌を歌ったりして、体の求めるリズムに合わせて、踊るように動く。作業の1つ1つが心地いい。

「ご機嫌ね。何その歌？ 自分で作ったの？」

と、ノジコもやってきた。

「ううん。コージ王国のミカン畑に行くと、小さい子達が歌ってた。あそこは歌もいろいろあっておもしろいよ」

「へー。私も行ってみようかな」

「是非行くべきよ。まあでも、私がアールロンに勝てるようになるまで、もう少しかかると思うけど」

「ゲンさんは無理だと言ってたけど、私は信じれるわ。あなたなら勝てるようになるって」

「ありがとう」

「でも、ジユウシンやシツジョーがそんなにすごいのなら、一緒に戦ってもらえばいいのに」

「それは考えたけど、言い辛くてね。いい人達だから、誰も死なないで

欲しいって思っちゃって」

「ナミはいい子過ぎるわね。もっと人を頼るべきよ」

私がいい子過ぎる？ そうなのかなあ。自分では善人でも悪人でもないと思ってた。海賊専門とは言え泥棒やってたし、男に色仕掛けして遊んだりしてるし。

前日は特に問題なく終わった。この日もこのまま過ぎていけばいい。そう思っていた昼頃。突然、村から発砲音が消えてきた。次いで悲鳴。

急いで現場へ向かう。村人達が集まっている。その中心にいるのは、泡を吹いて倒れるアローン一味の見張りど、その原因であろう人達。数は7。見覚えのある顔がチラホラ。今は私服だが、コージ王国にいた海兵達だ。そして最も親しくしていた女性もいる。

「たしぎ！ どうして！」

たしぎも私に気付く。一瞬顔をほころばせ、すぐさま緊張感ある表情に戻る。

「皆さんを助けに来ました！ アローンの支配は今日で終わりです！」

たしぎに続き、周りの海兵達が雄たけびを上げる。なんて力強い発声なの。そして無駄のない逆複式呼吸。皆が皆、ハックさんのように洗練されている。あの島でも上位数パーセントに食い込む実力者ばかりが集まっている。これほど心強いことはない。

「ノジコ。これはたぶん、勝てるわよ」

「彼女がナミの言ってたすごく強い友達？」

「うん。それに、周りの人達は、その友達よりもさらに強い。たぶん1人1人がアローンと渡り合える実力者。だからこれは、勝てる。いけるわ！ 解放されるのよ！ この町は！」

彼等を戦わせることを躊躇していたのは事実。でもいざ戦つてくるとなると、うれしさが勝る。このメンバーなら、誰も死なずに済むだろうと思えるしね。今の私にはだいたいの力量が分かるから。アローンも昨日見てきたしね。

その後、たしぎは村長を呼び、村長はいないので代わりにゲンさん

が出た。

「住民達全員をここに集めてくださいますか？ できるだけ一箇所に集めていただいた方が守りが簡単なので」

「うむ。手分けしてできるだけ速やかに行おう。いずれ騒動に気付いたアーロン達が来るだろうからな」

「ドイさんはゴサの町をお願いします」

「おうよー！」

ドイと呼ばれた海兵と他1名は、消えたと錯覚する程のすさまじい速さで、ゴサへと向かう。さらに別の2名も別の町へ。

「たしぎ、数減らし過ぎなんじゃない？」

なんか不安になってきた。7人揃っていれば勝てるだろうけど、2人では対応し切れないと思うんだけど。

「大丈夫です。すぐに援軍が来ますから」

たしぎは自信ありげに言う。けどこの島って、まず入るのが難しいはずなのよね。魚人が船を壊しちゃうから。

「たしぎ、あなたどうやってこの島に入ったの？ 魚人に襲われなかった？」

「それは……」

たしぎがこれまでの経緯を説明してくれる。

たしぎは潜入班の隊長に選ばれた。潜入班の役目は突入班より一足速く島に潜入し、現地人の安全を確保し、それを突入班に伝えること。突入班は情報が入り次第突入する。よって潜入班は少数精鋭で、突入班は数が多い。

潜入班はもともと、ハックさんや人魚達がカンチパに謝罪する、という形でアーロンパークに入り込むつもりだった。しかしアーロン一味は潜入班の船を囲むと、ハックさんがいたにも関わらず、いきなり攻撃を始めた。人魚を力づくで奪うつもりだったらしい。

もはや話は不可能。作戦は変更される。潜入班は船に集う人魚を退けた後、直接人の住む村へと向かう。突入班は直接アーロンパークへ向かう。という作戦に。

出鼻を挫かれたたしぎは慌てた。しかし、一分もせずにハックさん

の正拳突きが敵のエイのような魚人を捉え、一撃で沈めてしまう。その魚人は敵の幹部だったようで、他の敵は恐れをなしてすぐさま逃げていった。

しかしたしぎ達の船は初めの攻撃で致命的なダメージを受けていた。これ以上の航海は不可能。たしぎは大きな魚人の女性に岸まで運んでもらうよう頼む。その時たしぎは、人間は女性に掴まって、女性が泳いで岸に連れて行く、というつもりで言った。しかし女性は、人間達を一行に並べると、いきなり技を放った。

空気を操り、固体のようにして押し出す技。上手く調整すればその空気に乗って遙か遠くまで飛ぶことができる。似た技が魚人空手にあり、これはジュウシンが編み出した応用技だという（たしぎの発言ではなく別の海兵の補足）。たしぎ達はこの技で空気に乗ってココヤシ村の近くにやってきた。そこでイルカのシゲノブに出会い、この島の現状、アローン一味の強さ、見張りがどこにいるか、などを聞いたという。そして先ほど、たしぎ一行はこの村にやってきた。

「気になるのだけど、シゲノブはアローン一味の強さについて、何て？」

「アローンはコアラさんより少し強いくらい。幹部は私より少し強いくらい。他の魚人はナミさんより弱いそうです」

「は、ははっ」

なんだ。その程度だったんだ。私、ふつうの魚人より強くなっちゃってたのね。

強さの見立てはイルカの勘でしかないけど、たぶん合ってるわ。私もなんとなくだけど、そのくらいかなーって思うもの。呼吸とか筋肉を見ているとね。

ジュウシンさんの投擲により、次々とアローンパークへ降り立つ突入班。私もその1人。だけど突入班はアローン一味に誰も手出ししていない。ハツクさんに止められているからだ。「ここは私に任せて

くれ。魚人の恥は魚人が始末をつける」と。

「全員でかかってこい！ わし1人も倒せんのか！ 小童どもが！」

「俺を殴ったのか？ 下等種族に跪く裏切り者の分際で！」

「ハックさん！ どうして人間の味方を！」

「ハックさん！ 元はと言えば人間が悪いんじゃないか！ 俺たちを差別するから！」

アーロン達がハックさんに不平を言う。しかしハックさんは聞き入れず、拳を叩きつけるのみ。

「くそうっ！ やりたい放題しやがって！」

「アーロンさん、援護する。ちゅっ」

「ああ、任せたぞチュウ。ハチも俺に合わせろ。俺と幹部であいつを倒す」

「わ、分かった。アーロンさん」

「他の同胞達は周りの雑魚共を掃除しとけ！ 俺達の戦いを邪魔してこんとも限らんからな！」

その声で、周りの魚人達が私たちに向かってくる。しかし強者は1人もいない。私達の戦闘は数秒で終わる。

残ったのは幹部とアーロンのみ。ハックさんとの戦い。

「ハチッ！ 何故戦う！」

「うっ」

「お前は人間だからと言って、全員を悪者扱いするような男ではなかったはずだ！」

「そ、それは……」

「ハチ！ 裏切り者に耳を貸すな！」

「チュウ！ お前は芯がない！ 心が弱い！ だから弱いままなんだ！」

「なんだとお！ このっ！」

ハックさんは説教しながら戦うつもりのようにだった。なんだかなだ彼等を見捨てていないらしい。彼等の心を。

「そしてアーロン！ お前の覚悟はこんなものかあ！」

「クソッ、老害めえ！」

戦いは終始ハックさんが押していた。勝負がつくのも時間の問題。まず戦意喪失したハチが正拳突きを食らい、ダウン。次にチュウが口で放った水鉄砲を、ハックさんが手で掴まえ投げ返し、それがチュウに当たってダウン。最後にアーロンとハックさんの一騎打ちになる。

アーロンは一方的に殴られたが、戦意は全く衰えなかった。歯が折れても、鼻が折れても、頼みの武器が折れても、立ち向かい続ける。恐ろしい執念。死を想像する程のダメージを受けても納まらない怒り。それはきつと、私が関係する事件と無縁ではないだろう。私を救ってくれた人。魚人達の英雄。彼の優しさを踏みにじり、殺した人間の悪意。

「も、もうやめてくれ！ ハックさん！ アーロンさんが死んじゃもううう！」

はっちゃん泣きながらハックさんの腕にしがみつく。ハックさんはぞんざいに振り払う。

「ハックさん、やめてくれ」

「もういいでしょう、ハックさん。俺達の負けだ」

「許してくれ。同胞同士で戦うなんて何の意味もない」

私たちが無力化していた魚人達も、力なくハックさんに訴えかける。

「見せてみる！ お前達の覚悟とやらを！ 人間達を支配する？ それが正しい？ ならばその正しさを証明してみろ！ このわしに！」

ハックさんは怒りの形相で叫ぶ。すごい迫力。その声に魚人達はのまれ、黙ってしまふ。私ものまれていた。

「ジシャアアアアアアア！」

しかし、アーロンだけは別だった。奇声を上げてハックさんに襲い掛かる。

血に染まった顔。殴られてあちこちが変形し、腫れ上がっている。目はほとんど見えていないだろう。しかし精神は衰えない。全力で、我武者羅に、攻撃を続ける。

ハックさんは無言で攻撃をかわし続ける。ハックさんの目も、心な

しか濡れている。

幾ばくかやり取りが続く。不意に、ハックさんが構える。

「究極奥義、4千枚瓦ア」

この動きは、全力。ダメ、今のアーロンにそんな攻撃をしちやったら死んじやう！

「ハックさん！」

「正拳！」

私は無意識に叫んでしまう。しかし拳はアーロンの顔面へ向かう。が、その拳は、空ぶった。アーロンの顔の横、ギリギリを通って。

「ハックさん」

「勝負はついた。気を失った者に攻撃を加えるような真似はせんよ」

ハックさんの言葉通り、拳圧を受けたアーロンはよろめき、倒れ込み、そのまま動かなくなった。

戦いの終わり。魚人海賊団は全滅。魚人達は意気消沈して縄につく。

縄で縛られた魚人達。海兵達が手早く軍艦に乗せていく。いつの間にも港に来ていたのか。

その軍艦にジュウシンさんが見えた。彼は船から飛び降り、私に近づいてくる。

「牢番はお前に任せる。何人かは逃がしてもいい」

「えっ」

「本気で説得しろ。真っ当に生きられるように。真の敵を見定められるように。その上で、合格だと思ったら逃がせ。革命軍に誘ってもいい。お前の魚人に対する感謝の程を見せてくれ」

いきなりそう言われても……。

縄に捕まり、裁かれるのを待つだけの魚人達。死刑になる人もいるだろう。中には私の恩人もいる。彼等の生殺与奪権を、渡されてしまった。この世で最も、魚人達に負い目を感じているかもしれない、この私に。

ジュウシンさんは私のトラウマを克服するチャンスって言ったけど。これは、逆に、飲み込まれるような気が……。

解放された者、拘束された者

「彼で最後だ」

「ありがとうございます」

たしぎの指示通り、村の住民は広場に集まった。戦える者は武器を手を持ち、敵の接近に注意を払う。ふつうの人は道沿いに来るが、魚人なので港や川から急に現れる可能性もある。360度気を抜くことはできない。

嫌な緊張感だ。胸が苦しくなる。これはあまりよくないわね。歌でも歌いましょうか。

「ちいさなー、ころにはー、たーかーらのちずーがー」

「ナ、ナミ！ こんな時に何を！」

ノジコが信じられないという風に私を見る。ゲンさんや他の村人も同じ。たしぎも怪訝な感じだ。ただ、もう1人残っている屈強な海兵は笑っている。

「緊張し過ぎるのもよくないわ。実戦で本来の力が出せない」

「そんなこと言ったねえ」

「ほら、皆も歌おうよ」

「やつ、無理よ！ 絶対に無理！ 理論上はそうなのかもしれないけど、この空気を見なさい！ のん気に歌ってる余裕はないわ！」

ノジコが叫ぶと、そうだと声上がる。

私は少しイラツとくる。が、ふと気付く。皆が私に怒ったことで、最初の緊張感は解けている。これなら歌う必要はないかもしれない。その時だった。川から水しぶきが上がり、人間大の何か飛び出してきた。

来た。敵。

一気に緊張感が高まる。せつかく歌ってもあまり意味がなかったわね。泥棒時代にも戦闘の経験はあるけど、逃げるばかりだった。あの時とはまた別の緊張がある。初めての、守る戦い。逃げられない戦い。

覚悟を決めろ、ナミ。

と、自分を奮い立たせたのだけど、その頃には水しぶきが収まり、川から出てきたのが敵ではないことが分かっていた。

人魚の女の子だ。カンチパが殴られた時、大きな魚人の隣にいたかわいらしい人魚の片一方。彼女は無邪気そうな笑みを浮かべ、ぴよんぴよん跳ねて村に近づいてくる。

「終わったよー！ 向こうの戦いがー！」

えっ、あっ。突然すぎて、頭の中が真っ白になっちゃった。

ええっと、まず早過ぎるわよね。まだ村人を集めたばかりなのに。本当に終わったのかしら？ 嘘の可能性もあるわよね。いやいや、ないわよね。そういう嘘をつく理由がないわ。緊張し過ぎはよくないと言っても、戦いが終わりと言って緊張感を完全に無くしてしまうのは、さらにマズいから。

だから、ええっと、本当に終わったのかしら？ 勝ったのかしら？

「アーロンはハックさんがボッコボコにやっつけたみたい。他の魚人達も1人残らずノックアウト！」

人魚は笑顔のまま言う。

やっぱり、本当に、勝ったみたい。なんてこと。まだ信じられない。いえ、信じることはできるのだけど、どう喜んでいいのか分からない。「本当に、1人残らずですか？ 見張りの魚人や逃げ出した魚人もいるのでは？」

たしぎの問いかけで、少し冷静さを取り戻す。アーロンが負けたら逃げる魚人も出るだろう。笑うのは、完全に事態が納まるまで我慢していた方がいい。

「完全に、1人残らずよ！」

しかし、人魚の女の子はそう強調した。どうして完全だと分かるの？

私達の疑問に答えるように、女の子が言う。

「シゲくん、ええっと、私達の仲間のイルカの男の子ね。彼が、エコーロケーションと見聞色の覇気で、探索したわ！ それでここの諸島くらいだったら丸ごと調べられる！ だから間違いないよ！ 見張りの魚人も全員倒してる！ 逃げ出した魚人もゼロ！ 完全勝利よ！」

エコーロケーションは、確か、イルカやクジラが使う音を利用したコミュニケーション。コウモリみたいに音で三次元を把握することもできる。一説には、音自体は数百キロ先にも届くとか。でも、三次元の把握は数百メートルが限界だったはず。この島全体？ まあ、ジウウシン流トレーニングをしたイルカなら、できてもおかしくないか。

嘘をつく理由もないし。やっぱりこれは、勝ったみたいね。

終わった、のよね？ 何もかも。命がけの泥棒生活。村の解放のため、アーロンの言いなり生活。時たま海兵を呼んでも、あっさり負け、希望は失われる。怒ったアーロンを静めるために悪役を演じ、村の皆に憎まれる。でも本当の心を見せてはいけない。皆の命が掛かっているから。失敗は許されない。隙を見せてはならない。

そんな、私の心にのしかかっていた重圧。それら全てが、今、一瞬で、消えた。

「はあ」

万感の思いを込めたため息。いえ、そんなに心は込められなかったわ。あっさり終わりすぎよ。何これって感じ。

「ナ、ナミさん！」

緊張感を解いたら、一気に全身の力が抜けちゃった。倒れそうになる私。でもたしぎが私を抱きとめてくれた。

「大丈夫ですか！ ナミさん！」

「ありがとう、たしぎ。いろんなことが終わったんだなあって思うと、なんか力が抜けちゃって」

「ナミさん……」

見ると、ノジコもゲンさんも、まだ現実を受け止めきれないみたい。呆然と立っている。いや、小さく震えている。目がぬれて、さらにぬれて。つーつと、涙が落ちる。

ダメね。こういうのを見ると。私も目に汗がしみちやうわ。でも、私は。今は、笑いたい。

「よーっし！ 宴よ！ 酒よ！ 今日は盛り上がるわよー！」

ちよつと涙声になっちゃったけど、まあまあいい声が出せたわ。さ

あこの勢いで、どんどん声をかけましょう！

「さあさあ！ 宴の準備！ 宴の準備！ ノジコも！ ゲンさんも！」

「ふふっ。そうね。せっかく解放されたんだもの。楽しまないともつたないわ」

「よし！ 皆の者！ 宴の準備だ！ 今まで押さえ込んできた分、盛大に盛り上げれ！」

ゲンさんの声に、うおおお、と地鳴りのような歓声上がる。大人も子どもも、女も男も、全力で叫ぶ。全身で喜びを表現する。押さえ込まれた感情が爆発する瞬間。

「ナミさん、未成年にお酒はダメ……。いえ、ほどほどに」

規律にうるさいたしぎも、さすがにこの喜びに押されたみたい。

「さあ今日は、夜通し騒ぐわよー！」

「うおおおおおお！」

「そう言うと思つて音楽隊を連れてきているぞ！」

「うおおおおおお！」

「サーカスもできるぞ！」

「うおおおおおお！」

「人魚のダンスも見せてやるぞ！」

「うおおおおおお！」

「はっちゃけたい大人には精力増強マッサージもやってやるぞ！」

「うおおおおおお！」

いつの間に来ていたのか、ジユウシンがいろいろ提案してくれる。ありがたく受けておきましょう。精力増強マッサージはいらなないけど。

ドアを開けた瞬間、血と汗の混じった臭いがした。思わず手で口元を覆う。

薄暗い部屋に鉄格子が並ぶ。その中に所狭しと押し詰められてい

る魚人達。敵意、怒り、失望の視線。

「チツ」

「女かよ」

「舐めやがって」

予想はできていたが、ここに優しい言葉は存在しない。私は罵倒の嵐に晒されることになるだろう。

今はまだマシだ。私の正体がバレていないから。もし気付かれたら、きつとトラウマを抉られる。私を救ってくれた英雄を、死なせてしまった日のことを。

それはとても恐ろしいこと。自分の芯が揺さぶられてしまう。今すぐ逃げ出したい。こんなことを私にやらせるジユウシンさんには、頭おかしいんじゃないの？、とでも言ってしまうたい。

でも、一方で、何かを成し遂げたいと思っっている私もいる。ここで魚人達に謝罪したい。感謝の気持ちを改めて伝えたい。そして、何らかの形で、彼等を助けたい。

でも、その何らかの形が、まだ見えない。単純に魚人を逃がすわけじゃない。それで罪滅ぼしになると思っただけだし、ナミ達が救われないう。違う方法。あるはずなの。ないかもしれないけど、無理にでも作る。

「あれ？ おまえは……」

ふと、敵意を含まない声があった。知っている。はっちゃんの声だ。

「確か、ええつと……」

はっちゃんはおでこを指でなぞりながら考えている。

私を思い出そうとしているのだろう。そのことに若干の喜びを感じるが、恐怖もある。彼が私の名前を出した時、アーロンさんが、どうなるか。

「ああ、そうだ！ コアラ！」

出た。思い出してしまった。私の名前。

「なんだハチ、知り合いか？」

知らない魚人がはっちゃんに問いかける。

「フィッシャーさんの船に乗っていた頃に、人間の奴隷を故郷に送り届けることになってな。あそこにいる看守が、その子に似てた」

「やっぱり、来た。私が最も恐れていた話。」

「へー、そんなことが」

「さすがにフィッシャーさんは懐が深いなあ。人間の奴隷をわざわざ助けてやるなんて」

「ああ、まさに俺達の英雄だ」

「かーつ、やるせない話だね。そんな英雄を人間は殺しちゃったんだから。やっぱり悪魔だよ、人間は」

「そうだそうだ、まったくだ、などと同意の声が沸く。時折私をにらみつけながら。」

「苦しい。聞いていてとても苦しい。」

「つてかよ、その女が、コアラ？　だとしたら、あんまりじゃねえか？

「フィッシャーさんに助けられておいて、今度は俺たちを殺そうって側になってんのか？」

「あつ、本当だ！　あまりにも酷い！」

「私もそう思う。助けられておいて裏切るのは酷い。」

「でも、私は海兵じゃないから、本当は裏切ってないけど。革命軍だからと言って許してくれはしないだろうけどさ。」

「ふと、はっちゃんが私を見ていることに気付いた。気まずそうな顔で。そして私と目が合うと、少し頭を下げた。謝罪をするように。」

「これは、魚人達に責められている私の気持ちを考え、謝罪したのだろう。こちらこそ申し訳ない。フィッシャーさんの件で謝罪すべきなのは、私だから。だけど少しうれしくもある。はっちゃんはやさしい人だった。ナミの村の惨状を聞いたとき、私の事件によってはっちゃんの性格が変わってしまったのかと思ったが、そうではなかったようだ。」

「なあ、お前等。もういいじゃねえか。この話は」

「えっ、それも言うなんて。」

「なんだハチ？　人間の肩を持つのか？」

「いや、そういうわけじゃねえ」

「怖気づいたのか？ 捕まったからって命ごいでもするつもりか？」

「よしてくれよ。恥を晒すような真似は」

「や、やらねえよ。命ごいなんか」

「ハチ、不愉快だ。黙ってろ」

「すまねえ。アローンさん」

私を庇ったせいで、はっちゃんが責められる。こんなことしなくていいのに。

でも、これはいい契機かもしれない。はっちゃんが勇気を出して、やさしさを見せてくれた。人間に捕まり、断罪を待つだけの状態で、同じ人間であり英雄の仇とも言える私に。

だったら私も、勇気を出す。何かを伝える。彼等を救うための可能性を引き出す。話題は、たぶん、天竜人の話が一番いいだろう。

「皆、聞いて！」

声が出た。勇気を出せた。少し上ずってしまったが、十分響いた。

「ああん？」

「なんだクソアマ」

魚人達は再び不機嫌になり、私を睨みつける。また胸が苦しくなる。しかし、力を振り絞る。

「人間にも、悪魔みたいな人はいる！ それは認める！ だけどそれは、全ての人じゃないの！」

「なんだあ？」

「説教のつもりかあ？ ぶっ殺すぞこのアマア！」

よし、言えた。そのことにひとまずホツとする。

まだまだ、心にはちつとも響いていない。怒りに火をつけただけ。でもそれは予想できたこと。もともとアローン一味は人間嫌いで海賊行為をしていたと聞いている。その上で、フィッシャーさんの事件があつた。薄っぺらい言葉に心が動くはずがない。

でも諦めない。続けなくてはならない。そうじゃないと誰も救えない。

「人間の敵がいるなら、一緒に倒そう！ 魚人も人間も、手を取り合つて！」

「はあ？ 何言ってるんだ！」

「バカにすんじゃねえ！」

「てめえ等海軍が捕まえておいて何が一緒に倒そうだ！」

「そうだよね。当然そうなるよね。」

だから私も、覚悟を決めなければならぬ。秘密のままでは事態は動かない。

「私は、海兵じゃない！」

「は？」

一瞬、魚人達が静かになった。

「海兵じゃない証拠として、私は、あなた達を助ける！ 今の私はそれができる立場にある！」

「はあ？」

「意味が分からねえ。ぬか喜びさせて遊ぶつもりか？ ふざけた真似を」

口で言っただけでは信じられないだろう。だから、ちよつと実演しておく。

私はポケットから牢屋のカギを取り出す。それをこれみよがしに魚人達に見せる。

「おいなんだ？ 開けるならさっさと開けてくれ」

「ぬか喜びならぶつ殺すぞ！」

魚人達の言葉を無視し、はっちゃんの牢屋の前に行く。カチャリ。「お、おい。いいのか？」

牢屋の中に入る。そのままはっちゃんの手錠にカギを突っ込み、外す。

はっちゃんは信じられないという風に、私と自由になった手を交互に見る。

「おまえ、やっぱりコアラ……」

「はっちゃん、来て……」

私ははっちゃんを部屋の外に連れ出す。これで、いいのだろうか？

部屋の前には見張りの男性。私とはっちゃんを一瞥するが、それ以上は何も言わない。

私ははっちゃんを連れて甲板を目指す。

「あいつもお前の味方か？」

はっちゃんは後ろの見張りを身ながら言う。

「うん」

私は同意するが、味方と言っているのかどうか分からない。ジユウシンさんは厳密には革命軍ではないし、その部下も然り。

「大丈夫なのか？　こんなにスラスラ歩いて」

「たぶん、大丈夫」

「たぶんって、おいおい……」

はっちゃんは少し戸惑ったが、私は歩みを止めない。そして、甲板へ来てしまった。

見張りの海兵達。数は13人。ジツと私たちを見る。何かを調べている。見聞色で心を見ているのだろうか？　はっちゃんの方からごくりと唾をのむ音が聞こえる。

「まあまあだな」

「ああ。まあまあだ」

「謝罪、罪悪感。この村に対する感情はそれだけだ」

「まあ、裏切る恐れはないだろう」

それぞれが感想を述べる。はっちゃんを拒絶する反応はない。これは、逃がしてもいいという意味だろうか？

「あの、このまま逃げてもらえばいいんですか？　海へ」

「俺は構わないぞ」

「俺も」

「俺も」

それぞれが同意する。これでいいのだろうか？　よく分からない。

「はっちゃん。じゃあ、逃げて」

「あ、ああ。そうさせてもらう。いや、でも……」

はっちゃんは動こうとしてピタリと立ち止まる。

「できればいいんだが、アーロンさん達に伝えといてくれ。俺だけ逃げちまってすまねえ、いろいろあったけど楽しかった。それと、ありがとうって……」

「うん。分かった」

「やっぱりはっちゃんは、やさしい。」

「おまえも、ありがとうな。それになんというか、その、立派になった。前見た時はちっこいガキだったけどよ」

「うん」

「すまねえな、こんなことしか言えなくて。おれは、バカだからよ」

「はっちゃんは、バカじゃないよ」

「いいや、バカだ。大バカ野郎だ。人間にもいいやつはいるって、知ってたのに。なんてことしちまったんだ。俺は」

「そう言っってはっちゃんは涙ぐむ。やはりナミの村にしでかしたことは後悔していたのか。やさしいはっちゃんには本来ありえないような行動。アールンさんの言葉に逆らえなかったにしてもだ。」

「でも、ナミ達のことを考えれば、安易に慰めることもできない。」

「ちよつといいか?」

「と、海兵の1人がいきなり会話に入ってきた。はっちゃんはビクンと固まる。」

「今からこの島で宴が始まる。逃げる前にそれを見てくれないか?」

「えっ」

「はっちゃんも私も驚いた。何故こんなことを言うのか。」

「確かになあ。いい案かもしれない」

「そうか?」

「ありだな」

「ジュウシンさんは喜びそうだな」

「海兵達が概ね賛成している。何故、宴を見るのがいい案なのか。喜ぶ人間を見て自分たちの罪を再認識させるため? よく分からない。」

異次元の男、ジュウシン

牢屋の並んだ部屋に戻る。雰囲気が変わっていることに気付く。

「てめえ！ 本当にあの時のガキだったのか！」

おそらく先ほどまでは他人の空似とされていた。今は完全に気付かれたようだ。

「はい」

「よく俺の前に面（つら）出せたもんだな！ ぶっ殺されてえのか！」

「いいえ」

「何がいいえっ！ この！ あの人の！ 魚人族の怒りを！ 食らいやがれ！」

「クソがア！ 檻から出て今すぐ殺したい！」

魚人達、特にアーロンを筆頭にタイヨウの海賊団だった魚人達は、縄で縛られた体をせわしく揺さぶり、叫ぶ。全力の怒りを込めて。私を睨みながら。

「フィッシャーさんに関しては、ごめん！」

「なんだとお？」

「謝って許されるわけねえだろうが！」

そう、許されないのは知っている。ハックさんや革命軍の皆は、私は悪くないと言ってくれる。ただ力がなかっただけだ。私もそう思う。でも、そういう風に考えない人もいる。それほどの怒り。理屈は通用しないと思う。かと言って、謝罪しても効果はなさそうだ。実際、目の前の彼等は怒っている。

でも私は、謝罪しなかった。当時幼い子どもであり奴隷であった自分に非はないと理屈では思うが、謝罪を義務のように感じている。実際、謝罪すると少しすつきりした。理由は分からない。

「ごめん！」

「ああん？」

「本当にごめん！」

「まだ言うか！」

「黙れ」

「ごめんったらごめん！」

「このアマア！」

「ごめんごめんと言いつける私。やはり、少し胸がすつきりする。何故だろう。革命軍として世界政府に戦いを挑んでいる私は、理不尽な要求に対して従うのではなく打ち倒すつもりでいるのに。この謝罪は理不尽に頭を下げるようなもの。やってはいけないはず。なのに心は、徐々に洗われて、静かになっていく。

「ごめん」

「つまんねえ。同じことばっか言いやがって」

「ごめん」

「ちっ」

気付くと、魚人達の反応も弱くなっている。アロンさんなんて目を瞑ったまま動かない。

怒るのに飽きたのも理由の1つだろう。けど、別の理由も感じる。理不尽なことに感情をぶつけ、その行為の憐れさ空しさを知った、みたいなの。そういう静かな雰囲気がある。

だから、たぶんだけど、彼等は今の私と同じような状態になっている。しんみりとした気持ち。心が徐々に洗われて、静かになっている。く。

これは、もしかや。共感できた？ ならば、ここで畳み掛ける！

「私は、フィッシャーさんが好き！」

「はあ？」

「なんだとてめえ」

少し怒る魚人達。ジツとしていたアロンさんも、耳がピクンと動いた。あの人はフィッシャーさんの大ファンだった。当時の魚人達は皆フィッシャーさんに憧れていたんだけど、フィッシャーさんの話をする時は、アロンさんが一番うれしそうだった。

だから、フィッシャーさんの話題は魚人達の心をつかむチャンス。もちろん、危険もある。その場しのぎの薄っぺらい話をしたら、猛烈な怒りを買うだろう。フィッシャーさんはある意味聖域。だけど私にはわか仕込みではない。本物の感謝。本物の憧れがある。

「フィツシャーさんは誰よりも優しい！ あんなにも強いのに！ ふう力が強いと、その力で何かを奪おうとするもの！ でも、フィツシャーさんは逆！ その力は弱者を守るためにのみ振るわれる！ 誰かが横暴を働いていたら、例えそれが政府であって、戦いを挑む！ それが、どれだけ難しいことか！ どれだけ偉大な心なのか！ 広大な海を思わせるような、度量！ その胸に、やさしさに包まれることが、どれだけ幸せなことか！」

我ながら、ペラペラとよく口が動くなあと思う。でもこれは、本当に思っていること。フィツシャーさんは本当に憧れている人。だからこそなのかもしれない。言葉が次々浮かんでくるし、喋っていて楽しい。

「シャツハハ。シャーハツハツハ」

と、アーロンさんが上機嫌に笑い始めた。この人は怒る前に不意打ちで笑うこともあるけど、これは本物の笑いだと思う。

「よく分かってんじやねえか。そうさ。フィツシャーさんは偉大なんだ。お前なんざが語る資格はねえほどにな」

やった。ひとまず話の内容は認めてくれた。私が語るの嫌みただけけど、でも、反応自体は軟化している。

この方向で間違っていないはず。

「私は、フィツシャーさんが大好き！ この気持ちは本物なの！」

「ああそうかい。その大好きなフィツシャーさんは、お前達人間の卑劣な罠で殺されちゃったけどな。反省しやがれ！ 心の底から！

一生を懸けて！ まあお前等クズの命なんかいくら懸けてもあの人にはつりあわねえが」

うっ、やっぱり苦しい。私のトラウマを聞くのは。でも、ここで負けてはいけない。攻める。

「うん。私は一生を懸けられる！ 命を懸けられる！ あの人が見た夢と、同じ夢を見るために！」

特に意識してなかったけど、すごくいい言葉が出た。アーロンさん達もびつくりしちゃってる。

「チツ。口で言うだけなら誰でもできらあな」

アーロンさんは顔を逸らしながら言う。初めて見る気まずそうな表情。

ふふっ。これは勝ったのでは？

アーロンさんはフィッツシャーさんの夢を追っていない。たぶんファンとして私に負けた気分になってるのよ。

「アーロンさん」

「ああん？」

私はアーロンさんの牢屋の前へと歩き、腰を降ろす。相手も座っているのも私も座った方がいいと思ってるね。

ここからは面と向かって、一対一で。ファンとしての人生の勝負。私の生き様をぶつけてやる。

「私がいかにフィッツシャーさんの夢を追っているか説明するわ。まずは、故郷を離れ修行の旅に出たところから」

「ふん。何が修行か。下等種族がいくら鍛えた所で」

「目的地は決まっていたけど、船は上手く進まなかった。海流や風が変わる度、船の向きがズレる。気付かず逆走していたことも何回もあったわ。だから予想より時間がかかっちゃって、食料が尽きちゃった」

「下等種族らしいな」

「そこからは餓えとの戦い。死ぬのが先か、着くのが先か。文字通り死ぬ気で船を操ったわ。風や海流に、全神経を集中して。そこで、偶然商船が近くを通りがかったの。目的地も同じだったから、乗せてもらったわ」

「シャーッハッハッハ。情けねえな。何が修行だ」

ふふっ。笑ってられるのも今のうち。

「そして目的地にたどり着く。そこは紛争地。政府と革命軍が戦争している場所。もちろん、私とその島へ向かった理由もその紛争」
「なっ、ぐっ」

やっぱりね。苦しい表情になった。

私は政府と戦った。アーロンさんは弱者を従えるだけだった。この差は大きい。フィッツシャーさんのファンなら。

「私はフィッシュジャーさんのファンだから、当然政府が第一の敵。戦うのは当たり前。敵がいくら強大でも、それで逃げるようではフィッシュジャーさんのファン失格よね」

「ぐっ、ぐぬっ」

苦しそうなアローンさん。ちよつと笑える。

「ふっ、ふん。凶に乗るなよ小娘！俺は、まず手ごろなイーストブルーを支配して、そこから勢力を広めていって、最終的に全世界を支配する計画だったんだ！小さな村のしようもない小競り合いで満足してるようじゃあまだまだだ！」

アローンさん。その場しのぎでいい加減なこと言うのはやめといった方がいいよ。

小さな村で満足って、それあなたのことじゃん。だって何年もこの諸島を支配してただけじゃん。

まあ直接は言わないけど。話の流れがよければ婉曲的に伝える。

「生きるか死ぬかの戦場。未熟な私は銃弾に倒れた。しかし、気絶している間に革命軍に助けられた。次に目覚めたのは革命軍の船の上。そこで私は、弟子入りを志願する」

「下等種族が下等種族に弟子入りしてもな」

「革命軍に私の生い立ちを説明すると、ある方に合わせてくれた。それが今の私の師匠、ハックさん」

「何イ!？」

これには驚いたでしょうね。アローンさん以外も一斉に反応した。「ハックさんは初め断ったわ。ハックさんの戦い方は魚人空手を基本としており、人間に教えられる物ではないってね。魚人ですら習得できるのは一部のみであり、たいていは厳しい修行に耐えかねて辞めてしまう」と

「ふん。当然だ」

クロオビさんが言う。彼は魚人空手の使い手。修行の厳しさは知っているでしょうね。

「しかし私は、どうしても魚人空手を習得したかった。この技で政府と戦いたかった。だから何度もハックさんに懇願したわ。鍛えてく

ださい、どうしても魚人空手で戦いたいです、と。ついにハックさんは根負けし、1つ目の修行を教えてくださいました。ただひたすら、拳で水を押すという修行」

「あれか。俺もやらされた」

「毎日毎日、朝から晩まで、ひたすら構え、拳を突き出す。この動作を繰り返した。もちろん、ただ突くだけではなく、水の流れや、全身を流れる力の波を感じながら。そうして、5年。やっと次の修行を認めしてくれた」

「シャーツハツハツハ。それは認めたんじゃねえ。あまりにも才能がないから未熟なまま次の段階に進んじまったのさ。一生拳を突き出してる女が近くにいたら不気味だからな」

「私はハックさんに連れられ、コージ王国に来た。そこは色んな修行ができる場所だった。水面走り、乱流泳ぎ、水投げと言った魚人空手の基本はもちろん、指ジャンプ、空気蹴りと言った海兵の技まで。色んな人に色んなことを教わって、それが魚人空手にも生かされる。成長ペースが一気に上がったわ。でもそれは、5年間拳を突き出した基礎があったからでもある。地道な修行の成果が一気に花開いていく。そうして、3年。私は、空気中の水分を感じられるようになった」

「はあ？」

「嘘だ！ 人間にできるわけがない！」

クロオビさんが叫ぶ。では、実践しましょう。

「いいわ。見せてあげる」

私は立ち上がり、構える。一度目を瞑り、集中。

「ふんっ。軟弱な構えだ。あれで基礎があるなどと笑わせてくれる」
などと言っているクロオビさんの檻に向けて、空気の流れを操って、その中の水を抽出して、拳を突き出す。

「はあっ！」

「なっ」

拳と空気中の水分がぶつかり、振動が生まれる。その振動が檻にぶつかり、鉄格子を揺らす。金属音が響く。

成功。ハックさんに比べたら威力は大したことないけどね。

「それで修行は一段落。次は戦いの話をするわ。人間との戦い。時には資産家から奴隷を解放し、時には圧政を敷く海兵から町を解放する。国を落とした話もあるわ」

「お、俺だつてなあ！ この島に何度も海兵が来てたんだぜ！ だが、そいつらは皆殺しにしてたんだ！ だから情報が漏れなかった！ 戦い自体は俺の方が多はずだ！」

焦ったように話すアーロンさん。もう私の勝ちでいいよね。

そこから私とアーロンさんの武勇伝自慢大会になる。海兵のどのクラスを倒した。何人倒した。何人救った。アーロンさんはすぐにネタが終わり、タイヨウの海賊団結成より前の話を始めてしまう。私が最近の戦争の話をすれば、本気でくやしがる。

「雑魚の癖に！ 運がよかつただけの癖に！ 俺がお前の立ち位置ならもつと上手くやれたんだ！ 政府のクズ共を、1万、いや10万は殺して、懸賞金5億くらいの怪物になってたはずだ！」

ある意味、認めてしまった？ 人間の生き方を。

「立ち位置？ 10年前なら私よりあなたの方が自由でしょ？ さつさと革命軍に入ればよかつたじゃん！」

「か、下等種族の下につけるかよ！」

「じゃあ何？ あなたは私の立ち位置を羨ましがってたけど、上等種族の魚人様だから、政府と戦えなかつたってこと？」

「なっ、バカ言うな！ 戦えんだよ！ 俺は戦ってたんだよ！ その準備、謀略が広大過ぎてお前には理解できないだけだ！」

「謀略って何？ 小さな村を支配して、お金を集めて、歓楽街で遊び呆けること？」

「ぐっ。ちがつ。こ、この、クソアマがあ！」

「フィッシュャーさんに言ったらどうなると思う？ 私は政府を倒すために小さな村からお金を集め、酒と女手遊んでましたって。ため息混じりに殴られるだけよ！」

「フィッシュャーさんは関係ないだろうがよお！」

などと言っていると、ドアが開いた。

海兵達が入ってくる。もうすぐジュウシンさんのサーカスが始ま

るらしい。特別にジユウシンさんも本気の技を見せてくれるそうだ。

ジユウシンの音楽隊の演奏を背景に、食べて飲んで、歌って踊ってバカ騒ぎ。特にアーロンを倒したって噂のハックさんはヒーローのような扱いよ。魚人だから最初は怖がる人もいたけど、恩人だから打ち解けるのは簡単だったわ。魚人である彼がアーロンを倒して、村の皆の魚人に対する偏見が薄まったのはいいことだと思う。

私も踊り子の衣装を貸してもらって一緒に踊ったわ。この衣装の背中が露わになってるとかでゲンさんが怒ったのだけど、これはもうやっちゃえと思つてね。私が「約束の体払いよ」と言いながらゲンさんの顔に胸を押し当てたら、ゲンさんすごい勢いで鼻血を出して倒れたわ。私は大爆笑。ゲンさん、厳しいけど女性に弱いわよね。

皆が踊り疲れたあたりで、ジユウシン司会進行のサーカスが始まったわ。予想できたことだけど、これはもうぶつ飛んでた。手品でもありえないような技ばかり。

まずは逆立ち指ジャンプ重ね。これは、指で逆立ちしている人の上に指ジャンプで逆立ちしながら乗る、さらにその上に指ジャンプして逆立ちしながら乗る、というのを重ねる物。一番下の土台はジユウシンの私達からしたら指逆立ちできるだけですごいんだけど、ジユウシンの部下はその状態でジユウシンの身長より高くジャンプして、逆立ちの上に乗っちゃった。バランスも全く狂わない。大拍手よ。3段目はきついかな、思いきや、これも楽々成功。他の観客と一緒に叫んじゃったわ。だって指で2人分より高く飛んだのよ。ふつう足を使っても1人より高く飛ぶのもできないのに。ありえないじゃない。

その後すいすい進んだけど、7段目成功した辺りには「は？」という空気になってたわ。逆に静かになったの。もう人間技じゃないもの。だけどそこから、8段、9段、若干バランスを崩しながらも成功。10段目には5mくらいある女性の魚人が来て、体重的これはさすがに無理だろうという空気になった。でも彼女は、指で跳ねた後に月歩

で空中をピョンピョン蹴って、9段目の上にそつと着地。なんと10段目成功。もう皆、驚きすぎて口ぽかーんよ。そもそも月歩だけでも口ぽかーんだからね。初めて見る人には。11段目は成功しなかったわ。5段目の人の体力がもたなかったから。でもそれ以外の人はもう少しいけそうだったのよねえ。特に一番下のジュウシン。一番重いはずなのに一番楽そうだった。

次は人間鉄琴。体を鉄のように硬くする技があるんだけど、この状態で体を硬いものにぶつけると金属音が出る。さらにはその強度を上手く調整することで、金属音の高低差を操ることができる。ジュウシンはそう言ってたわ。部下は誰も真似できないからジュウシンが一人でやってた。音楽隊の演奏に合わせて自分の体を叩き、金属音を響かせる。時には木琴や太鼓のような音も出していた。もう一般人はドン引きよ。ジュウシンの部下も「あれはジュウシンさんには理解できない領域。ふつう鉄塊の状態では動くことさえできない」と言って遠い目をしていた。

次に石避け。これは観衆参加型で、皆でジュウシンに石を投げてぶつけるという物。ただしジュウシンは直径3mの円から出たり両足が浮いたりしたら負け。制限時間3分。

私達は軽くしか投げないけど、海兵達はすごい勢いで石を投げてたわ。視界が埋め尽くされるほどの勢いで。でもそれをジュウシンはひらひらとかわしちゃう。紙絵。本に書いてたやつね。これがその極み。

次も観衆参加型。ジュウシンや彼の部下が足や手を使って風を作り、私達はその風に乗って飛ぶというもの。現象としては嵐脚に近いかしらね。あれは飛ぶ斬撃みたいだけど。怖がる人もいたけど、私は楽しかったわ。特に魚人の女性とジュウシンの風。意志を持つてるみたいに優しく運んでくれる。高さ100mくらいで急に風が消えた時はちよつとチビリそうになったけどね。まあ、すぐさま別の風が来て、ゆつくり降ろしてくれたから危なくはなかったけど。

次は月歩を利用したダンス。ここまでありえない技をたくさん見てきたから、月歩自体への反応は薄かったわ。月歩は指ジャンプの時

に見てたしね。でも、人魚の女の子が出て来て、空を優雅に舞った時は、男性のみならず女性も見とれちゃったわ。あまりにも美しい。幻想的な光景。村の子どもはイルカに乗せてもらって、人魚と一緒に空を飛んでた。羨ましかったわ。

次は体の妙な場所を動かす技を披露。頭ジャンプ、鼻ジャンプ、耳ジャンプ、胸ジャンプ。これはまだ理解できる。次の技は驚愕。髪の毛が意志を持ったように動き始めた。しかもその髪が鉄のような硬さになることも。

そして次は、メインイベントだそうなの。既に驚き疲れているんだけどもつとすごいのが来るのかしら。ちよつと楽しみ。

しばらく待っていると、海兵達が檻を担いで広場に近づいてきたわ。村の皆から悲鳴が上がる。その檻に入っていたのはまだ血のついてるアーロン達だったから。

アーロン一味は舌打ちしているけど、思ったより大人しいわ。なんか打ちひしがれてる感じ。捕まって意気消沈って感じかしら。ざまあ見ろよ。

「今日のメインイベントは、アーロンさんの下等種族講座だああああ！」
「ノリノリで言うジュウシン。マイクを持ってアーロンに近づく。」

「さあアーロンさん、人間が何故下等なのか、教えていただけますか？」

笑みを浮かべるジュウシン。アーロンは舌打ちするだけで答ええない。しかしジュウシンはうなずいて見せる。

「はい。なるほど。水の中で呼吸ができない。力が弱い。だから下等だ。ありがとうございます。よく分かりました。では、確かめてみましょう。まず、力の実験です」

そう言うとジュウシンはアーロンの入った鉄格子に腕を振るう。鋭い金属音が響き、しばらくの後、鉄のいくつかがパカッと落ちた。腕を振るった一瞬で鉄格子を切り裂いていたらしい。

アーロンの檻が壊れて逃げられるようになってしまった。でもアーロンを恐れる者はいないしアーロンも逃げない。皆分かっ

るのだ。ジユウシンはアーロンを遥かに超える怪物。逃げてでも無駄だと。

「はい。切りました。アーロンさんにはできませんよね？ ええ分かってます。あなたはサーカスを見ていたので、私より力が弱いことは知っていたわけですね。後は水の中で呼吸だけだと。では、やりましょう」

そう言うと、海兵が水の入った水槽を持つてくる。ジユウシンは口を開けたまま、その中に入る。

「はいこの通り。水の中に入りました。喋っても大丈夫。呼吸もできますよ」

「なん……だと……」

口をぱっくり開けて驚愕するアーロン。いや、会場全体驚きよ。ジユウシンの部下の海兵さえも驚いてる。

「生命帰還の奥義だ。肺の手前の血管を浮き出し、擬似的なエラを作る。肺に入った水に流れを与え、動脈に浸透させ、さらに流れを与え、静脈に送る。静脈を通った水は肺から抜け出て口を出す」

「繊細な身体コントロール。精密な水の感知。あの人にはしか理解できない領域だ」

近くに座る海兵達が解説している。あまり理解できない、というより理解したくないが。

「アーロンさん。力は強いし呼吸もできました。まだ人間が下等な理由はありますか？ 全員にはできない？ いやいや、できるよ。練習すれば誰でもできる」

ジユウシンは自信ありげに言うが、できないと思う。海兵達も私と同意権のようで「それは無理っす」「ジユウシンさんとシツジョーさんだけですよ」とか言ってる。

「つまりアーロン。人間はエラ呼吸できるようになったら下等じゃないのか？ まだ不満か？ 泳ぐのが遅い？ じゃあ競争しよう。ほら、海へ逃げてみる。捕まえてやる」

自信満々なジユウシン。ふつう人間は魚人より速く泳げないが、今までの彼を見ていると負けると思えない。

村の皆もほとんど同意権みたい。でも、海兵に聞いてる人もいる。

「あの司会の人、アーンより速く泳げるの？」

「まあ間違いないだろうね。ジユウシンさんはその気になれば足を人魚の尾ひれにすることもできるから」

「そっか。じゃあ大丈夫だね」

ゆっくり10数えるジユウシン。アーンは「あばよ、バカ野郎」と言っただけで逃げていく。

10数え終え、ジユウシンが動き出す。と言っても動いた瞬間には消えてしまい、その後は見えないが。

ジユウシンは20秒くらいで帰ってきた。アーンの口を掴んだ状態で。全身びしょ濡れ。海に逃げたアーンを捕まえてきたという。泳ぎで魚人、それもサメの魚人に勝つなんて、ほんと人外よね。

「はいアーンさん。下等種族の方が速く泳げてしまったよ。これでは何が下等か分かりませんね。もっとちゃんと教えてくださいよ。人間が下等である理由を」

「ちっ、化け物が」

煽るように言うジユウシン。あんまりおもしろくない。

「ええっと、自分の方が私より下等だと思っちゃったってことですね。だから私を化け物呼ばわりした。じゃあもう下等じゃないんですね。人間は」

「人間は下等だ。例外がいただけだ」

「じゃあ例外は下等じゃないんですね？」

「ちっ。勝手に言ってる」

「はい。聞きましたか皆さん！ 例外は下等じゃないみたいですよ！ 結論が出ました！ アーンさんに下等呼ばわりされたくない皆さんは、修行しましょう！ これで、メインイベントは終了です！」

メインイベントは終わったらしい。正直、あんまりおもしろくなかった。なんでこれがメインなんだろう。もっとふつうに楽しめるやつがよかった。

何か別の狙いがあったのだろうか。アーンを屈服させるのとは

別の目的。ジュウシンが魚人の得意分野ですら魚人を上回る所を見せて、村人の魚人に対する偏見を無くさせる、とか？ 技を見た海兵達にやる気を出させる、とか？ それだったら意味はあるのかもしれない。手放しでは喜べないけどさ。結局ジュウシンがすごいだけで、私達は認められてないし。そもそもアーロンに認められたってうれしくないし。

その後もジュウシンはアーロン一味にインタビューを続けていく。何故人間の村を襲ったか。人間がムカつくから。何故人間を嫌いか。よわつちい癖に地上でデカイ面していい暮らししてるから。強い人間はいい暮らしをしても構わないか？ それはなんとも言えない。よわつちくても貧しい人間はムカつかないか？ 貧乏はかまわない。ムカつく理由がない。羨ましくもなんともないから。と言った問答が続いていく。

やはりおもしろくはない。何故こんなことをするのだろう。楽しい宴に水を差すようなこと。それも、アーロン一味に心を開くような真似をして。黙って罰を与えようと思わないのだろうか。

「俺は貧乏人でもムカつくな。人間はとにかくムカつく」

と、遠くから話に入ったのはクロオビ。

「どうしてですか？」

「歴史があるだろう。人間が魚人を虐げ続けた歴史」

えっ、そうだったの？

「私が虐げたわけではないですが」

ジュウシンは歴史に関して否定しない。本当に人間が魚人を虐げた歴史があるのかな。あんなに強い魚人をどうやって……。ジュウシンみたいな例外はいるけどさ。

「同じだ。人間だからな」

「どうして同じだと思いますか？」

「同じ血が通っているだろう！」

「通ってませんよ。血管は離れています」

「そういう意味じゃない！」

「どういう意味ですか？」

「自分で考えろ！」

クロオビはそう言つてそっぽを向く。しかしジユウシンは1人で頷く。まさか心を読んでいるの？ 本にも心を読めるみたいを書いていたけど。

「クロオビさんは今、必死に考えています。人間の歴史的な罪を別の人間に被せてもいい理由を。しかしいい考えが浮かばないので。そして今、私に思考を暴露されたことで、パニックになっています」
「やっぱり心を読んでいるみたい。クロオビは目に見えて動揺しているわ。」

「クロオビさん、結局理由はないってことですか？ 別の人間に罪を押し付けてもいい理由。じゃあ人間は別々つてことでもいいですかね？」

「そ、それはダメだ！」

「何故ですか？」

「理由はいらん！ 俺は人間が嫌い！ それだけだ！」

「なるほど。人間を嫌うこと自体を天性のように感じると。本当にそうなのでしょうか？ 先ほどクロオビさんが歴史の話をしたので、私も歴史を語りましょう。何故、魚人族・人魚族が人間に差別されるようになったのか。実はこれは、世界政府の戦略なのです」

え？ そうなの？

「どういうことだ？」

「世界政府は天上金や海軍の軍事費として庶民から金を奪います。だから当然嫌われます。実は政府に対する戦争は、昔からしよつちゆう起こっていました。中には惜しいところまで行つた戦争も。団結さえすれば庶民は数が多いし政府より強いのです。政府が無策ならいつか倒されます。そこで政府は、庶民からお金を奪う理由を作ることになりました。それが生命の安全のためというものです。と言っても、金を出さなければ政府に殺されるぞ、という理由では革命勢力が増えるだけです。そうではなく、魚人に殺されてしまうぞ、という理由を作ることになりました」

魚人で脅迫する理由を作る？ 裏がありそうね。

「政府は情報屋を名乗り、魚人の海賊と接触し、海軍の情報を流し、ここは守りが薄いから攻めろ、と。魚人の海賊は言われた通りに攻め、物も命も奪います。政府は遅れてやってきて、言います。ほら、政府にお金を流るから魚人に殺されたのだ、と。実際は魚人の海賊と政府が手を組んでいたから襲われたにも関わらず。さらに政府は、一般の魚人の旅行者を皆殺しにし、魚人側の怒りも煽ります。魚人の海賊に共感させ、無差別に人間を襲う魚人を増やすために。そうして両者の対立を煽りました。完全な自作自演です」

「な、なんてこと?! にわかには信じられない。そんなに悪辣なの!? 世界政府はクズの極み。アールンより下と言つてもいいかもしれない。」

「村の皆も、アールン一味も、同じ考えみたい。口をあんどり開けて固まっている。」

「しかし、自作自演は成功してしまいました。人間は魚人を恐れ、政府にお金を出す。魚人は人間全体を敵と考え、政府と戦わず庶民を虐めようとする。もちろん、政府の思惑に気付いた人もいましたが、その数は極少数。戦えば数の利で政府が勝ちます。政府は優秀な暗殺集団を持ってますしね」

「ズルい。ズルいよ世界政府。そしてムカつく。なんて酷いやつら。絶対に潰してやらないといけないわ。」

「皆さんも、狙われるかもしれないかもしれません。この話を知ってしまったので」
「って、え? それはダメだって。せつかく村が平和になったのにな、と、そこでジユウシンの雰囲気が変わった。演技っぽくない、素の状態に。」

「まあ、今の話は俺の予想だけだな。政府の今までの行動パターンから考えた歴史の予想。ポーネグリフを読んだわけじゃねえよ。お前達が政府に暗殺されたなら、事実だったってことかもな」

「え? え? 予想? どういうこと?」

双頭の鷲より高い空を

「サーカスはこれでおしまい。演奏も次で最後。『双頭の鷲の下に』行ってみよう」

あーあ、終わっちゃった。ジユウシンが重い話をしたせいで、場がしらけちゃったまま。

まったく、どうしてくれるのよ！ 私達は何年もの鬱憤を込めて、本気ではしゃいでいたのに！

「双頭の鷲。こいつは2つの頭を持ち、それぞれの頭で対立する組織の一方ずつを操る鷲だ。その意味は、対立する勢力の両方の上層部に君臨し、自分の正体を隠したまま庶民の戦いを煽るといふ、自作自演戦争の象徴。この選曲はさすがジユウシンさんだ」

ジユウシン信者の海兵は、相変わらずべた褒めで解説している。

私達の気も知らないで。ちよつと八つ当たりしよう。

「ちよつと！ ジユウシンさんの歴史の予想っていうやつ、深い意味か何かがあるんでしょね！ なかったら私、村人代表として怒るわよ！」

私は怒りを示すように拳を握りしめる。海兵は困ったような顔をする。

「うーむ。ああいうジユウシンさんは滅多に見ないからなあ。でも、大きな意味があるとは思うよ。数日か数ヶ月後、ひよつとしたら数年後になって、『あつ、このことか！』、つてなると思う」

「数年後？ 何それ。どうとでも言えるじゃん」

「いやいや、ジユウシンさんはちゃんと未来を見てるから。見聞色と独自の感覚を使ってかなり正確な未来を」

「未来つて。……もういいわ。はあ」

私は見せつけるようにため息を吐く。信者に教祖の失敗を問い詰めても否定されるだけ。そんな感じ。

ふと、たしぎの声が聞こえた。

「ちよ、ちよつと！ 歴史の予想ってどういうことですか!? 何か証拠があるんですか!?!」

たしぎはジユウシンに駆け寄り、問い詰めている。

「昔のことだから文章には残っていない。ポーネグリフを見たわけでもない」

「だったら根も葉もない嘘じゃないですか！　そういうことはやめてください！　政府が信用を無くし、無益な軋轢や争いを生むだけです！」

「根も葉もあるぞ。俺の海兵人生の中で、そういうことをやっている連中を見てきた。政府の罪を一般人になすりつける。なすりつけるために、たくさんの人を殺す。そういう連中をな」

「それは……っ！　では、その証拠を見せてください！」

「公文書はもちろん燃やされてるぞ。俺が伝聞を基に書いた書類なら俺の部屋にあるが」

「な、なんですかそれは！　証拠になりません！」

たしぎは証拠を出せと言っている。ジユウシンの文書は証拠にならないとも。

しかし、私は思う。政府の公文書があつたとして、何の証拠になるのかと。政府が自作自演をやっているのならば、文書もまた偽装しているだろう。魚人が悪いことをした、魚人の狙いは人間全員だ、だから人間は魚人全体を恨むべきであり、安全のために政府に金を払うべきだ、というような内容になっているはずよ。

つまり、公文書であつてもジユウシンの個人的な記録であつても、証拠としての価値は同じなのよ。どちらも偽装できる。信じるか信じないかは個人の自由。いえ、どちらも信じるべきではないのよ。ただ政府がこう言っている、ジユウシンがこう言っている、という情報だけ認識しておけばいいの。情報に色はいらぬ。利用することはあつてもね。

ジユウシンさんはすごい。私が数時間かけて説得しても魚人達は怒ったままだったけど、ジユウシンさんはちよつと歴史の話をしただ

けで、彼等を黙らせてしまった。

見た感じ、ハックさんに負けた時よりも、さらに深く打ちひしがれている。そりゃあそうだよな。アーンさん達は人間と戦うことを天命のように感じていたのに、それこそが敵の狙いだったなんて。政府の手のひらの上で踊らされていたなんて知るとね。

もちろん、予想でしかない。証拠のある話ではない。でも、私やアーンさんのように、政府の深い闇を知っていると、納得してしまう。政府はこういうことをする連中だとね。自作自演、自分の罪を被害者に被せる、こんなことはしょっちゅう。だから、細部は異なっていたとしても、大筋はジウシンさんの予想通りでしょうね。そう思える。予想が完全に外れている可能性もあるけど、歴史の中で同じようなことを何度もやってるってことは確信できる。だから結論は変わらないの。

1人を見て他の人間や魚人を同一視し、敵視する。これはバカげてるってこと。

アーンさんもそういう結論に至っていると思う。だって部屋に帰ってから一度も私を睨んでいないもの。人間に対する悪口もない。ただ、ポツポツと独り言を言っている。「俺は今まで何を」「フィッシャーさん、どうすれば」とかそんな感じ。

意外だったわ。証拠のない歴史の予想でも、使いようによつてはこんなに効果があるのね。あのアーンさんの心を動かせるなんて。ジウシンさんを見くびっていたわけではないけど、力だけではないかったのね。言葉で人を動かす方法も知っていた。

でも、ちよつと引つかかるわ。もつとこう、背中で見せるっていうの？ フィッシャーさんのような包容力が欲しかった。ジウシンさんほどの人なら、もつといい方法が取れたんじゃないかって。何も宴で盛り上がっている最中にやらなくてもねえ。

この数日後、私はハックさんに聞かされた。ジウシンさんが皆の前で魚人の歴史の予想を喋ったのは、革命軍への共感を誘うためでもあったと。

その理由はまさかの私のせいだった。私がアローン一味に、私の正体は革命軍だと言っちゃった。これが問題だった。全ての魚人をつまでもコージ王国の牢に入れておくわけではない。どこかで本部の海兵や政府に見つかり、革命軍の情報を喋ってしまうかもしれない。その可能性を減らすために、あの場で政府の悪辣さを宣伝し、政府に対する嫌悪感を共有させたのだとか。

私が魚人に革命軍の話をしたなんて、どうやって知ったのか。ジユウシンさんはナミさんの村で宴の準備をしていたはずなのに。それに、革命軍の暴露を知ったとして、どれだけの時間でアローン一味を懐柔する戦略を考えたのか。改めてジユウシンさんの恐ろしさを思い知ったわ。

宴の翌日。みかん畑で作業していると、大勢の来訪者が現れた。

「チチチチツ。私は海軍16支部大佐ネズミだ。君かね、ナミという犯罪者は」

「えっ……」

先頭にはネズミ大佐。アローンと手を組んでいたクス野朗。こいつが部下を引き連れて、嘲るような笑みを浮かべている。

ネズミの隣には怒りをジツとこらえるゲンさん。さらに隣に酷く狼狽しているたしぎ。

こいつは今、私のことを犯罪者と言った。まさか戦うつもり？でも、どうして今になって？村の脅威はなくなったのに。

「ちよつ、ちよつと待ってよ！私がアローンに従ったのは脅されたからで、村に危害を与える気はこれっぽっちもないわ！それくらい分かるでしょ！」

「ふん、そんなことはどうだっていい」

どうだっていい？じゃあまさか、法に則って逮捕とか言う気なの？こいつ自身が、アローンと手を組んでいた犯罪者なのには？

「チチチツ。よく分からんという顔をしているな。いいだろう。簡単

に説明してやる。この村では、海軍に毎月収めるべき税金が何年も支払われていなかった」

「何こいつ。それを言っちゃうわけ!？」

「それは! アーロンが! だいたいあんたらも賄賂を!」

「ああ、もう! あったま来た!」

「まあ待て。私はやさしいからな。延滞料金は請求しないでおいでやる」

「だからって……」

「そうだなあ。しめて、7800万ベリーってどこか?」

「えっ。あつ」

「7800万ベリー。私が、今まで集めてきていた金額。そのものずばり。」

「あんた! アーロンから聞いたんでしょ!」

「何のことか分からんな」

「しらばっくれてっ!」

「チチチッ。お前達、探せ。みかん畑のどこかに隠してあるはずだ」

「ネズミの指示で、彼の部下の海兵がみかん畑に入る。」

「もうダメ! 我慢できない!」

「入るな! 人間のクズが!」

私は近くに落ちていた木の枝を取り、海兵へとかける。

怒りを込めて全力でやってやる。呼吸、力の流れ、相手の動き。その全てを合わせる。

「ふんっ、ぬっ!」

「うおっ」

「ぎゃああああ!」

「うわあああ!」

一振りですぐ3人の海兵が吹っ飛んだ。我ながら中々のスイングだね。もう常人の域は超えているかも。

「この! 抵抗するのか小娘エ! お前達、やってしまえ!」

「ネズミの声で、彼の部下たちが私に迫る。誰も銃を構えていないのは運がよかった。これなら対処できる。こいつら、動きはてんで大し

たことない。昔の私以下。

土を踏みしめ、力の流れを感じ、枝を振るう。相手のタツクルを軽くないなし、そのいなした勢いでまた枝を振るう。戦いという感じがしない。流れるような、踊るような、作業。

最後にネズミを拳で殴り飛ばし、作業完了。

「ま、まいった。許してくれ。なんでも言う通りにするから」

「それじゃあ村の復興を手伝いなさい。アーンパークの金には一切手を出さず、村から税金も取らず。というか、アーンからもらった賄賂を村に返しなさい。あれは元々村のお金よ」

「前半は、分かった。しかし、アーンのお金は、ない」

「全部使ったの？」

「う、うむ」

「何に？」

「い、いやあ。それはその……」

頬を赤く染めるネズミ。だいたい予想はできる。カンチパと同じだろう。

「ふんっ」

「ぬぐぐぼっ」

もう一回拳でぶん殴ってやった。ネズミは勢いよく転がり、庭の外で気絶する。すつきりした。

しかし、小物ね。なんでこれで大佐になれたのかしら。

「よくやった」

と、ゲンさんの声。そう言えばゲンさんとたしぎも来てたのよね。ゲンさんは笑顔でグープーズ。たしぎは、何故か震えている。恐ろしそうに。

「たしぎ、怯えることないって。こいつらはただの腑抜けよ。何もできやしないわ」

私は安心させるように手を大きく広げる。しかしたしぎはまだ震えている。

「ナ、ナミさん。そうじゃ、ないんです」

たしぎはそう言いながら、目を湿らせる。もう少しで涙がこぼれそ

う。

「ちよ、ちよつと。どうしたのよ」

「ジュウシン、さん。あの人の言っていたこと。その意味が、分かっちゃって……」

ああ、昨日のあれか。たしぎはジュウシンに突つかかっていたものね。海軍や政府の正義を信じて疑わず。

それで行くと、ネズミ大佐って似てるかもね。話に出た政府に。アーロンと手を組んで賄賂をもらい、海軍本部にはアーロンの蛮行を隠す。アーロンが倒されると、正義面して遅れてやってきて、金寄越せ。うん。似てる。より小物にした感じだけどね。

似てるから、たしぎは感じちゃったのね。ジュウシンの予想が正しいかもしれないって。私は海軍に悪いやつもいると知ってたから大して気にしなかったけど、たしぎにとっては大事だったのね。

「ご、ごめん！ ごめんなさい！ ナミさん。私、ネズミ大佐と、戦えなかった」

「いいって。そんなこと気にしなくても」

「ごめんなさい。知っていたのに。ううつ。ナミさんはいい人で、ネズミ大佐はアーロンとつながり、村から搾取していたって」

ボロボロと涙を流すたしぎ。私はその泣き顔を隠すように、胸にそつと抱きしめる。

「ごめなさい。海兵が、相手も海兵だからって、庇って。友人のあなたを見捨てるようなことつ。私はなんて、酷い！ 醜い！」

「いやいや、大丈夫だって。たしぎは全然悪くない。ちよつと勘違いしていただけよ。私は気にしないからさ」

泣いて懺悔するたしぎ。慰める私。彼女が心の整理をするには、少し時間が必要だった。

原作開始・東の海の冒険編 ルファイVSナミ 前哨戦

17歳となり、海賊王を目指して海に出たルファイ。すぐさま大渦にのまれ、船が大破してしまふ。が、樽に入つて漂流し、その樽がコビーという名の少年に拾われる。

場所は海賊船だった。コビーは海兵になりたかつたのだが、間違つてアルビダの海賊船に乗つてしまつたという。ルファイはコビーの覚悟を試した後、アルビダをぶつ飛ばした。

その後、コビーを海軍基地まで連れて行くことにした。そもそもルファイには航海技術がないので、コビーがルファイを近場の町まで連れて行くと言つた方が正しいが。

シエルズタウンという町についたルファイ達は、海軍支部モーガン大佐の圧制に苦しむ町の姿を目の当たりにする。また、モーガンのバカ息子ヘルメツポの虐待から女の子を庇うために海兵に捕まつたという男、三刀流の海賊狩り、ロロノア・ゾロに出会つた。ルファイはゾロを気に入り、仲間にすることにした。が、ゾロはヘルメツポの卑劣な罠にかかり、処刑されようとしていた。ルファイはゾロを救うために海軍に戦いを挑み、コビーも少し助力する。

その戦いの中、なし崩し的にゾロはルファイの仲間となつた。二人で共闘し、モーガン大佐を簡単に倒した。コビーもなんとか海軍に入れた。

ルファイとゾロは町の住民に感謝されたが、海兵は立場上それを口にすることができない。出航したルファイ達の船に向かつて黙つて敬礼することにより感謝の意を伝えたのだった。

さて、ルファイの仲間探しは続く。ルファイはまず音楽家が欲しいと言つたが、ゾロは航海士が先だと言つて譲らなかつた。ゾロもルファイと同じように航海の能力がなく、運任せで流されていただけであり、目的地に到達しない辛さを嫌という程知っていたのだ。

しかし、いい航海士はなかなか見つからない。そもそも陸地にすら

たどり着かない。ルフィもゾロも地図を持っておらず、持っていたとしても読めない。海流と風に流されるままに、大海原を漂う。

大食らいのルフィとゾロ。食糧は1日で尽きた。飲み水も2日でなくなる。狭い船に男2人だけ。夢を語る余裕もなくなる。ルフィは腹が減ったと怒鳴る。その声にイライラするゾロ。まさかこのまま餓死なんてことは……。

少し不安になったその時、ルフィが空に飛ぶ大きな鳥を見つけた。食糧だ。

「待て！ 鳥いいいい！」

ルフィは腕をゴムのように伸ばし、鳥を捕まえる。

「でかした！ ルフィ！」

「うわーっ！ 捕まったー！」

と思いきや、逆にルフィが鳥に捕まってしまった。鳥に啜えられて空を飛ぶルフィ。

ゾロは放っておこうかなと思った。ルフィの怒鳴り声にイライラしていたから少し懲らしめたい。それに助けなくともルフィはあの程度の鳥に負けない。

しかし、すぐに気付いた。下は海。ルフィは悪魔の実の能力者であり落ちれば泳げない。助けにいくべきだ。

「バカ野郎！」

ゾロはオールを手に持ち、全力でボートを漕ぐ、鳥を追いかけながら。

これは、ある意味幸運だった。鳥が向かう先に、鳥があつたからだ。人もそれなりに住んでいる。久しぶりの食事ができる。

「うわああああ！ 助けてくれー！」

「その人ー！」

「乗せてくれー！」

ふと、声が聞こえた。男が3人、溺れている。サーカスのような妙なメイクをしている怪しい連中だ。

助ける義理はない。何よりこちらもルフィが気になる。

「こつちも急いでんだ！ 乗りたきや勝手に乗れ！」

「そんなー!」

「殺生なー!」

ゾロはオールを漕ぐ手を緩めない。

しかし突然、船が大きな波にぶつかった。

「おわっ、ととっ」

そして強風。さらに大雨。

突然の天候の変化だ。船は風と波に押される。

「なんだア? にわか雨か?」

ゾロは空を見上げる。

雲が近い。とても近い。ジャンプすれば届きそうな距離に、小船くらしいの大きさの黒い雲が浮いている。

「雲ってこんな低いのもあるのか? うわっ、この雲、こっち狙ってねえか?」

雲が何故か、ピンポイントにゾロの方に雨や風を降らせる。偶然とは思えない。どういう理屈だ?

しかし、相手は自然。語りかけても仕方のないこと。ただ現実を受け入れればいい。

「敵なら切るだけだ。喧嘩売る相手は選ぶんだな、雲」

ゾロは三本の刀を取り出し、構える。

「鬼、斬り!」

言いながら、雲に飛び掛り、斬りつける。

雲はばっさりと両断された。

「ふんっ」

ゾロは刀を仕舞い、再びオールを漕ぐ。

「す、すげえ!」

「あの雲を倒すなんて!」

と、いつの間にか妙なメイク男達が船に乗っていた。

「って、何乗ってやがる!」

ゾロはノリで殴ってしまうが、勝手に乗れと言ったのは自分だったと思ひ出す。

「ええーっ。そんなー」

「勝手に乗れって言ったのはそっちじゃないですか」

「そうだったな。まあいい。乗るなら漕げ」

ゾロは妙な連中にオールを手渡す。ゾロは顔が怖く、また先ほどの剣技で妙な男達は海賊狩りの男の話を思い出していたので、妙な男達は激しくうなずき、オールを手に取った。

強い。あの男。バギーの比じゃない。

雲相手に迷わず切りかかるなんて。雲に攻撃は効かないけど、あの殺気は侮れない。この距離でも背筋がゾクリとしたわ。

でも、正体は分かる。三刀流と言えば海賊狩りのゾロ。見た目が怪しいからなんとなく攻撃しちやっただけど、賞金稼ぎだから敵ではないはずよね。無理に戦う必要はない。黙っていれば向こうも攻撃してこないはず。

ただ、後ろに余計な連中が乗ってるわね。バギーの所の下っ端。あいつらだけじゃ何もできないだろうけど、バギー救出に動くのは目に見えてる。陸に上がり次第仕留めましょう。

「降ろせこの！」

「キーツ」

「ふん！ 鳥なんかには負けるか！」

うん？ 上から人の声？ ユズの悲鳴も。

って、え!? ユズが若い男に襲われてる？ どうして？

あの後、たしぎは手紙を残していなくなった。1人で旅に出て心を鍛え直すのだという。海兵は辞めるかもしれない。私が世界地図を書く旅に出かける時、使えそうならクルーに入れて欲しい、と綴られていた。

私はしばらく村で過ごし、復興を手伝った。子ども達にトレーニン

グを教えることもあった。彼等はジュウシンサーカスの衝撃が忘れられないようで、自分もああいふことができるようになりたいと言つて、私に寄つて来た。面倒なので途中からゲンさんに任せただが。

復興作業が落ち着くと、ノジコを連れてコージ王国に向かった。今度はトレーニングのためではない。観光のためだ。

と言っても、トレーニング自体は毎日欠かさず行っている。村が解放されて強くなりたいという意欲が落ちたのは確かだが、ジュウシン流トレーニングは心地いいし、楽しいし、美容にも健康にもいい。以前海兵に聴いたが、ジュウシンが若く見えるのは生命帰還という技で細胞をコントロールしているからだとか。この技はジュウシン以外にも使い手が複数おり、ジュウシンより年上なのに10代に見える女性もいるとか。髪や体脂肪率も操れるらしい。六式のような政府の奥義であり修行すれば誰でも習得できるようだ。ならば私もこの技を覚えたいと思った。簡単ではないだろうけど。

島へ着く。ノジコはまず、港からでも見える海王類と巨人の迫力に驚いていた。まあ誰でもそうなるわよね。それから、例のイルカが寄つてきて、女のイルカを紹介しろとせがんできた。適当に無視しておいた。

初日は軽く買い物して、カフェでお茶して、例の海軍の宿舎で寝泊り。宿舎が使えるなんて、とノジコは驚いていたわ。

翌日は王城に行ったわ。立派なお城は入場無料で、娯楽施設になっている。コンサート、サーカス、ミュージカル、ダンス。いろいろやってたわ。たしぎとも行きたかったな。ちなみに王族は一般人として生きているが世界会議には出席しているらしい。

さらに翌日。演習場を回ってノジコに私の実力を見せてあげたわ。フグ型フィンをつけて水面を走ると驚いてた。ノジコは大きなイルカ型フィンをつけて、3歩くらい沈まずに済むかな？ というレベルだった。

射撃場、投擲場も回ったわ。射撃はモデルガンを貸してもらつて的に撃つただけだけだね。本物の銃は恐い。

投擲場は、ジュウシン達が投擲海賊団を名乗っているだけあって、

すっごい本格的だったわ。やり投げ、石投げ、円盤投げ、砲丸投げ、ハンマー投げ。筋骨隆々な男女が「ぎゃっ!」「とうとう!」「きーっ!」「ちよれい!」などと奇声を上げ、ものすっごく真剣に投げている。シツジョーの本に書いてあった声によって大きな力を出すってやつ。あれね。

少数だけど、水投げ、空気投げ、なんてのもやっていた。水投げを教えているのは魚人。やっぱ魚人って投げるの上手いのね。アークンも水で人を殺せるし。空気投げは水投げよりも難しいらしい。その極意である空気心を教えられるのはジユウシンとシツジョーと5mくらいある魚人の女性、キャビアだけらしい。でも、私は空気投げの方ができそうだと思った。空気を感じるの得意だから。

ふと、投擲場の隅の方から歓声が上がった。

「うおおおお!」

「久しぶりにジユウシンさんが教えてくれるらしいぞ!」

「ジェリーさんとお子さんも一緒だ!」

ジユウシンがここに来るのは珍しいらしい。若い女性と6歳くらいの我がままそうな男の子を連れている。何となく、愛人とその子どもだと思う。

「がははははは! どうだ! それえええ!」

我がままそうな子が手に持つ棒を振るう。えっ、風が出た?

「うわっ」

「ちよっ、つよっ」

棒の先から風が出て、大きな男たちを飛ばす。今のは流体の操作とは違う。棒から勝手に風が出た。私にはそう感じた。

「がはははは! ママに作ってもらった芭蕉棒だ! それぞれそれぞれええええい!」

「うわわわっ」

「ちよっ、やめろって。やり過ぎ!」

棒を振るたび飛んでいく男達。すごい威力。しかも、調整できるみたいね。棒の振り方によって風の出方が違う。

「何あれ? どういう理屈?」

ノジコが聞いてくる。

「分からない。でもあれ、めっちゃくちゃ欲しい」

「えっ……」

ノジコは嫌そうな顔をした。確かに風に煽られるのは迷惑だろう。しかし、私は別のことを考える。あの棒があれば、風を感じられる私ならば、すごいことができる。自然現象を再現できる。おそらく。

ジュウシンは演習場の目立つ場所に行くと、人を遠ざけさせた。大技を見せるらしい。

「まずは。空気をつかむ。この時にゆっくり動くことを意識するんだ。大きな筋肉を使うには遅い力の波が必要だからな。そして始動は大きな筋肉の方が有利」

ジュウシンはお腹の前あたりで空気をつかむポーズをした。いや、実際に掴んでいる。固体のような感触のはずだ。私にはそれが見える。

「そして回転を始める。すうう、ぐわん、ぐわん。すううい」

例によって変な声を出しながら、ゆっくりと回転を始める。

えっ、あっ!? や、やばい! これはやばい!

手に持つ空気が、あんまりにも大きかった! 私の傍にある空気さえ、彼の手のひらの中!

「うええう、おああお、ふおおふ、ふんふ、ふんぬ! ふんぬ! ふんぬ!」

ジュウシンの回転が徐々に速くなる。その回転に空気が巻き込まれ、吸い込まれていく。風が吹く。突風が吹く。砂煙が舞い上がる。砂利や葉っぱが皮膚を打つ。

やばい! これ以上はやばい!

「うひゃあああ!」

恐ろしくなつて変な声を出してしまった。しかしまだ怖い。私にはノジコの頭を押さえ、二人で地面に伏せる。巨大な竜巻に、巻き込まれないために。

つと、風が弱くなつていく。ジュウシンが、竜巻を上投げたからだ。

「いたたたたつ。何よ、あれ……」

ノジコが顔についた砂を落しながら言う。

「人間の力で、竜巻を起こしたのよ。しかも、あの竜巻、コントロールできるみたい」

私は上空を指差す。竜巻が空を飛んでいる。

「はああああああ？」

叫ぶノジコ。気持ちは分かる。やっぱり無茶苦茶ね。

ジュウシンはジェリーと呼ばれた女性に近づき、説明を始める。

「今のはいつもの回転風投げと少し違う。自分の力や覇気をできるだけ弱くして、その分回転数を増やした。でも、威力は変わらないだろう？」

「むしろちよつと強かったかも」

「だろ！ だろ！ そうだよな！」

ジェリーが答えるとジュウシンは喜んだ。

「やっぱりそうだった！ 力を入れ過ぎて、自然を感じ取る能力が弱くなっていたんだ！ そしてこれが弱くなると、技の威力が落ちる！

そこで、芭蕉棒の定番だ！」

「ああつ。僕のなのにい」

ジュウシンは男の子から棒を取り上げた。

「つてまずい！ ジュウシンがあれを使っちゃうと！」

「やめてよ。あなたが芭蕉棒使うと死人が出るわ」

ジェリーさんがジュウシンの腕をつかむ。よかった。まともな人がいてくれた。

「いやいや、そんなへまはしない」

「あなたの手加減、あなたが思ってるより下手よ？」

「そうか？」

「とにかく、あなたは使わないで」

ジュウシンはガックシ崩れ落ちた。愛人の方が立場は上らしい。愛人かどうか知らないけど。

男の子がジェリーさんに近づく。

「ママ。僕の……」

「あんたもダメ。さつき人に向けて使ったでしょ」

「ええっ。そんなあ」

ジェリーさんは男の子を睨む。男の子もジュウシンと同じように崩れ落ちた。

と、ジェリーさんは何故か、私の方を見た。

「どう？ あなた使ってみる？」

「えっ！ いいんですか!？」

私の使いたいという気持ちを察してくれたのだろうか。心を読めるようだしそうなのかもしれない。

とにかく、運がよかった。早速使わせてもらえるなんて。

棒を手に持つ。棒だけど凸凹があつて木の枝みたい。だけどこの方が持ちやすい。

重さは私がいつも使っている棒より少し重い。だけど大丈夫。十分操れる。

まずは確認。軽く振ると、軽く空気が出る。強く振ると鋭い空気が出る。反対に引くと、空気が引く。その時に空気を触ってみる。若干温度が下がっている。押すと熱くなり、引くと冷たい。棒の中で圧力差が起こって温度が変わっているのだろう。

「ええっ、じゃあ、こういうのとか」

私は押して引いてを繰り返す。ただ繰り返すだけじゃない。流体の流れ。熱風と冷風の位置をきちんと配置する。そして、混ぜる。

「で、できた……っ」

「すごいわね」

ジェリーさんがパチパチと拍手してくれた。

「やはり天才だったか」

ジュウシンが腕を組んでにやにや笑っている。ちよつと恐い。やはりって何？ いつから見えたの？ 私のこと。

彼等以外の屈強な男女も、とても驚いている。口をあんどり開けている人もいる。ちよつとジュウシンサーカスを見た他所の村人のように。

そんなにすごいことを私はやったのだろうか。あのすごいサーカ

スを見ているから、ここにいる人なら雲くらい出せると思っていたのだけど。

「信じられない」

「なんで、ジユウシンさんの技を……」

「あんな若い娘が。ジユウシンさんにしか理解できない領域を」

「ありえない。あの程度の身体操作能力で」

「まさか天然もの!？」

ああ、ジユウシンの技だったのね。それも、彼等の反応を見るに、けっこう難しい技。もしかして、シツジョーの本で言うところ上級だったりして。きやーっ、どうしましょう。私って天才なのかしら。

でも、ノジコは困惑している感じだ。あんまり喜んでない。

「どう！ ノジコ！ すごいでしょ！」

「え、ええ。まあね」

やっぱりあんまり喜んでない。まあ天才だからと言って人生プラスとは限らないからね。アーロンは天性の強さがあっても人を不幸にするだけだったし。

その後、投擲場の男女は「俺も」「私も」と言って次々と芭蕉を手に取り、振るっていった。皆、私に負けじと雲を出そうとしていたけど、誰もできなかった。強風や竜巻は出せていたけど。

なお、ジユウシンは彼等に雲を出すコツを説明していたのだけど、その時には『素手で』火と冷気を起こしていた。意味不明です。そして芭蕉棒を使ったわけでもないのに、私より大きな雲を即座に作っていた。結局私には理解できない領域の技だった。

皆が芭蕉棒を試した後、ジェリーさんがそれを持って私に寄ってきた。

「はい。あなたにあげる。この道具はあなたが一番ふさわしいみたいだから」

「いいんですか？ でも、ジユウシンさんやお子さんのために作ったんじゃない……」

「いいって。あいつらには必要ないから。ジユウシンにとって実験にはなったみたいだけだよ」

「で、では。いただきます！　ありがとうございます！」

なんて幸運。そして喜ぶ私を見るジェリーさんの笑顔。なんていい人なんだろう。

ノジコは一人で焦っていた。「どうしよう。これに見合うお礼なんて出せないよ」と。そんなこと気にしなくていいのに。

翌日。ノジコが「絶対にお礼としないとダメ」と言うので、ジェリーさんの家に向かった。

前日に聞いていたが、家はジュウシンの家のすぐ近くにあった。1人で小さなカフェを経営していた。客はそこそこ。私達も客として店に入った。

私達はお礼として船に積んであったみかんを全部持っていった。200個くらいだ。邪魔になるかもしれないと思ったが、ジェリーさんただ笑顔で「ありがとう」と言うだけだった。いい人だ。

しかし、ノジコはまだ不安らしかった。「本当にいいんですか？

こいつにこんな高価なものあげちゃって！」「別のお礼もー」などとしつこく言った。ジェリーさん「大丈夫。気にしないで」と返していたが、ついてには「うーん。どうせならもつとすごい使い手になって欲しいかも」と言った。

ノジコは私の頭を手で押さえつけ、上下に振った。お礼をさせるように。「分かりました！　厳しく言いつけます！」と返しながら。

ちよつと酷いわよね。こんな子ども扱って。焦るノジコは見ていておもしろかったから、言い返さなかったけどさ。

私は絶対にジェリーはすごい使い手だと思っていた。あのジュウシン相手に全く怯まないし料理の包丁裁きもすさまじいからだ。呼吸は一般人に似ているがこれは強さを隠すための偽装だと感じる。そして性格は穏やかで話しやすい。だからちよつと聞いてみることにした。

「ねえジェリーさん。覇気って何なの？」

この島の皆がよく口になっている覇気。シツジヨの本にも出てくるけどその内容は詳しくなかった。

ジェリーさんは少し悩んでいるようだった。

「うーん……。まあ、いつか」

何がいいのだろう。間が気になる。

「グランドライン、特に後半の海では有名な戦闘技術よ。戦闘以外にも使えるけど」

「そうなんですか」

「覇気は大きく別けて3つ。霸王色、武装色、見聞色と呼ばれる覇気があるわ。霸王色は威嚇による心の振動で他人を気絶させたりする。武装色は体に意志を込めて硬くする。見聞色は他人の心を感じ取る。武装色と見聞色は誰でも身に付けられるけど、人によつて得意不得意がある。霸王色は完全に才能と言われている、100万人に1人しか身に付けられない」

「へえ。じゃあジュウシンさんは全部できるんですか？」

「いいえ。あの人は霸王色はできない」

「えっ」

ジュウシンにもできないなんて。霸王色はほんと珍しいってことなのかな。

「まあ霸王色の真似事はできるけどね。あの人は空気の心を捉え、動かすことができるから。これは魚人空手の技の応用らしいけど」

「へー」

サーカスでもジュウシンと魚人の女性の風だけは格が違った。やっぱりあれって心があったんだ。

「あなたもたぶんできるわ。空気を感じ取るのが上手だから」

「えっ、本当ですか？」

「うん。きつと」

こういう格上の人に褒められるとうれしい。

と、そこでジェリーさんが何やら考え始めた。

「うーん、そうねえ」

「どうしました？」

「いや、あなたの修行方法を考えていたのだけど」

「えっ。本当ですか？」

「ちよっ、ナミ！」

こんな人に修行を考えてもらえないなんてついてるわね。ノジコは「またお礼が返せなくなるー」と苦しんでいるけど。

「まずは、動物と仲良くなることかな」

ジェリーさんはにこりと笑った。

「動物？」

「うん。そう。実はね……」

ジェリーさんの説明はこんな感じだった。動物は言葉が使えない。だから動物と意思疎通するには言葉によらない会話が必要になり、それが相手の心を読むという見聞色の覇気の練習になる。また、動物は野生の勘で動いているため、さまざまな物事が人間よりも深く理解でき、思考によらない爆発的な動きもできる。その野生の勢いが武装色の覇気に必要だという。

——
ということがあり、仲良くなった鳥のユズ。というより餌付けした
ただけだけ。

そのユズを襲うのは許さない。

「このー！」

「えぶっ」

私は芭蕉棒で男を叩きつける。風の引きつけも利用し、横腹に深く
入った。男は勢いよく飛んでいく。ふつうの相手ならこれで決まり。

「だけど、違和感があったわ。棒の衝撃が吸収されたような。……ま
さか鉄塊の応用、餅塊（もちかい）？ そのレベルの相手なの？」

「いちちちっ。おい！ 何しやがるー！」

男は腹を押さえながら立ち上がる。やっぱりあんまり効いてない。
若い男。歳は私と同じくらいに見える。背は私よりちよつと高い。
顔はふつう。でも頭が悪そう。

服装は田舎の冒険少年って感じ。立ち姿勢は一般人にも見える。
だけど違う。野性味がある。呼吸が一般人のそれじゃない。この男
もまた、強い。

「おい！ 急に殴ってきたのおまえだな！ 痛エじやねえか！」
もうほとんど痛がつてない。やっぱり餅塊を使える達人？ なら、戦うべきじゃない。

「ご、ごめんなさいね。その鳥、私のペットだから」

と謝っている、急に男の顔から怒りが消えた。

「あれ？ なんで痛エんだ？」

「ん？ いや、意志を込めた攻撃だから」

「石？」

意志の発音が石に聞こえるんだけど。

どういうこと？ 餅塊の使い手が、覇気を知らないの？ 海兵じゃないの？ 厳密には私のは愛であって覇気じゃないらしいけどさ。

あつ。まさか彼、私と同じ天然の使い手？

「とにかく、その鳥は私のペットなの！ 攻撃しないで！」

「何イ！ こいつは俺のめしだぞ！」

「ダメだつて！」

男の腕が伸び、ユズを捕まえようとする。その手を、咄嗟に芭蕉棒で払いのける。

今、咄嗟だったんだけど、こいつの腕、ありえないくらい伸びたわよね？ まさかつ。

「痛エ!! だからなんで痛エんだ？」

「ひ、ひいいっ!？」

や、やばいわこいつ。体を伸ばす技と言えば生命帰還。しかもとんでもないレベルの使い手よ。あんなに一瞬で、あんなに長く伸びるなんて。細胞をまるでゴムのように操ってる。信じられない情報処理能力よ。

ジユ、ジユウシンより上かもしれない。生命帰還の技術は。この男ヤバ過ぎる。に、逃げようかしら。勝てるわけないわよね。

「す、すみません！ 失礼しました！」

平謝りし、すぐさま猛ダツシュで逃げる。後ろからユズの悲鳴が聞こえる。でも無理。相手が悪すぎる。

見捨てるわけじゃないのよ。隙を見て、後で取り返しに行くから。

バギー一味崩壊

相手は格上。正面からの戦いは危険。でも何もできないってわけじゃない。

あいつは見聞色を使えていなかった。攻撃が当たったし意志のことを石って言ったからたぶんそう。

だったら、この芭蕉棒を使って、温度差を作れば。光の屈折を上手く利用して、姿を消せるはず。

ミラージュ・テンポ。

やった。できた。私の姿が目の中のガラスから消えていく。

蜃気楼の理論を空気の実操作に応用。一回でできちやうなんてさすが私ね。

でも口に出して喜んじやダメよ。あいつは近くにいるからね。建物に身を隠しつつ、少しだけ顔を出す。

「ようし！ どうやって食おうかなー？ やっぱ丸焼きかー？」

「キー！ キー！」

ゴム男はユズを自分の腕でグルグル巻きにしている。結んでいるわけじゃないから、ちよつとしたきつかけを与えれば外せると思う。

ミラージュ・テンポ。

とりあえず新技で姿を隠す。そしてこの、蜃気楼の壁を前方に動かしながら、自分も前に歩いていく。

かなり難しいわ。前方に進もうとしているから特に難しい。等温線は横に伸びてるから、横に動くのは楽なんだけどね。あと後ろも。まあでも水や空気を押すっていう練習をしてきたから、温度差を保つたまま空気を押すってことも、できなくもないわ。実際できてるし。

「おーい！ 誰かいねえかー!? マッチくれー！」

クソツ。男が叫びながら走り始めた。この空気を押しながらこのスピードには追いつけない。

ちよつとリスクがあるけど、解除するしかないわね。

男は大声を出し、手当たり次第にノックしていく。誰も出ない。町人はバギーに見つかりたくないから町の外れまで逃げてるのよね。

ああでも、1人歩いてきたわ。この町長さん。

「おっさん！ マツチくれ！」

「君は今日ここに来たのか？」

「ああそうだ！」

「悪いことは言わん。さっさとこの島から出て行った方がいいぞ」

厳しい顔で言う町長さん。私も同じこと言われたわ。バギーがいるからって。

「うん？ なんでだ？」

「この町は残虐な海賊に支配されているからだ」

「ふーん」

「ふーんって。分かつてるのか!？」

ゴムの男は興味なさそう。まああれだけの生命帰還が使えるのもものね。腕に自信はあるはずよ。

おそらくバギーより彼の方がずっと強い。呼吸の野生味、深さを考えるとね。たしぎくらいの強さはあると思うわ。生命帰還を合わせれば、もつと強いでしょうけどね。

バギーは遠目に見ただけだけど、小物だった。呼吸も浅い。身体能力は私と同じくらいじゃないかしら。

「それより飯屋ってどこあるかな？ おれ腹減っちゃまって」

「店はどこも畳んじまってるよ。誰もバギーに見つかりたくないからな」

「えーっ」

って、こんな思考にふけっている場合じゃなかったわ。町長さんとゴムの男が話しているこの間。どうしても集中力が落ちる。この隙に、近づく。

「くっそー。バギーめ許せん！ おれのめしを邪魔するなんて！」

「まさか戦おうなんて思っただろうな？ 相手は海賊だぞ！」

「そんなもん気にするか。おれも海賊だ」

「何!？」

えっ、こいつ海賊だったの？ この成りで？ ……裏は無さそうよね。ただのアホ面に見える。

でも、海賊なら話は速いわ。手加減は必要ない。

最初の一撃で、決めようかしら。相手は格上。油断しているこの時が最初で最後のチャンスだと思うのよ。だから、ありったけを込める。最高のパフォーマンスができれば、一発ノックアウトも不可能じゃないはず。

よし。やるわ。まずは究極の静を作る。

感じる。全身を巡る血液の流れ。肌を差す潮風の動き、冷たさ。潮の匂い。チリチリと肌を照らす日差し。

身も心も、私を包む世界に溶け込ませる。乱流の中を動く時と同じ。現在、今この時の世界を全力で感じて、意識を広げていく。

見えた。風の流れのその先。そして同調していく体。

ふふっ。あれから例の川いっぱい練習したからね。時間をかければいつでも静のゾーンに入れるのよ。そして、動のゾーンも、引き出せる。

「ふんっ」

逆複式呼吸。静寂の世界に一石が投げられ、波しぶきが上がる。

そこに、気持ちを込める。心を震わせる。

世界を感じる喜び。無限に広がる意識が生む浮遊感。楽しさ。それによって生まれる感謝。現代への感謝。何より、愛！ 愛を込める！

「っ、お、おおおうー」

「ドゲブウツ!？」

決まった。最高の一撃。身体、意識、心。全てが一致した今の私の最高の一撃。

男は舞い上がり、遙かかなたまで飛んでいく。空中でユズを手放した。やった。

ユズはふらふらと落ちてから、翼を広げ、なんとか風に乗る。

「ユズー！」

ミラージュ・テンポを解き、ユズに呼びかける。

「キーー！」

ユズは答え、私の方へと戻ってくる。今なら鳥の気持ちも分かる

わ。彼は喜んでる。

「き、君がやったのかね。今のは」

町長さんが目を大きく見開いて驚いている。

「ええそうよ。だから言ったでしょ。バギーなんか怖くないって」

「う、うむ」

まあでも、ミラージュ・テンポの有無は大きいけどね。これがないと無傷では勝てないと思う。

「いきなり、出てきたように見えたが。まさか、悪魔の実の能力」

「違う違う。簡単な光の屈折よ」

ふふっ。そう見えちゃうのかな。私が初めてコージ王国に行った時と同じような反応ね。

ふと視界に入った。何かが放物線を描いて飛んでくる。

「なんだあれ？ って、うちの船長じゃねえか！」

それはルフィだった。鳥に捕まった次は大ジャンプ。何故こうなるのか。探す手間が省けたのは助かるが。

「おいおいルフィ。何してやがっ」

空中のルフィに話しかけながら、気付いた。ルフィは白眼をむいて気絶している。そして頬にくつきりついた棒で殴られたような痕。

「や、やられたってのか!? 何者かに!」

ルフィは受け身もできず着地し、無造作に回転しながら跳ねる。推進する勢いは止まらず、跳ねながらとある民家に突っ込んだ。

「おい! 大丈夫か!」

急いで駆け寄るゾロ。ルフィの突っ込んだ壁には穴が開き、埃が立ち上る。

その埃の奥から、声がした。

「う、いてっ。どこだここっ?」

「ルフィ!」

どうやら壁にぶつかった拍子に目が覚めたようだ。ひとまず安心

だ。

「おう！ ゾロ！」

「何やってんだお前は。全く」

ゾロの心配を他所に、ルフィはケロッツとしていた。

「そーいや俺は何でこんなところにいんだ？ たしかさつき、鳥の肉を食おうとして」

「覚えてねえのか？」

「うーん。思い出せん」

「誰かに殴られたんだろ。自分の顔見てみろよ」

ゾロは自分の頬つぺたを指差し、その後には家の窓を指差す。

ルフィはつられて窓を見る。そして右頬にくつきと長方形の痕が残っていることに気付いた。

「なんだこれ！」

「誰かに棒か何かで殴られたんだろ。お前、けっこうぶっ飛んでたぞ」

「何い！」

「心当たりねえのか？ 海賊か海兵か」

ルフィはうーんと顎に手をおいて考える。そして、ハツとした。

「まさか！ 肉泥棒！」

「肉泥棒？」

「おれが捕まえた鳥を、自分のだつて言つて盗もうとした女がいてよ」

「女だア？」

ゾロは疑ってしまう。自分の認めた男が女に負けたとは考えにくい。ゴリラみたいな女だとしても。

何より打撃が効かないはずのゴムの体にどうやってダメージを？

「まったく食いしん坊な女だった。いきなり棒で殴ってきやがってよ」

「棒？ お前のほつぺたの痕についてるくらいの大きさか？」

棒、ということとは本当にその女が犯人なのだろうか。

「何言つてんだゾロ。棒だぞ。お前の刀より長いくらいの大きさだ」

「ああ、うん」

棒の直径を聞いたのだが、説明が面倒なのでやめた。

「許せん。おれから肉を奪いやがって。食い物の恨みは深いんだぞ」
ルフィはやる気になっている。このままその女との戦いになるだろう。

ゾロは基本傍観に徹するつもりだ。一対一の戦いに水を差す気はない。船長がそこらの女に負けるようでは困るし、格上だとしても女相手に二対一は恥ずかしい。ルフィの勘違いということもありえるので、その時は自分が止めるつもりだが。最後にもう一つ、聞きたいことがあった。

「待てよルフィ。お前はゴムのはずだろ？　なんで棒でやられるんだ？」

「ああそうだった。あいつの棒は痛えんだ。なんでだ？」

ルフィも分からないらしい。残念だ。

「俺が知るかよ」

「はっ。まさか、ばか力」

そしてルフィとゾロは女の搜索を始める。

女がどこにいるかは分からない。とりあえずルフィが飛んできた方向に歩きながら、それらしき人物を探すことにする。

「出てこーい！　肉泥棒ー！」

「それで出てくる泥棒はいねえよ」

ルフィはゴムの能力を使って建物の屋根に上り、叫ぶ。またゴムの能力を使い、空中を飛んで人影を探しながら、叫ぶ。

「おーい！　肉泥棒ー！　くそー！　腹減ったー！」

ルフィが腹減ったと言うので、ゾロも腹が減っていたことに気付く。どこかで飯を食わせてもらおう。

近くの民家にノックする。「おーい」と声で呼ぶ。反応無し。別の民家をノックする。そこも反応なし。また別の民家も反応無し。

「あつ、おっさんー！」

と、そこでルフィが誰かを見つけたようだ。ゾロもルフィの飛んでいった先に向かう。

そこはペットショップだった。経営者はいないが犬が見張りをしていた。ルフィが見つけた男はこの町の町長であり、犬に餌をあげに

きたのだという。

「バギーがやってきて、町の皆は逃げたのだが、この子は動こうとせんのだ。主との約束を守るために」

店主は亡くなっているが、犬は店主の言葉を守り、店番を続けているのだとか。忠犬である。

「なあおっさん。そんな話より飯食わせてくれねえか。おれ腹が減っちゃまってよ」

「今言うことかよ。まあ、食事には俺も賛成だが」

町長は困惑していたが、食事は出してくれた。いい人だ。

「あーっ、うまかったー。ありがとなおっさん！」

「構わんよ。しかしきみ、本当にバギーと戦う気かね？」

町長は以前にルフィとした会話の内容を気にしていた。

「バギー？ 女の名か？」

ゾロはそいつがルフィから肉を奪った女だとあたりをつける。

「女？ いや、バギーは男だが」

しかし違ったらしい。

「バギーって誰だ？」

そしてルフィは覚えていなかったらしい。

まさか殴られた衝撃記憶が飛んだ？ 町長は説明するかどうか迷った。言えば戦おうとするかもしれないからだ。しかし、一方で戦って欲しいという感情もあった。そしてその場合に記憶がないというのは都合がよかった。

「道化のバギー。ピエロのようなメイクをした海賊だ。この町の一角を占拠し、やりたい放題暴れ回っておる。町人はバギー達に見つかるのを恐れて町の外れに隠れるように暮らしておる。町に人がいないのはそのためだ」

「ああそうだった！ めしの邪魔をしたやつだ！」

「お前の記憶はめしだけか」

ルフィは怒って立ち上がる。

やはりバギーと戦う気はあるらしい。町長は、今回ばかりはもう一押しすることにする。

「実は勇敢な少女が、バギーと戦うと言っておつてな。よければ協力してやってくれんか？」

ナミのことだ。強いのは分かったが若い娘。一人で戦わせるのは心配だった。ピンチになったら町長は玉砕覚悟で突っ込み、ナミをなんとか逃がしたいと思つていたが、町長の力量では時間稼ぎもできない可能性もある。

「女？ 別にいいけどよ。バギーを倒すのはおれだ。そして肉を腹いっぱい食う！」

「ああいいだろう。好きなだけ食わせてやる」

「女で思い出したが、バギー一味に棒を使う女はいるか？」

「見たことはないが、わしも詳しくは知らんからな。いるかもしれない」
「そうかい」

ゾロの予想では女はバギー一味。ルフィから肉を盗む女なんて海賊くらいしか思いつかない。そしてその女は強いようだから、ルフィが相手をすることになるだろう。ならば自分が、一番おいしい所をもらう。船長のバギーは俺が斬る。

ゾロは激しい戦いを思い浮かべ、一人、口端を吊り上げた。

ナミは雨が降ったら戦闘を始めると言つていた。現在は晴れ。雨がいつ降るかは分からない。町長がそれをルフィとゾロに告げると、2人は立ち上がった。

「待つのは面倒くせえ。おれは行くぞ」

「俺も同意権だ」

「そうか……」

町長は少しホツとした。できるなら少女に戦つて欲しくなかったからだ。若い男たった2人に任せるのも気が引けるような思いはあるが、少女に比べればマシだ。

これで2人が負けてしまい、どうせなら協力させるべきだった、となつてしまう可能性もあるが。総合的に考えて、現状が一番いい。

2人は町長に案内され、バギー一味が占拠している酒場に向かう。そこで気付いた。自分たちが向かう先、その上に、黒々とした雲が広がっていることに。

「あの雲は……」

ゾロは気付く。自分がこの島に入るときに見た雲に似ている。黒くて意志を持ってしているように動く。高さはとても低い。そしてどしや降りの雨を降らせる。ただ、大きさが違った。ゾロが見たものは小船くらいの大きさだったが、今は城くらいの大きさ。

建物に近づくにつれて、風が強くなってきた。建物の破片も飛んでくる。男達の悲鳴も聞こえる。バギー一味の声だろう。しかし、雨が建物を覆っているため、どうなっているかは見えない。

ミラージュ・テンポで姿を隠したまま、雲を大きくしていく。大きくなると、バギーのいる建物周辺に雨を降らし、外に出ている大砲を濡らす。これで一番厄介な大砲は使えない。

次は雲の力を使って風を起こし、バギーのいる建物にも雨を入れる。隙間の開いた家だから、強い風と雨なら、中まで水が入る。そもそも、家自体も壊せる。たぶんね。

「つ、ええええいー！」

芭蕉棒を振るえば、すさまじい風が飛んでいく。それを雲が増幅し、バギーのいる家へと叩き込まれる。

数瞬の後、木の抉れる音がした。やっぱり壊せたわね。

「ひゃああああー！」

「うわあああ！ 屋根があああー！」

「なんだこの天気は！ 嵐か！」

バギー一味の悲鳴が聞こえる。これで、浸水成功ね。これで、銃も使いづらくなっただけ。

このまま雨が止むまで放っておきましょう。倒せはしないまでもバギー達の体力を削れるはずよ。ついでに私は休憩。大きな雲を作るのに棒を何度も振って、疲れちゃったからね。

しばらくポケーつとしてっていると、男が3人、バギーの建物に近づいてきた。ここの町長、海賊狩りのゾロ、そして麦わら帽の男だ。

なんて組み合わせなのか。麦わら帽の男は海賊だから、海賊狩りのゾロなら捕まえてくれると思って、あいつのいる方に飛ばしたのに。逆に仲良くなってるように見える。そしてその2人と町長も仲良くなってるように見える。どうということなの？

ミラージュ・テンポ。

とにかく今は、隠れて様子を伺うことにするわ。

小雨が降る中、麦わら帽の男が「出てこいバギー！ ぶっ飛ばしてやる！」と叫ぶ。バギーは雨にうたれてすこぶる機嫌が悪そうだった。「なんだてめえは。俺様は今機嫌が悪いんだ。ぶっ殺すぞ！」バギーも叫んで返した。

そして戦いが始まる。いきなり総力戦。怒れるバギー一味対。2人。やっぱり数が多いわね。体力もあんまり減ってないみたい。怒ってるから一時的に力が出てるだけかもしれないけど。

「ゴムゴムの、ガトリング！」

麦わらの男が叫ぶと、すごい勢いで腕が伸び、また縮み、また伸び、と繰り返し始めたわ。その拳の一撃で人が吹き飛ばされるほどの威力。バギーも殴られ、飛んでいく。やっぱり化け物だったわね。この男。力は思ったより強くないけどさ。生命帰還だけ特別に得意なのかな。

ゾロの方は幹部と斬りあってるわね。確かカバジだったつけ。曲芸を利用した攻撃をしてるわ。ジウウシンサーカスを見た後だと小物に見えるけど。

あつ、町長さんがその辺の下っ端にやられちゃった。まあそうなるわよね。

でも、総合的に麦わら達の方が押してるわ。たった2人ですごいわね。あつ、曲芸師が雨で滑って、ゾロに斬られちゃった。これは酷い傷。もう復帰は無理ね。

「な、なんだこいつらは!？」

「どうして俺たちを攻撃するんだ！」

「めしの恨みは深いんだ！」

「何イ!？」

うろたえるバギー一味。麦わらの男は構わず殴り続ける。しかし、食い意地張ってるわね。ご飯が食べたくて海賊にケンカ売るなんて。「うろたえるなお前達！ ゴムには刃物だ！ 連携で攻めろ！ 剣士は俺が殺る！」

「はい！ 船長！」

バギーの声で一味は冷静さを取り戻したわ。でもゴム男は餅塊が使えるのだから鉄塊も使えると思うわ。刃物は意味がないと思うの。

ゾロの方に向かったバギーは、うわわっ。これはすごい。すれ違い様に何箇所もバツサリ斬られちゃったわ。バラバラに落ちる手足や頭。即死ね。

あれ？ でもおかしいわ。血が出てない。まさか生命帰還？ バギーも生命帰還の使い手なの？

って、あつ、動いた！

「がふっ」

なんてこと。斬られたはずの手が、浮いて。しかも、後ろからゾロを突きさした。

な、なんていうこと。このレベルの使い手なの？ 風の心を感じ取り、失った腕を動かすなんて。いや、違うか。風が動いた感じはなかったのよね。まさか覇気？ 私の知らない何かがあるの？

「ゾロお！」

「ふっふっふ」

倒れるゾロ。麦わら帽の男が必死の形相で叫ぶ。思ったより仲良かったのね。

しかしやばいわ。バギー。とんでもない化け物だったのね。でも運がいいわ。やつはゾロを倒して油断してる。これはチャンスよ。バギーは生命帰還や手を操る覇気(?)はすごいのかもしれないけど、打撃に対する防御能力は低い。ただでさえ低いのに、バラバラになってるってことは、全身を使った受け流しもできない。だから決まるはず。

同じことをやるわ。数時間前に麦わらの男を吹き飛ばしたのと同じ。全力の一撃を叩き込む。

ああダメ、動いちゃったわ。

「お前！ ゾロをよくも！」

「何がよくもだ！ てめえから海賊に突っ込んできた癖に」

麦わらの男がバギーに殴りかかる。バギーは体をバラバラにして避ける。そしてナイフを持った手で麦わらの男を攻撃。ほんと器用ね。

対して、麦わらの男は地面の雨水で滑っちゃう。思ったより動きが悪いわ。だから、バギーのナイフに切られ、ちよつとずつ傷が増えていく。鉄塊は使えないみたいね。不思議だわ。

麦わらの男は時おり伸びる手でバギーを攻撃するけど、全部避けられちゃう。地面が滑るから踏ん張りが効かなくて、パンチの勢いが弱くなってるのよね。それも関係あると思うわ。

「ふん。お前の麦わらを見てると、いまましいあの男を思い出す」
「えっ。シャンクスを知ってるのか？」

おっと、戦闘が一旦止まったわ。あの麦わら帽は日くつきみたいね。会話が始まったわ。

でも、これはチャンス。動きが止まっていれば、最高の一撃を叩き込める。

集中。身も心も、私を包む世界に溶け込ませる。静の極意。心と体をピタリと停止させる。

「そうして俺はバラバラ人間になっちまったのさ」

「ふーん。シャンクス悪くねえじゃん」

「何イ!？」

そして、動の極意。力の流れの最高点に、心の最高点を合わせる。「そーいやおまえ、でかっぱなだな」

「黙らっぶけどばー!？」

決まった。吹き飛んでいくバギー。バラけて小さいからすごい勢いで飛んだわ。島を出たんじゃないかしら。

「バ、バギー船長ー!」

バギー一味は叫び、飛んでいった船長を追いかけていく。まあ一部は残ってるけどね。

「おのれ麦わら！ 船長に何をした！」

「いや、あいつが勝手に飛んで行ったただけだ」

「なにイ!？」

「バカを言うな！ 何かやったんだろ！」

そうして残った一味と麦わらの戦闘が始まる。すぐに終わったが、もちろん麦わらの勝ちだ。

戦闘が終わったので、私も姿を現わす。

「ふふつ。お疲れさん。バギーをやったのは私よ。だからお宝は私がもろうからね」

言わなくてもよかったんだけど、一応ね。下っ端を倒したのは麦わらだから、義理で言っておあげた感じ。

「あ！ おまえは！」

ところが麦わらは、私を見るなり怒り始めたわ。しかも腕を振り上げる。

これは、殴るってことよね。

「肉返せ！ こんにやろう！」

やっぱり殴ってきた。当たれば危ない一撃。

でもかわせるわ。何度も見てきたからね。そもそも予備動作が大きすぎるのよ。たしぎの剣技を受けてきた身としては、出だしの早さと工夫が足りない。

「ちよつと、まだ根に持ってたんの？」

「当たり前だ！ 肉の恨みは深えんだ！」

こちらを睨む麦わらの男。性格は単純に見える。裏表はなさそう。うーん。たぶん、ご飯を奢ってあげると言えば、戦闘を回避できるわよねえ。でもさ、相手は海賊。何の恩もないのに奢るってのもねえ。

相手が格上ならそれもありよ。逃げるのももちろんあり。でもね、たぶん、私でもこいつに勝てそうなのよね。戦闘を見た感じだと。こいつもバギーと一緒に。生命帰還とか体力みたいな一部はすごいけど、総合的な能力が足りない。

ミラージュ・テンポ。

「あつ、消えつ」

そもそも見聞色の使えないこいつでは、私を見ることもできない。だからきつと勝てるわ。海賊を夢見る少年に世の中の厳しさを教えてあげましょう。

ルフィVSナミ 意地の戦い

ルフィは膝を軽く曲げ、右拳を後ろに構える。

「出てこい！ 肉どろブオグツ」

肉泥棒と叫ぼうとしたところで、右わき腹に衝撃を受ける。

「ぐくっ」

叫ぶタイミングと合わされたため、棒が腹に深く入ってしまった。ルフィは苦痛に顔を歪ませながら、バギーのいた酒場に突っ込む。

そして攻撃した本人、ナミは驚いていた。棒が腹に入った瞬間、ルフィは体をひねり、衝撃を和らげた。乱流泳ぎにも通じる一瞬の間の判断。それを身につけている。

「ぐくくっ。痛えなこんにやろう」

土煙を上げながら出てくるルフィ。痛いという言葉とは裏腹にダメージは薄い。そのことにナミはショックを受ける。自分の最高の一撃で、この程度のダメージしか与えられなかったからだ。

「見えなくても近くにはいるんだ。だったら」

ルフィは左足を強く地面にぶつけて踏ん張り、右足を後ろに振り上げる。

「ゴムゴムのオ、ムチイイイイイ！」

叫びと共に蹴り出される右足。それは長く伸び、酒場の前にある広場全体を覆うように、ルフィの前面を旋回する。

ナミは通過する足をジャンプで避ける。しかし空気は切り裂かれ、その切り目に沿うようにミラージュ・テンポの屈折も失われる。

なんてデタラメな生命帰還。こんな方法でミラージュ・テンポが破られるなんて。

「そこかア！」

切り裂かれた空気に、ナミの身体の一部を見つけたルフィ。ゴムのように伸びる腕で殴りかかる。

「くっ」

ナミはミラージュ・テンポが消えてショックを受けていた。しかしコージ王国での経験のおかげか、体は無意識に反応できた。

ナミは芭蕉棒を振り、その反動で拳を避ける。足で地面を蹴るよりこちらの方が速い。また、足は地面についているため、避けてすぐに反撃できる。

私には経験がある。あいつの分かりやすい攻撃には当たらない。ミラージュ・テンポがなくとも私の有利は変わらない。

自信を取り戻したナミ。全身に勇気が満ちていくのを感じる。

「ずええあああー！」

その勇気を力に変えるように、奇声を上げてルフィへと駆ける。ミラージュ・テンポで身を隠していた時は、声や足音が出ないようになっていた。これでは真の意味の最高の一撃が出せない。本当の全快のパワーをぶつける時は、音も利用した方がいい。

「ふんー！」

右腕が伸びたままのルフィは、その腕をムチのようにしならせてナミにぶつけようとする。しかしそのしなった瞬間をナミは察知。すぐさまジャンプの体勢を取り、ドンピシャのタイミングで跳んで腕をかわし、その跳躍の勢いも合わせて棒を振り上げる。

「うおおおおえええいうっ！」

ナミは奇声を上げて棒を振り下ろす。狙いはルフィの脳天。

「負けるかアー！」

ルフィは棒に頭突きで応戦。棒と頭がぶつかり合う。

「ぐっ」

「くうっ」

ナミはルフィの頭の動きから力の流れを予想し、最高の打撃を加えたつもりだった。しかしルフィの眼光。そこから来る意志の力によって、予想外の揺れが生まれた。この揺れには対応できず、完全な力は伝わらなかった。むしろ自分の腕が痺れてしまう。

「くっ。今のは何？ 覇気？」

「につしっし。い、痛くねえぞ。そんな棒！」

ルフィはうろたえるナミを見て話しかける。言葉とは裏腹に頭に大きなタンコブができており、目には涙が浮かんでいる。痛いのは間違いないようだ。

しかし、ミラージュ・テンポは破られ、声を利用した最高の一撃でも倒せなかった。ナミはまた不安になってしまう。

「ゴムゴムのオ、ガトリングウウウウー！」

その隙を逃すまいと、ルフィはゴムの反動を利用したパンチの雨を振らせる。

ナミは棒を利用した反動、且つ最小の動きでパンチを避ける。数は多いが単純なバネの振動。流体や泥を扱うナミにとって予測は簡単だ。

しかし素早い動きは長く続かない。徐々に体が追いつかなくなっていく。まずい、当たっちゃう。

いや、だったら。

「サアアアアイー！」

「うぐっ」

先ほどのお返し。ナミは拳を避けるのではなく、棒でぶっ叩いた。ナミの腕が痺れるが、ルフィも痛そうだ。パンチが止んだ。

しかし、ルフィは歯を食いしばり、再び構える。

「ガトリングウウウウー！」

「サアアアイー！ サイサイサイ！ サアイー！」

ルフィは叫び、拳を繰り出す。ナミも奇声をあげながら、自分に向かってきた拳だけをぶつ。

意地と意地のぶつかり合い。両者とも全力で拳を出し、また棒を振るう。

打ち合いの勢いは互角。しかし互角のまま強くなっていく。動けば動くほど、疲れに反比例するように、力が増していく。それをなすのは意識の覚醒。無限に広がる意識。ニュートン物理を脱し、波動の世界に踏み込む。そのに先にある意識が、力を与えてくれる。もつと先へ。もつと深く。方や愛。方や覇王。

しかし、まだ何かが足りなかった。不意に、両者がバチンと弾かれる。

「ぐっ」

「くっ」

まるで爆風を受けたように吹き飛ぶルフィとナミ。ルフィは受身を取らず民家に突っ込むが、ナミはそうはいかない。芭蕉棒を利用して、空中で体勢を整え、吹き飛ぶ身体を上方へ逃がしていく。旋回する鳥のように空を舞い上がる。高さは50m近くまで達する。このまま落ちれば痛い、芭蕉棒で風を作ればゆっくりと降りられる。

「はあ、はあ、はあ、はあ。くううつ」

降りた所で、腕の痺れに気づいたナミ。芭蕉棒を落としてしまう。すぐさま拾おうとするが、手が握れない。体も重い。先ほどのやり取りで全身が疲れている。

「やるな、おまえ。はあ、はあ」

ルフィも民家から出てくる。拳はパンパンに腫れ、血を流しているが、握った手にはまだ力がある。疲れもナミほどではない。

何故この状態で拳を握ることができるのか。ナミの腕よりも酷い状態に見えるが、実際に戦えるのはルフィの方。意識が肉体を超越している。死を恐れていない。

こういう相手と戦うべきではない。ナミの本能が警告する。

「はあ、やめるわ。私の負けよ」

「なに?」

まだ一発ももらってないが、それも時間の問題だろう。何よりルフィの戦い方に恐怖してしまい、戦意を失ってしまった。

「あんた強いわね。私に勝った褒美にご飯奢ってあげる。話とか聞きたいし」

「えっ、いいのか!?!」

ルフィは一瞬で戦闘態勢を解き、笑顔になった。ナミの予想通り、ご飯を奢ると言えば戦闘は回避できたのだ。

「お、おい。俺を忘れん、なよ」

「ゾロおおおおお!」

と、ゾロが広場の隅の方にいた。腹から血が流れるが、意地で立っている。その肩には気絶した町長を担いでいた。